

6-136

文學博士坪内雄藏著

小説神髓

松月堂發行



語をつくりしかば小説盛ん行れて都鄙の老若男女と選ばざるをあらそふて歴史を  
 ひもとためてくつがへりもてたやせうどなほ今日に比るとたに及ばざること遠  
 るべし其故のそもいふ母といえむ母文化文政の比にありては讀者もいくらの贅澤  
 みてたゞ秀逸なる著作をのみあがなひもとめて讀たるうら母他の拙劣なる小説歴史  
 の自然に優者に歴せられてせし行たる、ことをば得をむあしく原稿のまゝ、よて終り  
 もしくは板木のなり、後にも紙魚の餌食となるもの多くて世にあらたれしは稀な  
 るから其類其數現今に比をきば幾分う少うりなんかしまうる母今日の之に異なり小  
 説といひ歴史とたふいへばいなるる拙劣な物語もまといひなる譯傳にざる情史にて  
 も譯案よても譯譯ふても譯刻よても新著よても玉石を問を優劣を選ばざるをなかな  
 けさまにもてたやせられせに行かざる、妙あらざるや賢ふ小説全盛の未曾有の時代と  
 いふべたありきまば戯作者といえる、輩も極めて少少ならずされどもおほかたの皆譯  
 案家よして作者をもつて見るべたものいまだ一人どもあらざるあり故に近來刊行  
 せる小説歴史のこきもわれも馬琴種彦の精粕あらむの一九春水の廢物多るり益しこ  
 のあひだの戯作者流のひたまたま幸望の語を師として意と勘懲ふ發せるをむ小説歴史

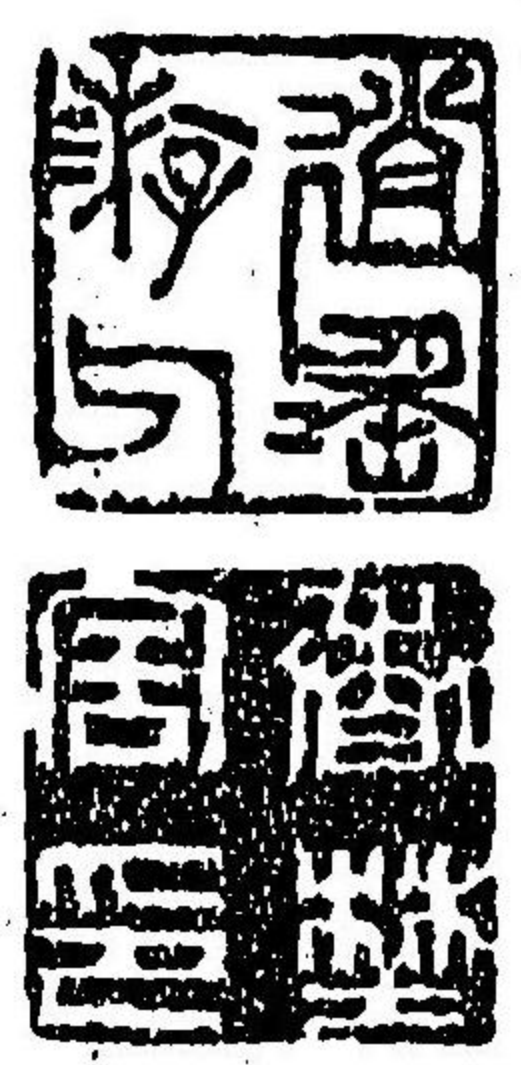
の主腦とて、ろえ道徳といふ模型をつくりて力めて脚色を其内にて工風なきまく候  
 せるるら、強ち古人の精粕をば管むとせるよりあらざりぬと素と其範圍の廣るらね  
 ば覺えず同輩同趣向の歴史をものせることあるべし是れは遺憾ならざらむやきにあ  
 れ斯やうにありもて来るも其罪偏に拙劣なる作者の上よりありといえむ歎い活眼を  
 死四方の讀者もまたあづかりて力あるなり其故のいふ母となれば古來我國のならえ  
 一として小説をもて教育の一方便のやう母思ひてきたり母獎勵勸懲をば其主眼  
 なりと唱へながらあや實際の場合に於てはひたすら殺伐慘酷なる若くは頗る殺戮を  
 る物語をのこめてよろこび他のうたくるした筋の事、目と住めてたし見る人稀なり  
 ちかして作者の見識をた總べて輿論の奴隷にして流行の犬ならざるをなれば競ふて  
 時好ぶ媚むとして彼の殘忍なる歴史をのみ彼の陋穢なる情史を綴り世の流行よまた  
 がふものから勘懲といふおもてむたの名義もなきがぬ勘懲がたきにまひて勘懲は主  
 旨を加へて人情をまげ世態をたためて無理なる脚色をぬきこと取りたり此母於てか  
 拙劣なる趣向のますく拙くして大人學者の眼をもつてはわたくし讀むよたへがた  
 かり是併ぬがら作者と讀者もたゞいたづらに小説を弄りて真に歴史の主眼をきとら

を故に諒妄なる旧慣をばむぬしく墨守せざるに因るのミ豈笑ふべたの極なりや否哉  
 しむべたの限なりややおれれ幼稚より稗史と嗜みていとまある毎に稗史を聞いて貴  
 光陰と浪費すのみと己に十餘年及び母たれば流石に古今の稗史を關して得たる所  
 もまぐぬるらむ且また稗史の真成の主眼を果して何等の邊にあるやも稍會得ぬと  
 信するからいと嗚呼がましれた所爲とい思へど敢て持論を世に示してまづ看官の感状  
 とを兼て作者に蒙と啓たて我小説の改良進歩を今より次第に企圖てつゝ竟ふに歐  
 土の那ベル(小説)を羨望し繪画音楽詩歌と共に美術の瓊頭に煥然たる我物語と見ま  
 くほりを希ふに四方の學者才人が庸劣を咎めらまえては熱衷と論旨をめぐり、熱  
 讀含味せらるるも是れあまの息が幸福のまじり我文壇に幸福をばしあぬかしこ

明治十八年といふと一の三月のたじめつる

春のやが南窓再筆をえしと一

道遙遊人去るに



小説神髓上巻

目次

小説總論

美術といふなるものありやといふ事につきての論  
 小説の美術ありといふ理由

小説の變遷

小説の起原と歴史の起原と同一ありといふ事  
 眞の小説の世に行える、前に羅マンズといへる一種  
 の假作物語の世にもてとやさるゝ事  
 羅マンズ衰へて演劇盛へ小説盛へ演劇おとろへさ  
 るべからざる事  
 小説と演劇との差別

小説の主眼

小説の主眼の専ら人情にある事

小説の種類

模寫小説と勧懲小説との差別  
時代物語世話物語等の事

小説の裨益

小説は四大裨益ありといふ事

上巻目次畢

小説神髓上巻

文學士 坪内逍遙述

小説總論

小説の美術たる由と明らめまくせばまづ美術の何たるをば知らざる可らざるありあま  
 美術の何たる明らめまくるにせよ世の謬説を排斥して美術の本義を定むるをばまづ  
 第一必要ありといは美術は關する議論のごとたれ古今よきまづありといへども總  
 じて未定未完にして本義と見るべきもの稀なりちうきころ某といへる米國の博識  
 がしが東京の府下母於くまむく美術の理を講べて世の謬説を駁さされたれば今また  
 こゝふ事あたらしう同くやうなることをのべて看官の目をまづらえはぬいと心まき  
 業ふ似たれたる某がいえれたり美術の本義は抄出し其あたれたる否や議論じ  
 ておのまき意見をも陳せし思へり某のいえるやう世界ノ開化ハ人カノ效績ニ外ナ  
 ラズ而ノ人カノ效績ニ二種アリ曰ク須用曰ク裝飾須用ハ偏ニ人生必需ノ器用ヲ供ス  
 ルヲ目的トシ裝飾ハ人ノ心目ヲ娛樂シ氣格ヲ高尚ニスルヲ以テ目的トナス此裝飾ヲ

名ケテ美術ト稱ス故ニ美術ハ専ラ裝飾ヲ主腦トナスヲ以テ須用ナラズトナス可ラズ  
心目ヲ娛樂シ氣格ヲ高尚ニスルハ豈人間社會ノ一緊要事ナラズヤ之ヲ要スルニ二者  
皆社會ニ缺クベカラズ而ノ其異ナル所ヲ觀ルニ須用ハ真ニ實用ニ適スルガ故ニ善美  
トナリ美術ハ善美ナルガ故ニ實用ニ適スルニ至ルノ差アリ譬へバ此小刀ハ甚ク善美  
ナリ即チ須要ナルガ故ニ善美ナリ彼ノ書画ハ須要ナリ即チ善美ニシテ氣格ヲ高尚ニ  
スルガ故ニ須要ナリ是ニ由テ之ヲ觀レバ美術ニ於テ善美トナス所ノモノハ其美術タ  
ル所以ノ本旨タルヤ明クシ云々といえれりまた其のいえる、やう美術といふ人文  
發育の妙機妙用あり何を以てか之を謂ふ美術ハ人の心目を娛樂し氣格を高尚に  
するを以て目的となせしあり心目娛樂するが故母友愛温厚の風を起し氣格高尚なる  
が故母貪吝刻薄の狀を伏し其數形に顯る、や繪画彫刻陶磁漆器等の神韻雅致とあ  
り其音聲姿態を發するや詩歌音樂踏舞等の幽趣在境となる夫れ人幽趣在境を達者  
神韻雅致に對峙するや悠然として清絶高遠の妙想を感起せざるは是之を美術の  
妙機妙用と謂ふ邦國の文明また實此機用を起因すと謂ふべきなり美術の事たる豈  
亦た社會の一大緊要事ならざらんや云々といえたり蓋し後の某氏の先の某氏の

説を承く之ヲ細説せしものといふべし

比母兩某氏の言のごとく美術ハ人文發育の機用あるに取て疑ふ母およびされどもま  
た退いて考ふまは或ハ美術の本義母關し論理の謬誤あるを保たざらばひと通し其  
理を論じて予が疑團と教へつべし夫を美術といへる者ハもとより實用の技にあらね  
ば只管人の心目ヲ娛樂し一めく其妙神に入らんことを其「目的」といふべき善なり  
其妙神に入りたらんのみを觀る者ハのづから感動して彼の貪吝なる欲をこぞれ彼の刻  
薄なる情を脱して他の高尚なる妙想とを樂むやうにもなりゆくべけれどこゝは自然  
の影響にて美術の「目的」といふべしとをいふる獨断の結果にして本来の主旨と  
はらひ難らざるも一此説はもて非なりとせば世の美術家といへる、輩ハ彫像師母まは  
画工にまはまづ其工をなさるにあたりて「人文發育」といふ模範をつくりて其範圍内に  
意匠を限りてまうして工をなさるるべしとをいふべしとをいふべしとをいふべしとを  
の實用技術家の小刀を造ると見るのみ管費用に適せむとを目的とせるが故に「よ  
くさる」といふ事を標準とし其小刀を造るのみならず美術家もまた之をいふべしと  
も一其目的とする所ハ人文發育といふものとせしむるべしとをいふべしとをいふべしとを

も一其目的とする所ハ人文發育といふものとせしむるべしとをいふべしとをいふべしとを

木を過く折にも常は人文發奮を其標準とせざるべからずこれ豈至難ならざらむや只管神入らまくりし工風を盡して寫してたゞ名画をなすこといと難く母別よりやうの極んできて其意匠を以て求縛をなすは精妙完美の画をなすはますかたくりよくむづるべきまは美術といへるもの他の實用技と其質異してとじめよりして規矩をまうけて之と造るべりもあらざるを其妙なりと神に通ずる看者をしてまらむ神飛び魂馳せるが如き幽趣在境を感ぜしむるは是本然の目的にして美術の美術たる所以なきとも其氣韻と高遠より其妙想を清絶おしめて入質を尚うするは是偶然の作用おして美術の目的といふ可らずまは美術の本義の如きも目的といふ二字は除きて美術の人の心目を悦ばしめ且其氣格を高尙ふるものありといへばすまそち可くもし否きまはすなそち違へりこは是些細の論に似たれどいさゝの疑ふ所を陳べて世の有識者お質をなすなり

世に美術と稱するもの一ふして足らむりに類別して二をなすべし曰く有形の美術曰く無形の美術こまなり所謂有形の美術は繪画彫刻木鐫鐵錫器建築園治等をいひ所謂無形の美術は音楽詩歌戯曲の類はいふ而しては踏舞演劇の二つひのこの二種の質を併せくもて心目を悦ばせ蓋し演劇踏舞のたぐひは詩歌戯曲を活動なし且音楽を活用して其妙技をしも奏はむなりいまもむるしも萬國一揆みを演劇をめでよろこび踏舞を愛するもむべからむや美術の種類のみまなくを概ねかくの如くといへども其主腦とす可所をといへばみは是眼を悦ばしめ心を悦むしむるに外ならざるありたゞ其美術の質よりと専ら心目を悦ぶるものあり専ら眼を悦ぶるものあり専ら耳を悦ぶるものあり譬ば有形の美術の如きは専ら形を主として人の眼を悦ぶるものと音楽唱歌の耳を悦ぶる詩歌戯曲小説のたぐひは専ら心目を悦ぶるを其本分となはがごとしざるから母有形美術の専ら色彩と形容とを主眼となし其工風をしも鍊ることおまじとも音楽唱歌の之母反くまづ専ら耳を主として其意匠をあん凝らむなりを詩歌戯曲のこれとも異して主として心目を悦ぶるが故母其主腦とする所のものも色彩にあらむを音響にあらむ他の形おくまた声をなす人間の情すおち足なり昔の人を詩と論とを有声の畫といひしにあらむや畢竟詩歌の描きがらくまは見えがらくは情態をいふと細やうに寫しだして人は見えしむる欣賞せしなるべしと何者か此世の中母て最も描きがらくた者ぞと問む母故の人間の情後ろと描きがたかるものならむ善惡愛惡

を併せくもて心目を悦ばせ蓋し演劇踏舞のたぐひは詩歌戯曲を活動なし且音楽を活用して其妙技をしも奏はむなりいまもむるしも萬國一揆みを演劇をめでよろこび踏舞を愛するもむべからむや美術の種類のみまなくを概ねかくの如くといへども其主腦とす可所をといへばみは是眼を悦ばしめ心を悦むしむるに外ならざるありたゞ其美術の質よりと専ら心目を悦ぶるものあり専ら眼を悦ぶるものあり専ら耳を悦ぶるものあり譬ば有形の美術の如きは専ら形を主として人の眼を悦ぶるものと音楽唱歌の耳を悦ぶる詩歌戯曲小説のたぐひは専ら心目を悦ぶるを其本分となはがごとしざるから母有形美術の専ら色彩と形容とを主眼となし其工風をしも鍊ることおまじとも音楽唱歌の之母反くまづ専ら耳を主として其意匠をあん凝らむなりを詩歌戯曲のこれとも異して主として心目を悦ぶるが故母其主腦とする所のものも色彩にあらむを音響にあらむ他の形おくまた声をなす人間の情すおち足なり昔の人を詩と論とを有声の畫といひしにあらむや畢竟詩歌の描きがらくまは見えがらくは情態をいふと細やうに寫しだして人は見えしむる欣賞せしなるべしと何者か此世の中母て最も描きがらくた者ぞと問む母故の人間の情後ろと描きがたかるものならむ善惡愛惡

哀懼の七情も其皮相のみをあらわすに過ぎぬ。さまでむづかきことおもあつねど其神髓を見えまくなりせば、畫工の力も及ぶべくもあらざる。否、俳優の手をうるともあらず。しがたれこと多かり我國にては演劇も列国ヨボといへる曲をまうなて形容状も演一がたき、豈に解もて一々寫しおさし、隱微の條を演るをらすや、こればかりにても戯曲の長處はまづひと通りあられつべし。我國の短歌長歌のくひひの所謂ポエトリー(泰西の詩)と比ぶるとき、さきさきとめく單純なるものあるうら、僅に一時の感情をいひのべたるに止まるものにて、彼の述懐の歌(エモウシヨナルポエトリー)若くは哀悼の歌(エレジヤツクポエトリー)に似たり支那の詩もこれをおなじく概ね單簡なるもの多かり長恨歌琵琶行の如きもの、「ポエトリー」に似るものうら其脚色も淡々しくして泰西の詩との性質異なるに過ぎぬ。泰西のポエトリーのそもく、いつあるものぞといふふ其種類もとより一にしきたらず歴史歌(エピツクポエトリー)と稱するものあり物語歌(ナルレチイブポエトリー)と稱するものありあるひは教訓を主とする歌あり(ダイダツチツク)あるひは諷刺諷刺を旨とする歌あり(サテリカル)音楽を伴ふべたものを梨リツク(歌曲)と名づけ劇場に演はべきものを傳奇といふ(ドラマ)なり

お此外にも細列せば其類かづゝあるべきをさきさきといふは繁雜を厭ひま略さぬ之と要する。おポエトリーの我國の詩歌に似たりはよりむむろ小説に似るものにて、專ら人世の情態を寫し、いざは主とほみものなり、我短歌長歌のくひひいさゆる未開の世の詩歌といふべくつして文化の發揚せば現世の詩歌といふべからざるをかくいへばと皇國歌をいと拙いと罵るよあらねど總て文化發達して人智發達し進むにいたるに人情を變遷し、いくらか複雑にあらざるべからざる。母一への人の質朴に其情合も單純あるうら、僅に三十一文字もて其胸懷吐けりしうどをふこのごろの人情をいさか、數十の言語もて述盡はべうもあらざるよりや、感情けうへ數十字もていひ盡はことと得たまはとて他は情態を寫し得ざれば、いさゆる完全の詩歌あらねば彼の泰西の詩歌と共に美術壇上にたがたたるべし。是豈あたらしきことをらむべきにこそ過にこそ外山矢田部井上の大人たち、こゝに遺憾を抱かむつ、新體詩抄一部をあらわし世に公出されたりと讀者もしポエトリーの趣はあらまきなりせば新體詩抄をはじめとて東洋學藝雜誌に掲載せし新體詩をらび井上眞幹大人のものされた長篇の詩とあてせ見れば、其一斑に趣とば得く窺に庶幾かるべし



夫れ小説の無韻の詩ともいふべく字數に定限なき歌ともいふべし世は淺學を以て  
ありて詩の主腦とする所のもの偏母韻語にありと思へど是をたゞたひがこ  
とあり詩の骨髄の神韻あり幽趣在境と寫し得るは詩の本分のすまを盡せりまどて  
か區々たる韻語をんととまひく用ふは要あらんや英國の詩仙彌ルトン翁の風よこの  
みとを切論して有韻の詩を排斥す無韻の長詩(プランクウパルス)を工風とせしを  
ぬ思ふは韻語を用ふはおもも詩吟吟誦せしあるふ有りての頗る要用なりならまど  
現世のごとくは黙讀してたゞ通篇の神韻をばめてよろおべる世となりてのさまで緊  
要なるものとも思ふを物母とて之をいへば工工用ふる丹青にひとしくなくと  
も事足るべたものなりされば小説神史ふしてもし神韻に富むよちらむ歌之を詩  
といひ歌と稱へく美術の壇上よちらむるも敢て不可なきのまらあらてまおとに  
當然といふべきなり畢竟小説の旨とすたところの専ら人情世態にあり一大奇想は餘  
を繰り巧人問の情を織なし限なく窮なき隱妙不可思議の源因よりしるまら限  
なく定りたる種々さまざまなる結果をしるいと美しく編いだして此人の世の因果は  
秘密を見るがごとく母描きいだして見えがたきものと見えしむるを其本分とらむは

ものありうーさきば小説の完全無缺のもの母於ては書かざるべきものをも描寫し  
詩に盡しがたきもの状をあらえり且演劇ふて演じたは隱微の條をも寫しつべし蓋  
し小説に詩歌のごとく字數に定限をらざるのまか韻語をいふ械もあくとまら  
演劇繪畫母反してたゞちに心母斬ふると其性質とするものゆゑ作者が意匠と凝ら  
つべに範圍すおふる廣しといふべし是小説の美術中其位置を得る所以母して竟に  
の傳奇戯曲は交駕し文壇上の最大美術其隨一といえれつべき理由とならむも知る  
べからむ

因云菊地大麓大人が謙さきむる修辭及華文と題せる小冊子あり詩文に關  
はる議論の如きは最も精到と思へるれば左ふ抄出しる本文は不足を補ふ

詩の區域に屬する文章其類頗る多し而して其共通すべき品格を一定するは難事  
たるは從來歴驗する所あり然して句に節奏ある者と専ら詩に限るべからざるは  
散文よても毎ふ高尚なる詩言を有する者は多た母て之と明瞭にするを得るなり  
況んや句に節奏を帯るものにして選て詩中列すべからざるも多きを也

(中略)蓋し詩は題目母適する所の真正な物景の新し一ありとら而して此の一種

古今の詩文上に歴見して曾て廢せざる所はものなり即ち外間を物象人事の發跡形勢等として妙母心神と發揮する者はより詳之を云へば外間を森羅せる所は品物及び天然不測は力と殆ど其競争と運うはる人間は真狀人生忍ぶ可うらざるは悲哀。克勝。愛情。卓絶。高聳。不朽の垂業と期はる至切は志念天然と生存とは至大至變。至錯並に至神。理外を範圍に屬し宇宙を管理すと認識せらるゝ上帝神明。天界茫茫は形容。地理幽々は景況。歲月時季の順環。人間社會。其君將英傑を存狀。事業。變轉。國運消長は機を決する戰闘爭流。人間は開明進歩を任とはる有力者乃勤勞。人事に發する至大反常は現狀等是は屬す更之を概言すは凡そ人の感覺を徹底して跌宕。威赫。崇高。老實。矯絶。悲哀。快活。揮發着色と稱すべき万般は皆包まざるなき若し夫れ世間俚俗は要件は其生存は道久くべうらざるを以て人々之を注意すること常ありと雖も其人心を感興籠絡するまと違ふは外間に屬する事物は如くある能わざると以て自ら詩は真題を列することを得ざるなり且學術上乃與件。講學は屬はる事物。對數比例の表。幾額の算計。分子の分量等。世界に於て最も重要な事實なりと雖も亦詩の題目に如くことを得ざるなり

(又略)節奏ある言語を將て高尚ある題目に適はるものとあまの世の常母云ふ所なるが思ふに散文体は言語の之を人世に喩ふるに猶其平時は操業に於るが如く母して人心の優悠閑適なるを表する母適するものとを然して詩は散文に於るは猶踊舞は行歩に於る如く然もども散文は始て文字組織は一方法とあり之を機巧に運用せる以求無數は著書世に播布し而して其題目大に詩に適して其幹旋形容は妙殆ど最勝の節奏文章に均しきものあるに至り(又略)但し近世散文は著書と雖も其体の最も高尚は詩想母根せるもれにのみ只其詩と異なる所の嚴密なる節奏は兼て和諧せる言語を一任し以て自由に流出變化せしむるも是の云云

又歴史歌(委ビツク保エム)は條下よいく

時が新古を論ぜを國は東西を問えず凡そ記事は本色の必を其詩史は精神骨髓たるあり即ち心志と鼓舞激勵はる事業は説話或は早くして虎口を脱し水火は變故に遭遇し注眸手に汗を流る如きは狀或は讀者として痛腕腸を斷たしむるの境或は初め母艱難辛苦を經歷し終りに康樂を享くるに至る男女離合は情話等。能く人な心意を奪ひ其本境を脱して夢境に入るは想あらむ真に此術を變幻百出は

妙に到らぬる良器具と云ふべきなり而して此種に屬する詩文の各状并にホー  
 マーよりバヤジルに至る間に發願せし文体は沿革及び中古は小説(羅マンズ)よ  
 り近時乃人情話(那ベル)に移れる實況等の皆精密は詳解を要すべきも乃れれど  
 も此等の列は文字史に於て論究すべきは大業にして茲は詳説するに違あらざる  
 して此種の著書は方今近体格として尚ぶ所著書の専ら其本色と人物とぶたる活  
 潑ある状をして益々人生の實事と適合せしめ以て世上万物は消長並に人間日常  
 其情偽としく讀者の心胸より了然としてまた事實と相違せる考思あらしむるよ  
 あり因て此等其著書再表せる男女の動作事業の真母其風采を寫し出すを以て讀  
 む者をしと親く人世の情態に接するを感發せしむべし而して若し此風采を  
 讀者が皆て閱歷せし同事實と相符合せしむるときは讀者の爲に瞿然快たるを  
 覺えて自ら鑒むるの心を發すべく又人間至樂は事にして並に眞理を遠くざるも  
 非ならしえは何等は種類は文字を問を常母無上完全の地を占むるべきありテ  
 ホウ氏と世界實際は形状を表する母善く史詩體の文章を適用したる人母してス  
 コツトアルワア(笠原をいふ)等諸氏も亦歴史乃教授方は此體と併用せり然し

て小説家が教導の目的とする所の通學勸善懲惡と旨とするはなるが實母此目的並  
 母其他は主旨も亦此術は進歩母因て愈々高上母達を多を得べたあり然れども此  
 種乃文字の人間無涯は嗜好母供すべき者も其事の理に合ふと合えざることを  
 問を第一時風乃沿革母隨て之と相終始をべきなり

### 小説の變遷

小説の假作物語は一種にして所謂奇異譚は變體なり奇異譚とは何ぞや英國にて羅マ  
 ンスと名づくはもはあり羅マンズの趣向を荒唐無稽の事物よりとりて奇怪百出もて編  
 纂し尋常世界母見えきたる事物の道理に矛盾するを敢て顧みざるもはみどある小  
 説すなち那ベルに至りては之と異あり世は人情と風俗を以て寫しを以て主腦とあり  
 平常世間にあるべきやうな事柄をもて材料として趣向と説くもはありこの  
 只概略は辨するから尚解しがたれ由もあらえど其詳細は本義のごときを志むらく  
 之を下回らば讀りてまづ變遷の次第を説くべし

を借し惟みる母小説野乘は行たる、其源遠く遼馬たる上古は時代ありといふ  
 べし其然る所以を知らなく欲せば試し社會の淵源に遡りて其状態を察せざる可らず

上古の社會の狀態のいふといふに東西人をなむらうす南北地異をみよも保つて一  
 個の家長が尊崇して之を會族の長とみよこと人間社會の通則ありう、れば戰闘いと  
 烈しく優勝劣敗急激な未開野蠻の世にありて、猛烈荒蕪の間に起りて俄か一家  
 の主長となり忽ち一族の首となるも或はすくなくあさむるあり斯うは性質の家  
 長にして己に會族の首とありまば其子孫等にもつたる、何等の事柄状以てす乎  
 想ふにこの世が經驗おしたは艱難辛苦の事情のさらへ其武功などを語りつべし  
 しく此等の物語の其人またしく經驗あり若くは親く見聞せよ真實の事蹟に相違な  
 きと子孫が之を傳聞しまた其子孫に語り及びてあるひに記憶の誤謬より或は附  
 會の原因して竟に事實の體を亡ひ幽々奇怪の物語を長く口碑に傳へ存じし鬼神史  
 (魔イソロジイ)神代記の基をひらく是上世の通則よしとまた怪むし足らむと雖も事  
 のこゝに至るよの別原因のなきを得むや今こゝろのみ之を思ふ母其原因とあり  
 たるもれおよそ三條ありと思はる譬は會族次第よりさるるて勢強大なるよいた  
 せば人の心おのづから傲りて些々たる事をも巨大にいひまゝ他の會族に誇るも乃る  
 たり、まば祖先の履歷の如き故意に附會の談を加へていと大業といひおはべし是

第一の原因あり又人間のうまきながらに奇異が好む一切なるものなり斯うれば別に  
 其要なくとも假作の談話をつくりまうけて史傳を誤るまもあるべし是第二條の原因  
 ありまうして國歩やうやく進みて稍文明の世界となりまば其國君といえる、やから  
 下賤の匹夫のなりあがりをお太祖ありといえる、まば快からぬことに思ひて附會  
 の説をつくりまうけて太祖の事蹟を誑えむと況んやこれらの時代はたゞの敬信の  
 念深かるから故意に物語を假作せむとも自然に祖先を神といひまゝ天孫ありしと思  
 へるまや是れ諸國の信じがた神代史などいふもれある第三條の原因なりうし斯  
 うまば上古の魔イソロジイ即ち鬼神誌といへるもの所謂羅マンス(奇異譚)の濫觴  
 よく其傳おほくも假作ふいで若くは訛傳ふなりたることもとより疑おきよ似たりき  
 りあれ所謂神代史(鬼神誌)のものとこそ真實の物語ありて決して遊戯の作らあらねば  
 後の所謂奇異譚といはれず、其質不と同一なり其用のまたいたく異あり蓋し謬信訛傳  
 の久しき後世の人其傳記の妄誕あるまば怪まざるありこゝをもつ後の世乃人此種乃  
 書を傳ふ信じて曾て小説視するもれなきま、恬然正史を卷たれめいといとうや、し  
 く之より、まば國家の權輿を穿鑿すは材料とすすまとなりたり或は神代史(魔イ

ソロジイ)を解釋して太古の羅マンズ(奇異譚)といふものあれどもこのまた甚しき  
誤謬なるべし夫れ神代史の荒唐をきども其質小説といふもあつたらむ其記載せる物語  
のもとより全く事實をあらねどもまた虚構ともいひかたかり假作の諸譚と記傳の事蹟  
と相混淆して事實を粧ひもて史体をなしたるものなり其質あつたは正史に屬しあ  
らむの小説の類はものあり此をもて考がふれば正史の本源は神代史なり羅マンズ  
(奇異譚)の濫觴も神代史あり史と小説との其源もあはれ只累世の變遷もて今日の差  
を生ぜしのみ

まかりありて文運のいまだ開きざりし比ありては世々の史傳を傳ふるもの必  
唱歌を用ひたりき蓋し文字の用は未だ華記の法をも未だざりなる上古蒙昧の世は  
たゞの史傳を詩歌に綴りたりて子孫に傳唱せしむるとは最も簡易利便にして誤謬す  
くなれ法ぞと思へりざる程に唱歌師等が史傳を唱歌のものすは亦臨みてまづ第一  
記傳すると譜誦するに便ならむことを望むが故に自然に用ふる言語のごときも成  
るべく平滑流暢にして吟誦をさむに便なるをむかふならみ用ひしなるべし且又行  
文優雅にして閑麗婉曲なるに於て人の注意を促がすこともまたこのづから多り

うら唱歌師の力えて巧妙なる文句を綴るの意をさぐるべし然るに一唱人情をばよく表出  
すは文句の如きの總べて活潑婉麗なるうらひとすは情を寫さむとて事實を在るも多  
かばべしうらうらとまさりて虚飾は加へず漸く時好に媚ぶる程に唱歌の傳ふる史傳の  
事蹟のやゝ本色を失ひつゝ其本来の傳記に比すれば大異小同なるに至らむ是れ  
まづら神代史鬼神誌が全然正史の体を脱して排悶の料となりたる時めく即ち小説の  
濫觴なりなり

希臘國の詩仙哈マアが著しとみりヤツド物語のごときも其源は土ロイ神聖史  
よいでこれども其編述せる事蹟も於て頗る異同の多しと聞く

かくすること幾星霜文化の度次第に進んで書よみ書うく道ひらなて己は其國に正史  
といふもの全く備えりたる後ありても尚傳唱の法を存して奇譚を唱歌に綴りな  
て吟誦をすこと行なれぬものも是もて此比の唱歌を以て必要なる史傳を傳ふる  
法と思えず玩弄物のやうと思ひて只奇なるをのみ求むるうらうら唱歌師もまた此意  
を推してまはくものまが意匠をもて奇なる物語を編成せしことごとしやういひ  
やして虚名を費らむと力むることあり此時よりして正史なる羅マンズ(奇異譚)世に

現とせられども亦此時代の羅マンズの總べて韻語のみ採用して詩歌の体よものせしうら今のいさゆる羅マンズと其名おなじしく体裁異なり

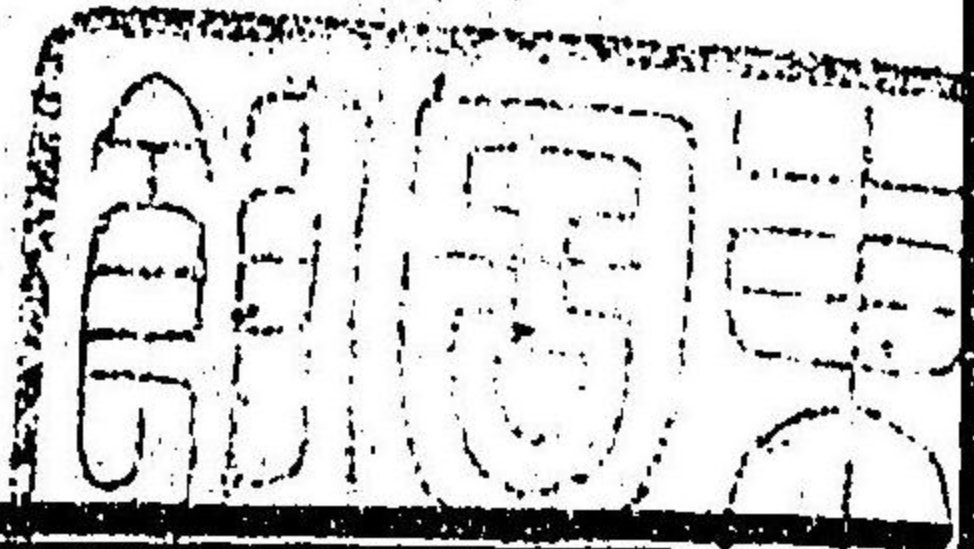
さる程一羅マンズの種類もいつしういろくふなりであるひの滑稽と主とするものありあるひの真事らうもてなすもあるべし然して興情殺伐うたぶく時よの武勇をうたれり羅マンズ出て時好柔弱は流るゝ國ふの宗旨は關する物語はあらすの情事ふ關する物語あらる此をもて那マン人種の羅マンズよの勇士の偉業をのべたるもの多く素遊時代の古詩篇よの宗旨は關するもの多かり我皇國の羅マンズは前の二ツふ相反して佳吉といひ伊勢といひまゝかの式部の源語のごとくも専ら男女の情事をのべたり蓋し優遊文弱なは當時の興情は應ぜしなるべし之を要するふ此ころよの人と亦奇異を好める故ふかりふも時好は投合せは奇異なる物語をもつ時よの世の人よるこびもてあそびて敢て妄誕無稽をどがえき且實際の事柄といふ大は矛盾をもちとありとも却りて之を奇なりとてへて怪み訝る事なきは作者もまほく奇を求めて王風を賞し文を練りてひさきし新奇の脚色を結構なきまぐ企つべしさのあれ此此の物語のひらぶる時好は媚ぶるをもく其目的といはなしなるうら美術の主旨など

あるべうもあらむ且のものを物語の真似ざるを似るとを問えねば咄々怪事を綴りだして恬然あやしむ体なきのふりなかくよ之を得意とせり讀むものも亦之をめで、毫もうぐふさまもあなれど文化いま一としは進むよ及び世の人ややく羅マンズの荒唐無稽に倦むよしあり羅マンズをうぐつて表へいさゆる真成の物語(那ベル)おこは其沿革の次第のごとく更に下條よとさあぐべし

およそ奇異譚は世を行えるゝや寓言の書もまゝ世を行える所謂寓言は書とい何ぞ無稽は小説は観意は寓して童幼婦女子は蒙を啓き獎誡なきもれすなえち是を英國にていふ浮へイアルなきあち件んの寓言なり以ソツア物語のごとき其一例とも見るべきものなり其他遊子の寓言のごときもまゝ此ものよ外あらざるを接するゝ寓言の書の世に現えるゝ、當時の君子有徳の士が世の道徳の萎靡して振えず人情澆薄母流るゝ、びいと歎かえりさよと母思ひまこは濟えまくなりをるものうら人さあ遊俠懶惰母して書さひもどきて讀むものまれあり況て人倫道義をどきたる故のうたくるゝ書籍のごときも机よ近づくるものよまをさるべとく教誡は方法よ因つて竟し世上に愛玩せらるゝ彼の奇異譚の脚色母ならひて架空の小説を結構なき時母

興誠の意を寓して世に諷せんと圖りたるべしされば奇異譚と浮へイブル(寓言)の書(その外形の同うして其内容の同じうらむ前者の娛樂を目的とし後者の諷刺を真相とせ浮へイブルの物語は浮屠氏のいそゆる方便母て其眼目あらざるうら其脚色を單純母て只皮相の三閑をるとき母のいと淡くして味なきも備ら玩讀して其隱微をいそ味ふとき母の所謂寸鐵人と殺を深妙の旨趣を見る事あり猿蟹合戦の物語まゝの桃太郎の昔話舌切雀かち山皆浮へイブルの部類母して其皮相なる物語のさため甲斐なきもの母似たれど其真相を見る母及びて頗る深意ありを思へる

さる程母文運まをく進歩して開明の世をさる母及べば浮へイブルもまた變遷して多少の進化ありあつても蓋し文運の進むまをさる母及び世の流行もむう母似むとかく一著母傾きつゝ万の事を贅澤あり且人智のまゝのゆるまゝあまり母甲斐なく淺くある彼の寓言の書あんどをめて喜び母の讀まざるべし中母も傑作莊子のごやまの長く具眼の士も導きまゝ大人社會母行をるまどもかへり其書の目的ありたる諷刺の旨に此時よままたく効なきもれやえなるべし蓋し大人具眼の士も列母聖賢の書



母道義をしも辨知しきままた寓言は書きたよめて之を學ぶん必要なくたゞ其技巧あるや其結構も妙なるを賞玩をまに過ぎればなりうゝ母は劣等佳作に非ず種となるのみ其目的たる諷刺まごとき全く通ぜざる事ともなるべし何れにせよ童蒙を教むまゝとて若くは婦女子むら母もてあそばせむるもなけれはありなり譬は我國の寓言なる猿蟹合戦の物語舌切雀などを見よ多少の寓意のあるべきあれども之は小兒にかたり聞かす祖母と親だに十母八九の寓意の所在とまていゝま母てたゞ一通のつくりむあしと同一様のものと思へり是も進化の自然ありと所謂浮へイブル次第まかころへ亞ルレゴリー(寓意小説)おこる源因なりうし

亞ルレゴリーといふものぞ曰く假作物語の一種にして二様の脚色を含めるものなり所謂二様の脚色といふ皮相母見えたる物語と隱微の寓意を是いふまゝなり今一例をあげていそ彼の有名なる西遊記のごときをすまそ此類の例なるべし其皮相なる脚色につきて彼の物語は評まるとさる母奇異荒唐空無稽たゞよのつるなる羅

ニス(奇異譚)と相異するものと似るものと細かき齟齬なきよきものなる隠微の  
 寓意もあつて世の故の幽玄なる佛道とも窺ひ見るべき便機とある一種の深妙不可思議  
 なる脚色の別に存するまじき正可奇異譚なきを得べし其他士達叙翁の傑作なりなる浮  
 ヘヤリイグ井ノの詩(仙樂傳)まじりて婆ニヤンの比ルブルムスプロブレツス(天堂遊  
 原記)等の如きもまじりて文外奇異譚を存してあるの教訓もあるの諷刺す殊に浮ヘヤ  
 リイグ井ノ(仙樂傳)の如き、都合三様の趣向ありて一に尋常の奇異譚にて其文章の  
 上にあらざる一に聖教の極意より其文外ありて存すまじりて當時の社會を諷刺  
 し且獎勵する寓意のごときも其文外に出没して歴々之を指點をべし實に仙樂の傳  
 ノ如き、亞ルレゴリイ中の傑作にして空前絶後ものといへんも決して証言にあら  
 ざるなり此他に寓意小説のあまたあれども今証例の便をたかりて只其粹をぬまらる  
 のみ其詳細なる脚色の塩梅さらびる寓意の具合あんど前の三書を精讀して三づか  
 り之を卒業せしむるして覺悟すべしなり

畢竟ある「寓意小説(亞ルレゴリイ)の彼の單純なる浮ヘイブル(寓言の書)の次第母  
 進化變遷して發達せしむるものならむ歟亞ルレゴリイと浮ヘイブルとの其皮相より

之を見れば一にさためて單簡なり一に頗る複雑にて相類似する由なけむと其含蓄せ  
 る本意を探れば此彼を同一の列種のものと思ひがさかり因てひそかに考  
 ふる母己に前ふものべたるごとく人智をなへ進むにまたがひ時の好もむかしに似  
 る器具遊服のいへば更なりたるまじりて純樸の質をさらひて奇異  
 複雑なるもの状このゆへ奇異譚にまじりて浮ヘイブルにまれあまり母單簡淺近より興味  
 うまうるものなんどいつか輿論をまじりてせに行きぬ事ともなるべしか  
 かまじり奇異譚の作者むらいつとめ新奇の趣向を案し其脚色を複雑母し其物語を長  
 くものしてまじりて時好母適なるやう意匠をなまふることなるべしざる程に浮ヘイ  
 ブルのいよゝ輿論にかなをなむとてむかひ婦幼の玩具とあり其本来の主旨をさへ  
 む忘せらるゝに至るべければ寓言の書は次第漸く衰へ竟る跡をもたつたとするべし  
 さのあま小説に輿論を寓して世を諷むるの力ある人々もまたまらざるあらねば全  
 く件の方便とて棄るふ恐びぬ由あるうら世の狂才ある操觚者流は時より奇異譚に輿論  
 を寓して世を諷めまじりて企つべし是勸懲之主眼とする小説神史の濫觴ありたりまか  
 しと文才ある宗教家も一に道徳家の博識なんども彼の奇異譚の時好に投じてめで



もてとやさるゝのみにあらず且よく感孚風動する至大の効力あるを見つ世の人  
 心を奨励して萎靡たる徳義を正さんふらまづ其好める處によりて叔説いたを母あ  
 ざりせば奏功さためて難うらむと密に覺悟する由ありすなえち浮へイブルを延長し  
 て其脚色をも複雑にし獎善誠懇の意を寓して彼の奇異譚と相あはせて世を發行せる  
 ものと、のなりなんききむ所謂亞ルレゴリイ(寓意小説)と勸懲主義の小説との其源淵  
 の相おなじく浮へイブルよりいでたまども其性質の大にたがへり其故のいふと  
 れは寓意小説の勸懲をも主眼となし物語をもて方便とせりまうるは勸懲小説に  
 物語をもて本尊とし勸懲をも主眼とせり故に寓意の小説にいうる不條理の脚  
 色ありとも何等の荒唐なる語ありとも寓意の塩梅妙ありせば之をぞるに及むざれ  
 ども若し勸懲の小説として其本尊なる物語母語々奇怪の脚色ありなは勸懲の主旨の  
 通ずるとも之を巧妙の小説と決し稱へがたかるべし我東洋の勸懲作者は此變遷  
 の次第と知らねばひとをら勸懲意を小説神史の主眼とこころえ彼の本尊たる人  
 情を疎漏母寫せりとうしからざる是まかゝながら亞ルレゴリイと勸懲主眼の小説  
 との差別をあらぬに出たることにて物にたとへて之を識らば我軒下を借うけつゝ勸

懲といふ主義を賣せる辻商人の風ならひてそれまゝ軒下店といだてて人情とい  
 ふ品物を其本店母てひきぎながらかゝたら勸懲ともあきなひつゝいつしう店費の  
 本務状もこころひたすら勸懲とは賣らまくかりて竟に店と関きよらり一鳴呼  
 あさびとよひとしといとなむ

演劇もまた之ひとくをじめのわねむ神代記の事蹟を演せるものなりしが人智  
 のまだいふまゝあるまゝ、彼の寓意の書母ならひて奨励の意を傳奇に寓して世に誠む  
 けの方便とせり此間一行を馬鹿をせしといふものなんども畢竟古事記旧事記  
 一載たは太古の事蹟の演劇母ていまだ細意を寓せざりし上古の遺風と思えまた英  
 國よていふ魁ノル夫レイも尊者聖人の靈驗偉跡を々々ありのまゝ演ぜしものに  
 て其大体よと評語が下さば我馬鹿雜子の類ありなんまうして其行これ一察ラル夫  
 レイ(奨励演劇)の之異あり其質をつたく亞ルレゴリイを演ぜしものといふとも可  
 ならむ演劇沿革の事あつてつものまのつから論あきども今要をたまゝ、こゝの  
 えぶたつ

之と要はるゝ演劇と奇異譚との其發生のそとのありては其質をこゝに相おまはす

たゞ新奇ある話談をのみ旨とし演ぜし事なりしが世の人情のそとむにまたがひまご  
 いよ奇怪の條を除き荒唐無稽の脚色を省きて事を凡近母とりて意と勸懲を發するよ  
 いさる斯うれば演劇の主腦の如たも亦あれ人情風俗の他の勸懲の主意の如たの其  
 目的のあらざることを瞭然として明かきりし

さる程に羅マンズ(奇異譚)も其荒唐なる趣向と減じて漸く世態の真相をば寫しだ  
 さまく力むることの所謂進化の自然にして抗をべうらざるいさやひあきども世の人  
 情の陋うして嗜好充分は高尚あらざる文運半開の比ありては小説作者も見識之  
 く自ら守るの勇なればひたすら流行嗜好を追ひて其物語をものすることゆゑ尙小  
 説の神髓をば修め得る母の願る速うり之を要するに作者の本意の人情世態を寫さむ  
 とする母もあらざ世を諷刺せしとするにもあらずたゞ當代の嗜好に媚び世の流行に  
 投合して一時の虚名を射むとするのこ此をもく此時代の奇異譚作者が物たりし奇  
 異譚中なる人情世態の其物語の主旨にあらで嗜好媚ぶるの方便なり且まゝ寓意の  
 勸懲の如きも俗母いたゆる適解して無益の書ありといえれじとて識者の識を憂ぐ  
 が爲にうり不用ひの方便あるのこ是また物語の主腦母あらねば他の寓言家の著作  
 に比ば其其獎誠の益なきおといふまでもなきことなりと文化文政の比よとし  
 て我國俗のもてえやせは小説神史の概してを此種の勸懲小説にて眞の小説にのち  
 らざるありさればこそ具眼の士の我小説と辭技とそあり有害無益とも罵るおれこま  
 めに小説家の迷惑あらざん

さあらば眞の小説神史(那ヘル)のいりあす時世は現るゝぞ其奇異譚と異るを所以  
 のそもまゝ何等の邊にあるや曰く那ヘル即ち眞成の小説の世に行えるゝ概ね演劇  
 衰微の時にあり其故のたもいりよといふに總して文化の淺うりたは未開蒙昧の世お  
 ありては人皆皮相の新奇をよろこび眼みつけどころ密ならねば何よてもあれ異常に  
 一々稍々注目を促がはべき新奇の性質あるものありなば競ふてこれをもてえや一々  
 面白きものと思ふの常なり且まゝ此比は人情の今は人情のいとおおむらうらで怒りて  
 も喜びくもまゝ哀めてを樂めてを總して顔る激切なるうら七情おびづうら其舉動と  
 其顔色とお見えまつ、隈なく人よを見られしを是併ながら道理力に作用させて  
 微なりうら母一時一旦は情欲をば抑へ止むることうなえて心お思ふおとをさへよ  
 あらえ母外面おうちいだしつまたの舉動にを見えたおなりされば此時代は人々よ

所謂奇癖もすこぶる多くて笑ふべき癖あり罵けべき癖あり憫むべき癖もあれば惡むべき癖もありやむ或の破癩陋癩なること善六丈八其人はことさもあるべく或の痴愚はたなえごしき有業其人(小栗實記は道戯形有原屋業平をいふ)母似たるもあるべし故母此時代は人情世態の全く皮相に見えさるから寫さうだに難うらねば彼が羅マンス類もすら其一通の描きだして世に一粟の供せしうどな不文才の富まざりたる當時は作者は筆頭ふ活たるやうに描きがた人人情世態も多なるべし斯う時母當りては精細な風俗と寫しだし詳明な人情を見えしむるもは彼が演劇に優るの稀なり蓋し演劇の性質は彼の奇異譚に比するにたゞは其脚色の簡略母してりへりて情趣の密さのさかれば別に景色の補助有りて俳優の動止と言語は伴ひ其趣と寫し程は擬似の人情世態をして活動せしむる勢あり況ては妙手の俳優をして傳奇の大家の手になりたる巧妙非凡の傑作を巧に演戯すはた於ては一舉一動一笑一擧宛然其物の真母逼りて看るものをしてあらせし其劇たるを志失しあるひに笑ひあるひに泣けりとく狂人のごとくならしむ(我國の梨園母市川團次の妙手ありて鶴屋南北の傑作ありも都人士を動かせし人のよくある所なりかま)彼の奇異譚は疎漏母して妄誕無稽奇異荒唐趣淺く情至らざる且活動の妙乏しくさながら死灰と一般にてさういふづらふ脚色はみくだく一に比せるとたは其差雲壤月露としかは是國所は差別もなく演劇さるえて奇異譚求ふ所以なり

さうあれ彼も一時たり此も一時たり時好は變遷と文運は發達のいまだあゝまもとゝまらねば人智は一層進むに至れば世は次第に華美は好みて万は事なむらしは似を主として外觀をうざるにあらはれ人情のうらむとも其外面母あらえきたは世乃人々れさちふまひのをさし時代はた母比すれば大母異なる由あるべしうくて月日を経るうちに彼の異やうなる風俗習慣いつし世上の迹とたちて成た、ざるやう成行くのみう人も智力の進めるま、我情欲を抑制してあうらさまふ其面はあらえさるやう力めつべし譬は大に怒りし折も目ざと面を和らげつと從容として語らふべくまたたえさたしく悲しむ時すも涙とさかさぬあやあるべし人情かのごとく變り來りて彼の激切なる態度容姿の漸く減少なほいたれば梨園子弟が劇場にて演ずる所の人情世態の漸く時勢に適をせして真を寫しは堪へざるべし夫も演劇の性質たる真に逼るべたものにあらずと真に越えつべたものなき語を換へま之

といへば真物をまみづうらを模倣するとは其主腦といふはあらで真物并ふある物  
 とは擬作を主眼とせばものなる(理ヤリチイ不ラス叙ムシテ)譬は一條の情事と  
 演し一場の闘戦を模倣するも真物に似ざるはもとよき拙いといへども真物に異な  
 らざるはまた興なきおよそ文明は世にありて人々おほむね外観とるざりて其体裁  
 を粧ふるはよしといふはどす戀ひあがれし我意中人に接はばとて雛鳥の久我に於る  
 ごとく阿七の吉三に於るごとくいせ厚うまじう打いごして情を迷るを得ざるべし  
 其趣を見たまはとてさまで興あるものをも思えし又闘戦之母ひとしくいと味な  
 らものあるべし戦國の世に近うりて武斷政治の比にありて民間にすめるものと  
 雖もいくらの武藝を習得せしあるひは柔術をも修めしうら不圖望華とまは折しも  
 方よりなひ一手は盡して敵手と挑み戦ひたを故に實際の闘戦も見てかもしろた程を  
 るから之に擬したる闘戦といよく興の深かりたをさされども今の時代にては相戦ふ  
 にも挑みあふよもひたすら拳をふるへるのみもとより方かどあるべたならねば之を  
 見るとも興なきまは真物まごとく演せんまたとたえめて益なれまはあらで頗る至  
 難に技なるべしまはるるをまはて寫真を告とく闘戦にも情事にも専ら真物の情態を

まはありたまは演出世ばたれうあまたま貨をすて劇劇と観むと望むべたやいく  
 らう真物に超越りておんしるおんしく思へばこそ人も觀うまは演すまはまはれば情  
 態ふたつながら激切なりまは人ま目ふ其情態をありたまは演戲母ならえ一得  
 るをもて演劇にてすは万ま事みまはも一ろくも見えたまならまはまはまはまはまは  
 目ふの劇場にて見る万ま事みな不條理と思えるれば次第に真に反すると罵るや  
 ららもいでたつべしきまはて真物を見るまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 演劇の演劇する所以とそこまはいと怪しげなまはまはまはまはまはまはまはまは  
 まはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 往昔の情態をまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 なり譬は一個乃乙女子あり一好男子を邂逅して之を見初ま折なんど手は携へま  
 扇子まはまは恍惚として取落し他の面をのみうちまはまはまはまはまはまは  
 閑人まはまは情態母て今れ世に情態といふべうらまはまはまはまはまはまは  
 艸冊子に作者まはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 ともまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは

るべたひとつら証據といふべたなり  
 とくする程に演劇のやうやく當代の鏡と云ひてせよめでらるべた價値うしあひ  
 観客人の群もまたい／＼に免角理屈論よりたふたつゝあるの假置法用ふるをば真に  
 そむくを罵るべくあるの假面を無要といひてなはだ／＼たの紅粉状も廢すべしなど論  
 じつべー

因云東都の落語家某かつていへらく観劇家の評するところも大い  
 母しへとおなほるらす真物いひとしく演るをばひとをさし奇妙と云ひ  
 一り市川團十は扮粧は淡泊あるをば「まぶい」とたへ一臺解れ常乃言葉は似  
 まいふべたことをも敢ていえず思入れよまあるをば「賢い」「すごい」を喜  
 ぶなり想ふに數年後にいらは團十なんどの數齣あひだ樂屋と與母盡  
 寐をして某といふ一主人公の病氣引籠を演るをみるべしあるひは素顔素頭  
 て演劇をみる可ありやいふ興論とあらむもまるべのらをほこせよ奇なり  
 と感ぜしが賢母おまきが所論よかなへり可々々々

演劇は不利をひせり上にたはる所おもろみ母あらを別よ人間は性情はうちみを演

をべうらさびもはあり演ることも興なれどもはあり故に院本作者などるこまらるも  
 宏を度外視して曾て採り用ひしことをなれど細微に穿鑿をくだきとたのこれら性  
 質を見えしむればなり／＼と讀者は興あるものなを被れ淺々した激切の性情を  
 寫しだすの見か人々も己に慶ぬるる細微の性情をえこほか／＼描たいごま／＼  
 すべせれ人いかにか嬉むべた是演劇は附屬したは不利の第二といふべたなり  
 演劇の早いへば擬似なり擬似の事物乃特異性(ベキユリヤリチイ)を模擬する再巧  
 なりといへども普通乃性質は模擬するより巧ならを譬は癖多た俳優は声のほねるよ  
 易く普通なるのほねがたたかごとし往昔の人れ心も淺まかなをほ、よ七情のこりな  
 く外面にあらえ且異やうなを多かり／＼がゆゑ之を演るる方便ありしが世乃  
 文運は進むつきて事ごと物ごとと異やうな性質の減つゆたつ所謂「思入れ」のみ  
 よていふつくしがたたもはいと澤あり是もほた演劇は漸く其位を歴史小説よゆづれ  
 所以とやいほし

およそ小説の範圍の演劇の範圍よりも廣く時世々々の情態を細大とよく寫しだ  
 してなと／＼遺憾を感じせざら／＼む譬は演劇にては人の性情を寫しいごまよもつむら

観者其耳に訴へば其眼に訴ふがゆゑ其場へ入りて候まじども小説母々の心  
反しつゝちみ讀者れ心訴へその想像を促がせゆゑ其場頗ほ廣くといふべし演劇  
母々の山水艸木遠近は景色家屋調度の位置あるひは畫を以て之を示しあるひは道具  
をもく之をあらえす其他雷電風雨のたぐひも總じて器械のまうけより観者の視  
聽の官ありつゝ小説母々のこれらの事をも悉皆美妙の文ふんしのしく讀者の心の眼  
み訴ふるるるに小説母々の讀者の想像の精緻より得所の興味のづから異な  
りある文外の佳境ありある文面のみの佳境あり候

因云英の小説大家歐タル数コソト翁の小説もどふに殊に細密を記文  
多うりある強賊の巢窟ありけは洞窟のさまを記すあたりに翁のことさら  
に家を以ていよゝへ賊の住よといふある洞窟もおもむきつ、仔細其  
四下を觀察あり且そのあたりに咲出た種々さまぐな艸花を以て残る所  
なく觀察して之を備忘録みかきとめつぎと歸りくのち其さまを以て見ゆが  
ごとくみ寫しいだく物語の地となせしことありり、る細微の景色を寫す  
に定み興ある事なきどもあり是小説の長處ありて他の演劇の道具をもて

て表し得がたき事なりかし

是また演劇の小説稗史も劣る所以に不便にしてすなえち第三の不利なりなり尚此外  
も演劇より一箇の重大なる不便利あり脚色の不便すなえち是あり演劇も万の  
事なもつむら眼に訴ふるると其本性と心をなせしことゆゑ前の齣にて見えた事事實と後  
の齣より演を事事實といくらか脈絡相通く因縁あきらかならざるべうらも殊に悲  
壯体(トラゼグイ)の演劇より其結局の悲話(洋ハイナル等タストロツ)の如き  
是非とも前の齣を以ては因縁よりきて求むしものごとくつくりなすを必要とすこと  
あり結局の悲話といひかななるものごとくいふまづ悲壯体の演劇を以て充分會得さ  
るとさふ其性質をまりがたかるべし悲壯体の傳奇小説もより我國にも多くあ  
るとし其實あり其名なきは是非あり二三の例をあびてお、み解釋を下しつべし譬  
ばちかごろ新番部にて團十郎等が演じたりし真田の張抜筒とらゝるものゝすあ  
ち悲壯体の演劇あり其他山門五三の桐もしくは隣隨長兵衛の劇の如き皆此類の物  
といふべし之を要する其演劇の本尊をみえち主人公(比イロウ)が其結局の齣あり  
たりとせうなき最後を遂るといふいと淺く悲しむな趣向と旨となきをみえたり

其最後もまたあり或は自刃し終るもあり或は殺されて死するもあり刑場の露とさゆ強盗もあれば情死してをえる男女もあるべし此主人公の最後は段々をもち結局の悲話やいふあり此結局の悲話なるも亦も一前段に關係なき不慮偶然の事ならむ歎見るもれさながら手は持たぬ物をとられし心地をして其興情何とやらむ索然あるをむ覺えつべし小説母々の之に反して、其偶然の事變ともて主人公最後を示すとき其事不可思議あるが爲かへり佳境を覺ゆることあり蓋し人生乃浮沈榮枯を因ありて成るも多々まじり偶然の事に成れるも頗る小少ならざればなり(此故事よつきての尚論をべきことせあまああれども脚色論の部母ゆづりこゝの筆をばぶくもろなき)さればこそ其氏がかつく演劇の脚色と論じて演劇の局を結果に結ぶべし偶然の事(亞クシデント)をしる其圓圓といふをべからむといひせられまこと必然の言といふべし

小説の演劇は優ること己よりくの如しといへども唯人心を感ぜしむる力母いありと演劇の力も及ぶべし蓋し想像と目撃との其感觸の度元來おまらうらざればありこの故とて小説と彫刻とをさむとせるは猶ほ瑕あるとて美玉と毛織の下に列せんとせざるがごとし豈あざつらふ母あることせあらむや

さくかくの如き進化を經く小説のつうら世母あらわれまあおのづから重んぜられ是まうしながら優勝劣敗自然淘汰のまうらしむる所まおせお抗しがあき勢をいふべし麻コウレイ氏うつく美術を論じて世の開明に進むまあがひ美術の次第に衰ふるの天の數をせせいのまありきび道理なき議論ままどもこの上世より成立ある美術の上ふらふいふべたことせに十九世紀のこのごろよりや、美術壇ふありあちある小説の上ふらふいふべし又麻コウレイの詩論に其衰頹せる所以をいふ叮嚀反復して論ぜられ(其論の麻コウレイの彌ルトン傳あり)是なるは母小説史の今より次第に榮えつべき確たる理由となることなり其故のいふよといふ母己母前にも陳るるごとく詩の奇異譚の本元は詩と奇異譚との同質なり、まはば奇異譚の衰ふるも詩の漸々母衰ふるも其源因の所在とさくらば十の八九は同様なる原因なること疑なきも我所謂小説(那ベル)母しよく奇異譚母ちのとりて世母愛らるゝの質有りなば亦たよく詩歌またちかたりて美術の壇上母列しつべき器置あるべきことせなりか

嗚呼麻コウレイ氏の言をも信をりとせむ歟從來の美術の次第はもとろへ英國の文  
 華を以てもまゝ彌ルトン試いださざるべく伊多利以國の高雅なるもまゝ阿ンゼロ試  
 いださざるべしひとり小説ては美術母たる望將來母さため大なり歟コツトや  
 笠トンの重マや委リオツトや近代の大家多しといへども力めく之は駕せんと思は  
 つしと至難ありといふべうらも嗚呼我文壇の才人雅客いづら母馬琴を本尊としあ  
 るひの春水み心醉おしあるひの種彦を師せし崇めて其精細状ばあむることおく斷乎  
 陳套の手段を脱し我物語を改良し美術壇上より列しつべき一大傑作をあみふへや

小説の主眼

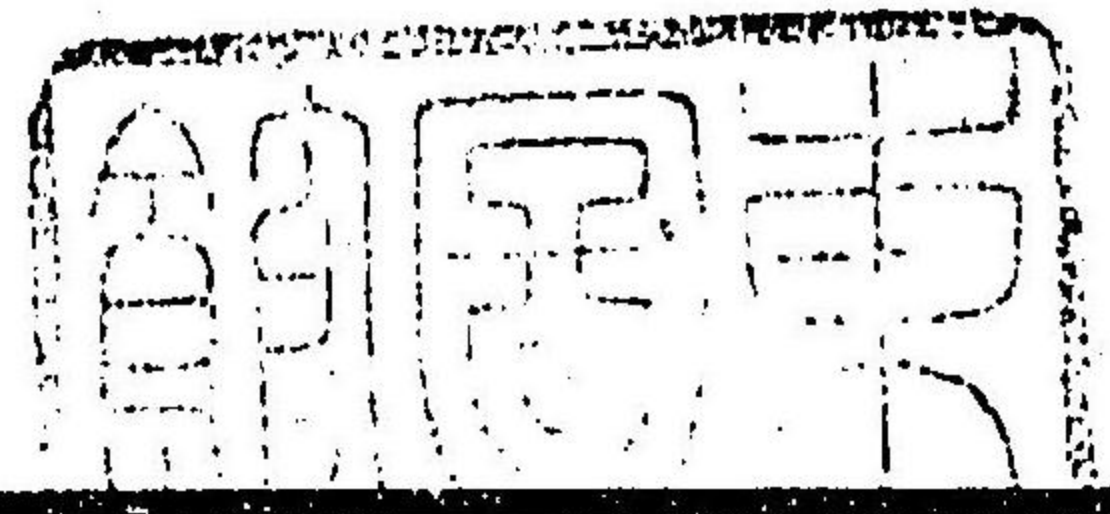
小説の主眼は人情あり世態風俗こそ母次ぐ人情といはれお侍者試いふや曰く人情と  
 は人間の情欲母と所謂百八煩惱是なりそれ人間の情欲の動物あるのらいるる賢人  
 善者ありとくいまだ情欲状有ぬの稀あり賢不肖の辨別なく必を情欲を抱るもの  
 ら賢者の小人母異なる所以善人の悪人は異なる所以一は道理の力を以て若くは良  
 心のみ頼りて其情欲抑へ制を煩悩の犬は獲ふ母因るのみされどは智力大に進み  
 氣格高尚なる人母あり母の常お劣情を包みおくしく苟母も外面母顯さるるらさ

おがら其人煩悩をば全く脱せしごとくあれども彼また有情の人なるら母のおどて  
 情欲のなるらざるべき哀も亂る、ことおく樂みても荒むことをなく能くその節を  
 守るのみか忿るべきをも救く忿らむを怒むべきとも怒まざるはもと情欲の薄きよあ  
 らて其道理力の強きが故あり斯れば外面母打いだし行ふ所はあくまでも純正絶  
 良なりと雖ども其行状をすふさきたち幾多の劣情心中母勃發するおとあうら  
 せや其劣情と道理の力と心のうちにて相闘ひ道理劣情母勝つ母及びくえじめて善  
 行をおすを得るなり故の神聖はあらざる以上の水の低き母つくが如くは善を備むる  
 者やあらんいくらの迷ふ心あるをばよく道理をもて抑ふれむこそ賢人君子ともい  
 える、をまはじ老よりして迷なくんば善をなはとも珍しむら母君子賢人など、い  
 んのなるくは是おるなるべし斯きは人間といふ動物にの外に現る、外部の行爲  
 と内に藏れる内部の思想と二條の現象あるべき善をりあるは内外双あがら其  
 現象の駁雜めて面の如く母異なるものあらせし歴史あり傳記ありて外は見えは行  
 爲の如き概ねこきと寫しをいへども内部母包れる思想の如きくぐくしはは渉  
 るはもて寫し得たるは曾て稀あり此人情の興を穿ち所謂賢人君子のさら老若男女



善惡正邪の心のうちの内幕は淺は所なく描きいとして周密精到人情をば熾然とし  
て見えしむるを我小説家の務とするなりよしや人情を寫せばとて其皮相のを寫し  
たるものいふべきを眞の小説といふべからず其骨髓を穿つて及びてをばよく小  
説の小説たるを見るなり和漢の名ある稗官者流のひとすら脚色の皮相にとまる状  
拙しやして深く其骨髓を穿つてを力をとりしも主腦とすすべき人情をば皮相を  
寫して足れりとせり豈憾むべきことあらむやそれ稗官者流の心理學者のごとく且  
く心理學の道理を基つて其人物をば假作るべきを苟もおのせが意匠は以て強て  
人情に恃及せる否心理學の理を及れば人物をば假作りいださば其人物の己身既  
に人間世界の者母あらで作者が想像の人物なるから其脚色の巧なりとを其譚の  
奇なりといふとも之を小説といふべからず物とたへて之をいふは機關人形とい  
ふ者似たり勿卒にして之を觀るべきを影のまことの人間活動ははがごとくあ  
らども再三熟視をすよいたれば偽人師の姿も見え機關の具合もいとよく知らせて  
興味索然たらざるを得む小説もまた之母ひとく作者が人物の背後母ありて屢々糸  
を牽く様子のあらむに人物の舉動を見えおぼたたまら興味を失ふべし試に一例をあ

明治十九年



げていたん彼彼の曲亭の傑作ありたる八犬傳中の八士の如き仁義八行の化物母て  
決しく人間といひ難かり作者の本意もいとよりて彼の八行を人に擬して小説を  
なすを得るからあくまで八士の行をば完全無缺の者となして勸懲の意を寓せ  
しなりとすは勸懲と主眼として八犬士傳を評するときは東西古今の其類なき好稗  
史なりといふべきと他の人情を主眼として此物語を論ひをば瑕なき玉といへば  
たし其故をいかに母とならば彼の八主公の行を見よ否其行爲のとまきうくまれ肚の裏  
母て思へる事だ一徹頭徹尾道よりなひて曾て劣情を發せしとどなき一短や一時瞬間と  
いへども心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏母を聞ひたりを例もなきよしや  
堯舜の聖代なきむとてうける聖賢の八個までも相並びつゝ世ふいでんこと殆ど望  
みかたき事あらむや蓋し八犬士の曲亭馬琴が理想上の人物母く現世の人間の寫真ふ  
あらねば此不都合もありたるなりさのあき馬琴の凡ならざるよく巧妙の意匠をもて  
しゝ其牽強をば掩ひしうを讀者の毫もこぼさざるよく人情をも穿ちたりと不れた  
へるの誤らむや斯いへばとて八犬傳をむ小説おらずといふよのあらねど今証例  
を便ならんが爲めおぼむらく人口ふ贈矣したは彼傑作を引用せしもの曲亭翁の著作母

つきつものれものづら別に論ありそ折と得とよくあるべしきき小説の作者たる者の専ら其意を心理に注ぎて我假作りたる人物なりとも一度篇中よいでる以上の之を活世界の人と見做して其感情を寫しいどすに敢ておの意匠をもて善惡邪正の情感をば作設くること状ばなきを只傍觀してありのまゝに描寫する心得ふくあるべきあり譬ば人間の心状もて象棋の碁子と見做はとさ母の其直きこと飛車の如き情も勢もあらざるべく行く道常によきまなみ心の角も多るべし桂馬の剽輕なるは香車の了見なき或は王將の才富く機も臨み變母應ざる縦横無盡の行あれはた進むべき前あるをまりて左右に避くべき道をあらざる匹歩庸歩も勢からむおのがじ、なほ舉動をして此世局を渡るものうら直ある飛車も生長なきむうりの飛車母おあつからず角も世故も長むる母いさき直なる道をも行くとあるべし或は王將も匹歩の手母か、り或は應なき香車にしき金銀を得ることもありなん圍碁者の造化の翁よして碁子の即ち人間なる造化の配濟の不可思議なる傍觀で觀るとは大母異なり「彼金などなく彼方へなりお進んで王手となるべからん」と思ふに違ひて一匹歩よちまち道をふらぐれつ、避退くべきひまだよあうりく桂馬の餌食となるお

とありきまむ人間もこれにおあじく榮達落魄必むしも人間の性質に伴えざるうら或は才子にしき業状あきあるあり或は庸人にして志を得るあり千狀萬態千變万化因果の關係の駁雜なる豫を圖定むべしを故に小説と綴るに當りてよく人情の興を穿ち世態の眞を得まくなりせば宜しく他人の象棋を觀く其局面の成行をば人に語るが如くにあすべし若し一言一句たりとも傍觀の助言を下すとさ母象棋の已作者の象棋となり他人の某々等が圍したる象棋といふ可らむ「ある此所のいと拙しもし予ありせば斯をばし箇様々々お行なふべきお」と思える、庶も改めをして只ありのまゝに寫してこそえをて小説ともいえる、あれ凡小説と實録との其外貌もつきて見ればをこしも相違のなき者なり小説の主人公の實録の主とかなじくらで全く作者の意匠も成たる虚空假設の人物なるのみされども一旦出現して小説中の人となりなる作者といへども擅み之は進退なすべからず恰も他人のやう母思ひて自然の趣をのこ寫すべきなり彼の勸懲をもて主眼とせる和漢の小説作者のごとくに斯る情の此人物ぬふきえしうらすき情欲をいだうせなば此人物の價を損ぜん如す聖人君子も駐ざる立派の人物ぬなくべしなど作者が岡目の手細もて人の感情を

折衷なし勸懲といふ人爲の模型へ造化の作用をええおむときより其人情と世態といふ天然のもの母あらしむ作者がみづるら製作へする詭向の人情なるから其人物を除くの外より決して見がたき人情なるべし夫小説の主人公もより假作の物母しあまば完美ならしむむと作りするときのみ作者の意匠の浮べるまゝにあくまで全美にこしらふるも敢て妨げざることおぼどもさう豫め限界を設て人情の外おいでざるやう工風を凝すを肝要とす譬ば画工が意匠を凝して佳人の肖像をものまゆ折ふもひとすは妖嬈あらんを望みてみだりよあままじき眼を画き若くは眉口の類あんども人らしくなく寫しいださば其貌いかにどふ美なりといふとも之を名画といひふ可らず否名画といひ得べきも絶美の「人間」を描け得たる名画なりといひ難かりもし絶美ある未曾有の佳人を描け出さまく作りすならばまづ其蛾眉をそかくは當りて世に蛾眉をもて名と鳴らせる佳人は蛾眉を雛形となしきて其眉を画つべし星眸ふたもまゝ其如く世に星眸の譽たる美人の眼を手本として其星眸を寫つべし鼻唇といふふ及ばず面の長短髪はいろつや皆世よあるべし人間より其雛形ととり采りてたゞ老て古今は曾てあらざる絶美乃婦人を描くべきありもいふのせずして眉も口も

画工が自儘の想像よりつくりいごせしものならん母は是人間の像はあらで人間以上若くはまた人間以下の像あるべし人物を假作すもまづその如く此處彼處を人人間より其性質は原素をもて併せてこれを一箇をなし完美全良の人物をば小説中につくりいだはる(も一其配合は方法益極心理に達する由をた以上)敢て苦らぬおまおれどん決て人界再望むまじは咄々奇偉ある人物あんどを作者が自儘乃想像もて假作りいだはる忌むべしあり前にも己に述たりし如くも小説は美術母して詩歌傳奇等ふおまおれどもまたかのづら詩歌傳奇や異あつ所も抄のらす譬ば詩歌を必ずしも模擬をむ主眼をささぐれども小説は常模擬を以て其全體乃根據を人人情を模擬し世態を模擬しひとを模擬する所のもの状を真母通らしむむ力むるものたゞ小説はまた發達せむて尚「羅マンヌ」たりころより其体裁も詩歌は類く奇異なる事を叙したりしがひやとび小説は体を具備して今日の小説をなしたるるらよのまた荒唐なる脚色と弄して奇怪の物語をなすべうもあらむ是今日の小説史乃至難技たる所以ありかゝされば人物を假設してその情をいも寫さまくせばまづ情欲といふ者とは其人物が己に既に所有したりを假定めてきてあるのの事件お

あり、箇様々々の刺戟をうけ、あつた其人のなる感情をおこすやまた云々の感情をこらば其餘は何まの感情母のいかさ影響を生むべたのまた従来の教育や其營業の性質よりて其人物の性のさら其感情の作用にも何等の差違を生むかやいや細密に撈り寫して外面に見えざる哀情をあらえに外面に見えしむべしもし人物が善人よて所謂實事師やいふ者あらんり作者の力をよく實事師が其折々感むつべた感情をのび模寫しいだしもし人物が惡質なりせむ邪曲し心お抱たつべた感情とのび寫をべたなりされどもこととなきは當りて善人よも尚煩惱あり惡人よも尚良心あり其行をなまにさだだちいくらか躊躇ふ由あるは淺て寫しいださむもあらば是ま皮相の狀態母々眞を穿ぬものやいふべし聞説熱心な油繪師の刑場あんどへも出張して斬らるゝ者のあはかちのさうへ斷頭手の腕の働えと筋骨の張たるさま母も眼と注ぎく觀察するや小説作者もまづそのごましく性醜たものも情の邪なるものも敢て忌憚ふことをばあさて心とこを寫さむもあらばいかに人情の眞に入るべたさやせて淫殺野鄙よとたれる隱微に過る劣情をさへも寫しいごせよやいふふあを蓋し小説の美術あるから彼の音樂に聲を思み繪画に猥褻の像を嫌ひまた詩歌傳奇の野鄙ある言詞採用ふることを惡むが如く小説と語るを惡むむあり英國の博識「如」茂ルレイ「が」文ヲ棄リオツト「女史」著作ヲ評する語いへらく（上略）あべ文學の主旨目的の人生の批判（クリチシズム）をなさんが爲のみや往古の識者もいひたり小説のをもや文壇ある一大美技をも稱ふべたよ却て屢々駭められ最下其位置を占るものをもくまた何故ぞや想ふ人人生の批判を見るべた小説稀なる母因るこやなるべし世の操觚者流多しや雖も造化の文才を人母附與ふるや配劑一様ならざるから見識が淺たものあり意匠の足らざる者あり概しく評を下まをたに一大奇想の糸を繰り巧し人間の情を織みし限なく窮むた隱妙不可思議なる因源よりして又かざりなく定まりあた駭雜多端ある結果をいもいや美しく編いだして此人生の因果の秘密を見るやごましくいやあらえよ説明めたる著作のまくなよそ人生を快樂の其類たため多たが中よも人乃性乃秘蘊を穿ち因果の道理を察り得るやごましく面白たごましくあらじさのたれ人生乃大機關といや詳細を察り得るのをも容易あらぬ業ありあれは淺識誰才の操觚者流は得てなきべうもあらざるを其才穎人の上母ぬたんで不撓の氣力を有する者のみ持りこのことを得爲をべし總じて文壇の技術

あり、箇様々々の刺戟をうけ、あつた其人のなる感情をおこすやまた云々の感情をこらば其餘は何まの感情母のいかさ影響を生むべたのまた従来の教育や其營業の性質よりて其人物の性のさら其感情の作用にも何等の差違を生むかやいや細密に撈り寫して外面に見えざる哀情をあらえに外面に見えしむべしもし人物が善人よて所謂實事師やいふ者あらんり作者の力をよく實事師が其折々感むつべた感情をのび模寫しいだしもし人物が惡質なりせむ邪曲し心お抱たつべた感情とのび寫をべたなりされどもこととなきは當りて善人よも尚煩惱あり惡人よも尚良心あり其行をなまにさだだちいくらか躊躇ふ由あるは淺て寫しいださむもあらば是ま皮相の狀態母々眞を穿ぬものやいふべし聞説熱心な油繪師の刑場あんどへも出張して斬らるゝ者のあはかちのさうへ斷頭手の腕の働えと筋骨の張たるさま母も眼と注ぎく觀察するや小説作者もまづそのごましく性醜たものも情の邪なるものも敢て忌憚ふことをばあさて心とこを寫さむもあらばいかに人情の眞に入るべたさやせて淫殺野鄙よとたれる隱微に過る劣情をさへも寫しいごせよやいふふあを蓋し小説の美術あるから彼の音樂に聲を思み繪画に猥褻の像を嫌ひまた詩歌傳奇の野鄙ある言詞採用ふることを惡むが如く小説と語るを惡むむあり英國の博識「如」茂ルレイ「が」文ヲ棄リオツト「女史」著作ヲ評する語いへらく（上略）あべ文學の主旨目的の人生の批判（クリチシズム）をなさんが爲のみや往古の識者もいひたり小説のをもや文壇ある一大美技をも稱ふべたよ却て屢々駭められ最下其位置を占るものをもくまた何故ぞや想ふ人人生の批判を見るべた小説稀なる母因るこやなるべし世の操觚者流多しや雖も造化の文才を人母附與ふるや配劑一様ならざるから見識が淺たものあり意匠の足らざる者あり概しく評を下まをたに一大奇想の糸を繰り巧し人間の情を織みし限なく窮むた隱妙不可思議なる因源よりして又かざりなく定まりあた駭雜多端ある結果をいもいや美しく編いだして此人生の因果の秘密を見るやごましくいやあらえよ説明めたる著作のまくなよそ人生を快樂の其類たため多たが中よも人乃性乃秘蘊を穿ち因果の道理を察り得るやごましく面白たごましくあらじさのたれ人生乃大機關といや詳細を察り得るのをも容易あらぬ業ありあれは淺識誰才の操觚者流は得てなきべうもあらざるを其才穎人の上母ぬたんで不撓の氣力を有する者のみ持りこのことを得爲をべし總じて文壇の技術

してやゝ高等の位置を占むるものゝ此人世の大機關を以て主眼をなすべし  
 目的をなさざるな一宗教といひ詩歌といひ哲學といひ其名によりて形こそらえ其  
 主旨をほる所をとへばあへく人間に關する者にて其性質と運命とい何等の自然の機  
 關よりていつある具合にえらるゝや残る蘊なく説かれたるめて世間の人を迷妄を  
 とれたた疑を雲をも拂ひて好奇の癖を慰むる母あり人此後乃書と讀みあはよ一其  
 深理の解を得むとも尚人世の評判記を興あること試覺ゆるるらに巻を閣くこと能え  
 ざるべし蒙昧不學の徒にありてこれらに書籍を讀むといへども爲ふまづうら悟を  
 ひらたてく反省取舍をみるふらいたらむとも事此曲直是非當否のおろろげあがら母判じ  
 得べし(中略)委リヲツト女史の小説の如く、る觀念の畑へも讀者を導く捷徑なりき  
 れども女史を獨斷をえて此行の宜しきことなり此行の不可なりなど曾く指示するこ  
 ととばかり唯あからさまな事物の因果を見るが如くにかまひらたてて復賤取舍の  
 總べてを讀者の心お任したりき女史のなる人の爲は種を蒔く者のごとしもづから  
 獲を収めずしく他人の之を拾ふ母任して毫も妬め妬氣色もな一云々といへり詢に茂  
 ルレイ氏のいへるがごとく苟も文壇の上ふらちて著作家たらむと欲はる者なり常一

人生の批判をもて其第一の目的と一志りして筆を操るべしなり

されば小説の見えがたきを見えしを賤賤なるものを明瞭にし限をた人間の情欲を限  
 ある小冊子のうち小網羅之をもてあそべる讀者をしる自然は反省せしむる元のな  
 り造物主の天地万象を造りて私を恰も我党小説作者が種々の人物を假作りいたし  
 て毫末も偏頗愛憎なく行住進退をべてさなひたすし自然に及らぬやう寫しなせる母  
 似たりといふべしさもあらばあま造化の翁が造り教へたる活世界の極めて廣大無邊  
 母して規模のあまり母大あるうら凡庸稚蒙の眼を以て原因結果の關係を察り得  
 ることいとく難うりあるを我党小説作者が其因果の理の要を摘みく一小冊子の  
 うちお織めて照檢取捨する便は供ふ其任豈に重うらむやもしよく奏功おは由ありな  
 ば其功もまた偉大あらむや

因に云本居大人在「玉小抄」にて源氏物語の大意を論じていへらく此物語の大意

昔より説どもあれどもその物語といふもの、本旨とたづねむし只よのつねの  
 儒佛などの書のおえむきともて論ぜらむるは作者の本意母あらむとまづ一被  
 の儒佛などの書とものづうら似たるあ、る合へる趣もあれどもそをとらへて懸

体にいふべき母のあらむ大うらの趣のたぐひとの痛く異なるものにて總て  
 物語の又別な物々たるの一種の趣のあること母してをいふべきなり  
 が如く(中略)胡蝶の巻といふは物語を見せしむるにやうく人のありき  
 は世の中のあるやうと見えたまへば云々總て物語の世にある事人の有様心と  
 きまぐれ書きたるものなる故に讀むるおのづから世の中の景況をよくおろそ人  
 の所業情の現象とよく辨へたる是れ物語をよまむ人のむねと思ふべきことなり  
 なる(又略)まかしの物語にて人の心所業の善と惡といふかなるどといふに大う  
 ら物のあつれを知り情ありて世の中の人の情にかまへるを善と一物のあつれ状  
 知らぬ情なくして世の人の情にうまをさざるは惡とせりかくいへば儒佛などの道  
 の善惡といふことも異なる差別なきが如くなれども細かいたむ母の世の人の情の  
 うまふとうまをさざるとの中にも儒佛の善惡といふ合えざるも多し又はすべて善惡を  
 論むるをも只をならかにやえらびて儒者などの議論やうよひたぶるおせまり  
 たは事なし叔物語の物のあつれを言とせしむる母其すぢいなりては  
 儒佛の教とむけることも多きぞうらまづ人の情は物に感ずる事母の善惡  
 邪正とまぐれある中に道理母たがへる事母の感ずる事母の善惡とまぐれ情の我  
 がら我心にも任せぬこと有りておれづから忍びがたきぬし有て感ずることある  
 も母之源氏君お上りていと空蟬君朧月夜乃君藤つばお中宮などよ心とら  
 けく逢ひたまへるの儒佛など道おいていへむ母の世よ上もなきいさじは不義惡  
 行をまじ外よいかばうら善き事あらむ母も善人とはいひがたうるべきに其  
 不義惡行なるよまばさしもて、言をせいで只そおあひだれもは、何えき  
 お深さうらを返すくうきおべて源氏君をば主と善人お本とく善事のぬき  
 りを此君の上よとあつめたる是物語の大旨母して其よおしは、儒佛などの  
 書の善惡と差異あるけぢえさりとて彼のたぐひの不義を可とするふらあらむ  
 その惡一たこと今さらいえておるく然るくぐひの罪を論ずることおのづ  
 うら其方の書どもの世よ多あれは物やなれ物語をまつべにあらす物語の儒  
 佛などのまた、うまお道のやうお迷とておきて悟入るべき則にもあらむ只世  
 の中の物語あるがゆゑおさるすぢの善惡の論はばらくさかたてき、關と  
 らむた、物のあつれを知れる方の善とせきたる、善一といふおたる、此お、ろ

小説の分類  
 又三才  
 儒佛の教とむけることも多きぞうらまづ人の情は物に感ずる事母の善惡  
 邪正とまぐれある中に道理母たがへる事母の感ずる事母の善惡とまぐれ情の我  
 がら我心にも任せぬこと有りておれづから忍びがたきぬし有て感ずることある  
 も母之源氏君お上りていと空蟬君朧月夜乃君藤つばお中宮などよ心とら  
 けく逢ひたまへるの儒佛など道おいていへむ母の世よ上もなきいさじは不義惡  
 行をまじ外よいかばうら善き事あらむ母も善人とはいひがたうるべきに其  
 不義惡行なるよまばさしもて、言をせいで只そおあひだれもは、何えき  
 お深さうらを返すくうきおべて源氏君をば主と善人お本とく善事のぬき  
 りを此君の上よとあつめたる是物語の大旨母して其よおしは、儒佛などの  
 書の善惡と差異あるけぢえさりとて彼のたぐひの不義を可とするふらあらむ  
 その惡一たこと今さらいえておるく然るくぐひの罪を論ずることおのづ  
 うら其方の書どもの世よ多あれは物やなれ物語をまつべにあらす物語の儒  
 佛などのまた、うまお道のやうお迷とておきて悟入るべき則にもあらむ只世  
 の中の物語あるがゆゑおさるすぢの善惡の論はばらくさかたてき、關と  
 らむた、物のあつれを知れる方の善とせきたる、善一といふおたる、此お、ろ

ばへ状物またとへていえ、遊をうゑてめでむとほる人の濁してたたくの如き  
 ども泥水をくくたふるが如し物語は不義なる戀をうゑるに其よごれる泥を愛で  
 べにのちらむ物のあそれの花とさうせん料ぞかゝ源氏の君のふるまひの泥水よ  
 るおひ出たる蓮の花の世にめでたく咲よかへるたぐひとして其水の濁きること  
 をばさしめいえを只なきけふく物のあそれと知れり方をせりたて、よた人の  
 本にしたること云々といへり

右ふ引用せる議論のごとたすおぶる小説の主旨と解してよく物語の性質をばとた  
 あたふえたる心といふべし我國はも大人のごとた活眼の讀者をたふしえあらざり  
 を是どもその絶無よして希有なるうら他の曲學母あやまらきて彼の源語をさへ牽強  
 して勸懲主意なるものなりなどいせまたり兒の講釋せり和學者流も多しとたぐ  
 さただくちやまらむや

### 小説の種類

小説を其主意より見て區分すれば二種あり曰く勸懲曰く模寫即ち是より勸懲小説の  
 英語母ての「ダイダクチツクノベル」と稱して専ら獎誡と主眼とし人物を模作り脚

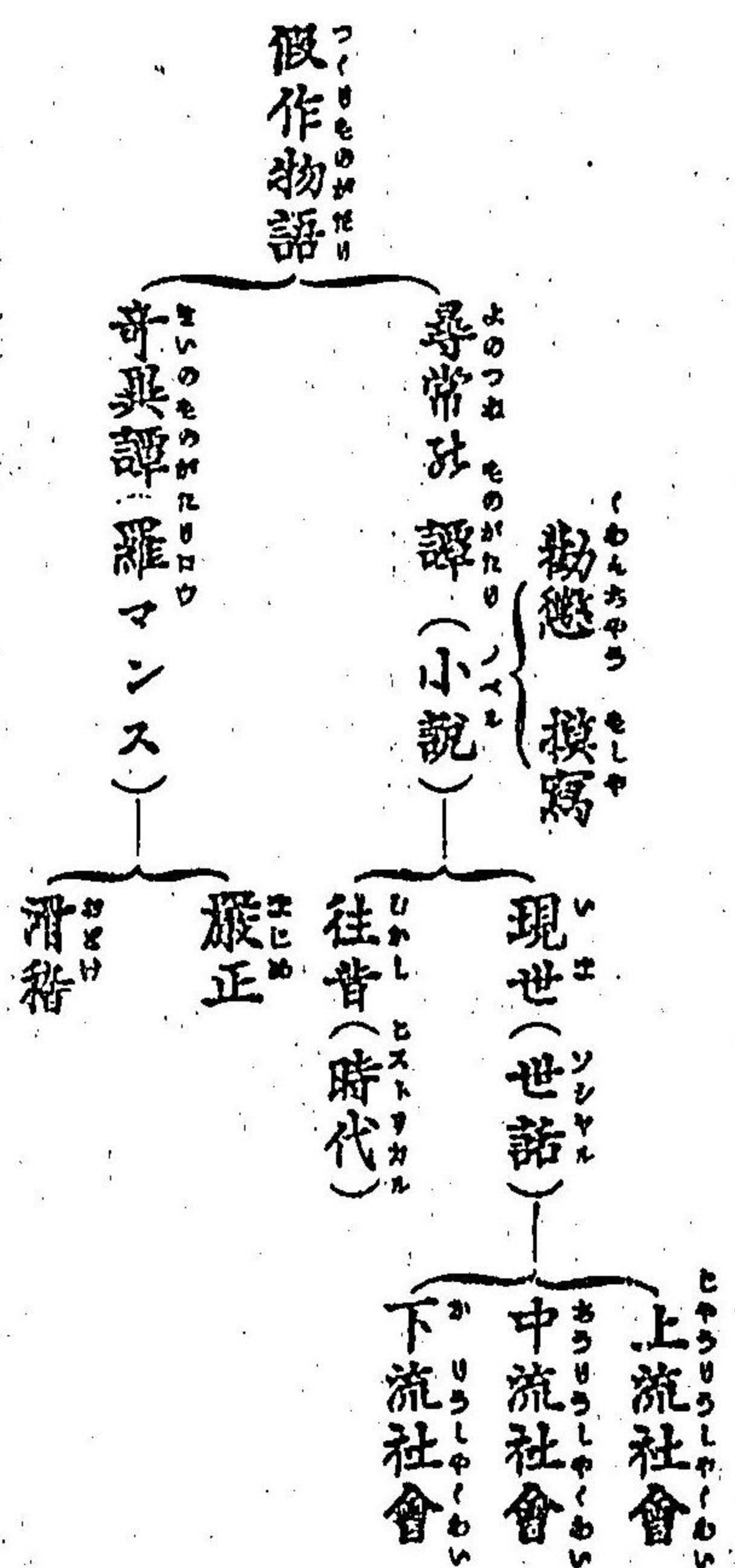
色を辨へて世々諷誡せんとつとむる者なり曲學馬琴以後の著作の概ね此種か者と思  
 える勸懲小説もそのづから二種の列あり一を褒譽といひ一は諷刺といふ褒譽は仁  
 義禮智等は八行を本として暗に全編の列傳と設け其行爲を尊むべく仰ぐべたを示し  
 て讀者としておのづからこそ景慕するの念を起さしめて順々裡に良道に導らんこと  
 を期す馬琴が仁義八行を列傳として八犬士傳を綴り智仁勇を人に擬して朝夷奈巡島  
 記とある皆おは主意に外ならざるべし諷刺は全く之の反して暴虐非道は行爲をば  
 べ若くは不義不孝は狀をあらえしあるは痴愚の笑ふべたを寫しあるは醜行は恥べた  
 を描かても訓誡せんとつとむる者なり曲學翁の夢想兵衛乃物語式乎三馬は浮世床  
 浮世風呂をえしえとしく福内鬼外の戯作類の總て此類の物と思えみさのあれ馬琴  
 の著作の如きの概ね褒譽と諷刺とを兼たり殊母晩年の作に於ては褒貶自在にもみせ  
 一ものあり美少年録の如たは其例なりまた諷刺法も二様ありて嚴正なき事馬琴の  
 美少年録の如たものあり或は滑稽洒落ふしく一讀人を笑えしむる鬼外の戯作に類す  
 ものあり

模寫小説(ア、チヌチツクノベル)の所謂勸懲小説といふ全く其性質は異なりたるもの

母其主意偏母世態は寫しだは外からさきき人物は假作するよもま  
 た其脚色を設くる母も前迷べたる主眼と體して只管假空の人物をしり假空界裡に  
 活動せしえて真に逼らしむと力むるえの之譬は詩人が詩歌とものして真景と寫し  
 真情をえた畫工が丹青とて花鳥山水は描た彫像師が球をもく人またの歌の形と彫  
 れるが如く専ら真に逼るを主として趣向を構へ列傳をまうけ人情世態を穿てるもの  
 なり故に此種の小説母於ていあかち獎誡の意を寓して脚色をまぐる事をばなきを  
 ひたすら世間あるべたやうな情態との描たいごさあから真物のごとく見  
 えしめむおと望み力めて天然の審麗をうつし自然の跌宕を描き讀者をしてまらむ  
 まらむ其假作界に遊ばしえて而して隱妙不可思議を此人生の大機關をば察らしむ  
 るよいぐるものありされば撰寫主意の小説の求めをいざ諷刺諷諭の法をえり暗  
 ぶ人を教化するの力あり就中おの意ともて現世の情態を寫しいごさば其物語の(よ  
 しや其事件と人物の如たの全く假空のもれなりとも)恰も現世の風潮を示し時好ま  
 趣く所たらしを興情に傾斜を察しむる一活歴史ともいふべければ具眼乃人よ  
 て之をよまば彼は迅速なる傳記は繪を時代違ひは事情を探りて因果は理は察るに似

すまら二三四の経験母よりて反省覺悟すみれば益鮮たふ勝りて其効能を覺ゆみこと果  
 して小説ならざるなりきまども我國は小説作者のこくは忠道理をさとらざるよやひ  
 たすら笠翁が語を師として小説といへば必ずしも事を凡近母とりて意を勸懲に發せ  
 ざるは叶えざる事やう母思ひて獎誡といふ模型をつくりて強て趣向をそはうちに  
 て工風をきまきしたりしといとも嗚呼なることあらすや  
 さてまた小説を其編中記載せる事件は性質およりて區分すれば更お二種は小説と  
 なるあり曰く往昔(時代)曰く現世(世話)即ち是なり往昔物語は既往の事蹟を本とし  
 て若くは歴史上お人物を主人公となして以て一篇は脚色を構へ現世物語は現世の情  
 態を材料とてもて其趣向を設くるもれなり我國は小説の概ね往昔物語即ち時代小  
 説ならぬや希に馬琴の著作にいへば更なり俗母稗史と呼ならせま真名もとりは半紙  
 本の概して此類は物なりたりまかして紫式部は源氏物語為永春水は情史等の總  
 て現世物語は部類といふべし  
 左に載るは小説は種類を表す略圖なり





尚此外ふん政事小説宗教小説兵事小説航海小説等其數一として足らざれども要するに現世往昔は双小説に細列たるに過ぎざるを政事小説の専ら政事界に現況を寫し、いだし、暗に黨議を張らまくする政事家の手なれ者多し「美イコンスヒ井ルド」候に春鶯轉矢野文雄大人は纂譯せられし經國美談など其例なり宗教小説の専ら布教は旨とす者なり其的例とをなすべし者いまだ我國の存せざるとを假し其例と舉げていふに靈顯記利生記などひならしびに山東京傳翁が晩年より著したる物語類の此部に入るべし兵事小説の征役中此事實を本とし趣向をまうけ若くは假空乃人物

を假作りいたして征役中の情況などを寫しものなり我國の戦記軍記等との異なり航海小説(奈バルノベル)の假空の人物假空の事蹟は假作りいたして航海の情況をのぶるものなり我國の巡島記類のものど其質相似て異なるもの之益し我國の巡島記類の總じて奇異譚の部類をまじも航海小説の之に反して重し航海中の情況をのべざる尋常の小説に異ならざらばあり

前の略圖にて表示をいたる如く現世物語すあち世話小説ふんおのづから三箇の列あり上流社會の情態を寫しを主とほる者あり中流社會を物語の本尊とす者あり或は下流社會の情況を専らに描きいださんと力むるもあり但し三種とも相關して決して判然たる區別のなけれど其主人公の性質よりて此區別はしも生ずるなり我國の現世物語と稱すべきもの極めて其類少るから例を掲ぐるに苦めどもまづ大概をこゝに示さば爲永春水の人情本の概して下流社會の情態を寫し時母上流社會のありさまを寫せり京山翁の洲冊子など其名を時代物語ふることあまじも其實中流以下の世態をうつせる世話物語り母ほかあらざるべし松亭金水が細案せし鏡山の情史をらびに千代敷の情史あんどに上流社會と寫せるもの敷紫式部の源氏大貳

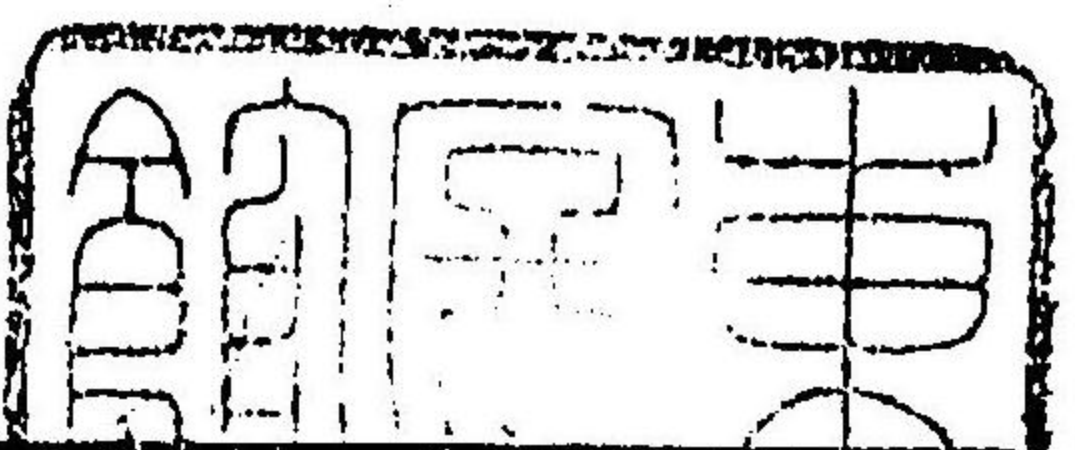
三位の秩衣あどり専ら上流の情態を寫せる好き世話物語と稱しつつ一

### 小説の裨益

小説の美術なり實用に供ふべきものゝあらねむ其實益をあげつろえんことをなかく  
ふ曲ことなるべしきりあき音楽繪画の類も暗母實益の存るごとく小説裨益の  
場合も於ては作者の敢て望まざりける裨益あるひの勢とせを蓋し美術家の望む所  
の偏母美妙の感覺をあへて人を娯ましめむとするにありて敢て他に望む所あらざ  
ればなて前も己論じたるや如く美術の妙工神に入りて完美の程度も達れるもの  
の大人心を感動して暗に氣格を高尚な一教化を裨補する由あれどもその妙工の  
神に入りて自然母生ぜ一結果といふべく決て美術の目的あらねむ其直接の利益と  
いえんといと大なる謬なるべししかれば小説の利益をのべんとするにまづ豫め區  
別をまずけて一を直接の利益となし一を間接の裨益とすべし直接の利益は人心を  
娯しましむるにあり語をうへて之をいへば小説は目的の娯樂を人ふ與ふるにあり娯  
樂にも種類多かり而して小説の目的と見る所の人の文心を娯ましむるにあり文心と  
は何まういふ曰く美妙の情緒これあり夫人野蠻にあらざるよりの皆風流の妙想と娯

み高雅の現象を愛せざるおし苟も美妙の感覺を抱けるうらふに富麗なるものを見て  
のこきを樂み豪宕あるものを見てのこきを愛し或は尊嚴偉大なるものを見てのこ  
ろみ畏敬するは念を生じ或は壯快激越ある者と見てのこをこれとらさず感激奮發を  
瀟洒婉曲なるえのを見て喜び洒々落落たるものを見て樂み益一人間の常性なり一此感  
情を投合してもて人心をのこしむるに即ち美術家務ふして我小説家は目的の  
りもし小説は職所よく人情の髓を穿ち細く世態の秘蘊をさぐりて富麗なる者も宏  
壯なる者もおもしむるものもまうしむるものもあせ綴りて寫しださば争てか文心  
を感じぬがらんや況んや小説の主とする所を音樂にあらずを色彩にあらむ此活世界  
の人情をゆかち一事一物總じてその活動あさんす趣あり彼れ音樂と繪畫に比はるべ  
興味一層多るるも決して劣る由のあらざらぬだふ如く「茂ルレイ」氏の人間世  
界の批判をもて人生の一大娯樂といひたり小説の即ち人生の評判記にて甲の失敗あ  
したる所以乙の成功あしたる所以或は權力を得て道義心の腐亂する趣或は情を牽  
かれて道理を誤る次第歴々編中母叙しだしてもつて讀者の評判も供は具服は人に  
してこれをよまむ其興情のあふること他の經書はよみもくは又正史をよむの

此のありし是泰西の國々にて大人學士と云ふる、人々皆争つて稗史をひもとぎ  
快樂をもとむる所以なりかし我國俗のいふしへより小説をもて玩具と見做しつ作者  
をまゝ之を甘んじ敢て小説を改良して大人學士と稱せしむる美術とならむと思ひし  
ものあしきるうら母我國の小説稗史の之は泰西の小説と比ぶる時母の恰も歌川家の  
畫工がものせし浮世錦繪といふものをば狩野家の繪畫に比ぶるごとし錦繪のあらむ  
しに拙きにあらねど所謂高雅の質ふ乏しく世の文心を慰するにたらねば幾も童幼婦  
女子にのみもてあそぶる、を務とせりきまばこそ小説固有の利益といへば春の日長  
一獨坐の睡魔を破り秋の夜永に寂寥の鬱陶を醫する只此効能あるのみなりと我國俗  
の思ひしは是れ是れまかゝる小説とて婦女童蒙の玩具と見做して美術視せざり  
誤りより原因なしたる過失にて其罪をばかゝる見識なき作者の上ありといふべ  
以上述べたる所をもて小説稗史の直接なる利益のほむね盡しよまば更に間接の  
裨益を説くべし間接の裨益の一としてたらむと曰く人の氣格を高尚になす事曰く人を  
勸奨懲戒する事曰く正史の補遺となる事曰く文學の師表となる事即ち是なり  
(第一)人の氣格が高尚なる事



總じて美術といへる者に此大裨益ある由と已に前段に論じしをいふ要略  
して再びのべべ夫も小説の人間の肉欲に供する者母あらて其風流の嗜好に投じ  
娯樂を與人にと望むもの之をまかして風流の嗜好美妙の感情をもつとも高尚なる情緒  
ふして文學の勸奨一開化進達せる國人ならて決してこの情緒は有することあり彼の  
蒙昧の野蠻を見る母むたはら肉体の欲母耽りて所謂妙想快樂をすることをまらねを造次  
頭行住坐も其爲にほるところを問へば皆肉欲の何らざるをなし故に其心の卑野  
いふがしてそのおのザ利のみ是求めて殘忍なること酷しく物の可憐といふことと  
毫末だも解せざるなり蓋し劣情の爲に身は賣られ卑劣のための追える、うら道理  
のまはく退縮あり良心のいよく力を亡し持り卑劣の情欲をして専ら發動せしむ  
るありよ、蒙昧の民を養ふともひたをら功名富貴と求めて競利場中を奔走し  
毫も其欲望を休めしむることなく卑母塵界に榮利のみ其心を傾け盡さむ或は  
人情に反りやすく或は私欲に偏りやすく卑劣醜態の心よも流さざらむと有りはと  
雖ども豈よくこきと制め得んや是れまかゝる其胸懷に被れ縛られた餘地なきま、  
そぞろに情欲の奴とありて其指願と欲と受くまば此劣情と制むるに道理

其力をうらさばへらさざれども劣情烈しきとさふの道理もまつたぐ威力とウー  
 ひこそをいふとも取し得ぬことあり弊を劣情の熱病にかゝる小兒にひと烈し  
 く勃發しあは折しあはとへいりぬ者来り至樂のまゝめんと志たさばとて容易  
 母之まきくものならを道理のあは嚴父のごとしいと苦々まき面地して小兒を叱咤し  
 たまはとて勃發せげしき時母於てたえて其誠を用ひざるべし此時母當ては據ろ  
 なく母親の手段を採らざる可らず母親の手段といふよといふよ醫は小兒の良藥を  
 飲ほしめむとほる折なりせばまづ甘味ある菓子と與へて小兒の心は誘ひつゝ彼漸く  
 濁は覺えて飲を求むるときにいたりましかし煎藥を飲ましむるこくしてまはま  
 は藥を服して其効能を知るにいたまは其病苦とも過せんが爲母すゝめむとてもみ  
 づらのむべし且煎藥をまづ飲まば濁もいくらか減すべなればひとへに水を  
 求むるころも次第々々あうすらすらへ比喩えとよむ的切あらねど劣情を制する  
 にもまづその如く勃發たためて烈し折母の道理をもてして制止べうらむ彼の溫柔  
 なる美術を用ひて其文心あ斬へつゝ美妙の感覺は喚起して次第に劣情はかひまりど  
 け其當人の心とも此塵界の外に詩ひ一種微妙の感覺をば抱くゝむるよいたりもせ

氣韻かのづから尚うなりてまばらく後海を脱しはべし是るん美術の醫益なうして  
 尚要用ある所以なりなるされば美術を常不變てまむく之を玩ばゞ美妙の嗜好は  
 まはく長じて氣格いよく高うなるべし小説の即ち美術をみうらこの裨益あふ勿  
 論なり但し我國の小説中母の眞母美術と稱へつゝ小説ほとく稀あはるる讀者あ  
 りひの此議論を信しからむと思ふかべかのおれもこそを説解を好方便なきよ因  
 じぬ己母前段にみべしごとく我國俗がもてたやせれ小説神史の未熟ありて尚美術の  
 術は質あ乏しく之を繪畫に比ぶるときよの彼は浮世繪に位置ありて眞乃繪畫とい  
 ふべうらむ此比喩は意を味ひまは所謂まこと小説といふ果してゐるあは者れあ  
 を概ね了解あり得べきなり。

(第二)人を勸奨懲戒す事

小説の勸善懲惡の裨益する所ある由り先人已にまはく説きつ世人もまはく之を口  
 する者あらず殊に東洋の小説作者の醫弊排闥の効能と勸善懲惡の裨益をもて小説神  
 史の目的と心得専ら勸懲が主眼として神史を編む者比々是なり奨善懲惡を主眼と  
 て小説神史をもつるとさふ其勸懲母裨益すべうらむとよ其善の事なうしよ

しや勸懲を主眼として脚色趣向を結構せむと云其妙神入る母いたらば暗母讀者を  
 奨誠して反省せしむることあるべしかのれが奨誠の一條とば裨益の中へ加へてし  
 の全く此意母いでたることにて敢て世上よもよせやせる勸懲小説の裨益をしも事あ  
 たらう説くにあらねどいま退いて考ふれば世の活眼なき輩ありての勸懲小説  
 の勸懲をさへに効能なきやと疑ふものあり否小説は罵り譏して誨淫導欲といふ者何  
 れ爲ふ一言とて、一贊一罵勸懲作者の宛をもとさあせて勸懲の益あるよしをばい  
 き、う説明あさまくほり凡事物と批判するにまづ其事物を解剖して其結構をも  
 知りたる上にてきて評判を下しつべしさらば馬を評せんとりし馬を評するの  
 謬あるべし馬と鹿との其形相似たり故にまづよく馬を評してまかりて評判をえりめ  
 るもあらば其形の似たるをもて鹿をば馬とあやまり認めて鹿を評して馬に及ばし馬  
 の深山にすめるものあり總身は斑点ありといふをば人々かさらす嘲笑ひて是馬との  
 み見あやまりてシカと見とめぬ誤謬なりあを馬鹿らし、と動搖めくべし小説と評す  
 るおもまづそのごとくいなるものが小説あるか伏せりめし會得をばことなりて  
 妄に批評を下さまくせば小説は似て小説ならざる所謂奇異譚(羅マンズ)の類を評し  
 て小説に及ばず誤謬あるべし唐山の人々が小説は指して誨淫導欲と罵りたりし金  
 瓶梅も一くの内蒲團等の評なるべく我國俗が物語を擯斥して風儀を紊はの書ありと  
 いひし男女の痴情の隱微と寫して鄙野淫猥に流れたり情史の類を指すものある  
 べし然り而して金瓶梅内蒲團さらば母猥褻なる情史のごときは是似而非なる小説之  
 まことの小説といふべしうらを其故いかふとされば此等の數種の小説は美術に於  
 て最も忌むべき鄙猥の原素を含むが故あり否猥褻なる情史の類はもとより誨淫導欲  
 をば其全篇の主眼としてものたりしこと疑なきる似而非なる小説稗史のまば  
 るは世上母あらざる、其罪讀者の方ふあてて作者にあらすといえんも不可なり何  
 となれば作者の總べて時好に應じて著作の筆をば操るものなるからもし世の人が高  
 雅母して淫靡になづめることなくんばなどてう猥褻卑野ありたる小説稗史をものし  
 つべき源語のすまふる猥褻なりしもまたおれ藤氏專權以来の文弱の弊のまうらしめ  
 一ものなり豈に作者を咎むべきやういふえ、反對論者の更におのきを難しめ  
 えなん總べて小説と稱するものにかあらば男女の情話をのすめり殊に撰寫の主  
 意をもてせば道母違ひし男女の情話も頗る多うることあるべし近くは米國おど母於

しや勸懲を主眼として脚色趣向を結構せむと云其妙神入る母いたらば暗母讀者を  
 奨誠して反省せしむることあるべしかのれが奨誠の一條とば裨益の中へ加へてし  
 の全く此意母いでたることにて敢て世上よもよせやせる勸懲小説の裨益をしも事あ  
 たらう説くにあらねどいま退いて考ふれば世の活眼なき輩ありての勸懲小説  
 の勸懲をさへに効能なきやと疑ふものあり否小説は罵り譏して誨淫導欲といふ者何  
 れ爲ふ一言とて、一贊一罵勸懲作者の宛をもとさあせて勸懲の益あるよしをばい  
 き、う説明あさまくほり凡事物と批判するにまづ其事物を解剖して其結構をも  
 知りたる上にてきて評判を下しつべしさらば馬を評せんとりし馬を評するの  
 謬あるべし馬と鹿との其形相似たり故にまづよく馬を評してまかりて評判をえりめ  
 るもあらば其形の似たるをもて鹿をば馬とあやまり認めて鹿を評して馬に及ばし馬  
 の深山にすめるものあり總身は斑点ありといふをば人々かさらす嘲笑ひて是馬との  
 み見あやまりてシカと見とめぬ誤謬なりあを馬鹿らし、と動搖めくべし小説と評す  
 るおもまづそのごとくいなるものが小説あるか伏せりめし會得をばことなりて  
 妄に批評を下さまくせば小説は似て小説ならざる所謂奇異譚(羅マンズ)の類を評し  
 て小説に及ばず誤謬あるべし唐山の人々が小説は指して誨淫導欲と罵りたりし金  
 瓶梅も一くの内蒲團等の評なるべく我國俗が物語を擯斥して風儀を紊はの書ありと  
 いひし男女の痴情の隱微と寫して鄙野淫猥に流れたり情史の類を指すものある  
 べし然り而して金瓶梅内蒲團さらば母猥褻なる情史のごときは是似而非なる小説之  
 まことの小説といふべしうらを其故いかふとされば此等の數種の小説は美術に於  
 て最も忌むべき鄙猥の原素を含むが故あり否猥褻なる情史の類はもとより誨淫導欲  
 をば其全篇の主眼としてものたりしこと疑なきる似而非なる小説稗史のまば  
 るは世上母あらざる、其罪讀者の方ふあてて作者にあらすといえんも不可なり何  
 となれば作者の總べて時好に應じて著作の筆をば操るものなるからもし世の人が高  
 雅母して淫靡になづめることなくんばなどてう猥褻卑野ありたる小説稗史をものし  
 つべき源語のすまふる猥褻なりしもまたおれ藤氏專權以来の文弱の弊のまうらしめ  
 一ものなり豈に作者を咎むべきやういふえ、反對論者の更におのきを難しめ  
 えなん總べて小説と稱するものにかあらば男女の情話をのすめり殊に撰寫の主  
 意をもてせば道母違ひし男女の情話も頗る多うることあるべし近くは米國おど母於

ても小説歴史は刺戟せらるゝ道ならぬ戀母迷ひをめたる童男童女もありしと聞ふま  
かくても尋常學級からすや其理をきくむと罵るべしかのれ即ち答へていへらくげま  
小説の情を主として其脚色をばまうくるものゆゑ男をまごの情話のごときのもつと  
も必須の材料ありうし益し情欲多きまごも愛隣といふ情合など重なるものあらざ  
まばありされば真正の小説にも主として男女の相思をとけども彼の為永派の作者の  
如く母いふ可らざる隱微を穿ちて卑猥の状をば寫さんとせむたゞ人情の秘蘊があ  
はさて心理學者やとまもらせる心理を仔細に見えしむるのみされば此等の稗史と聞  
して邪淫の心と起せるもの若くは惡意を萌せる者の其罪おのれが心ふありて稗史の  
與るところはあらむ小説のものと世態をば寫しだせるものにしあまは讀者ふして活  
眼ありなば書中へ叙したる所よりて反省をべたが當然なり譬む他人のなりふを状  
見て羨ありふりを正さんとほるは有識の人の常なるをやもし久松がお深を將て出奔  
なしたる條下とよみてこれを鑑養ほる傾ありあむよ小説を讀まざるも早晚其念起  
りつべし譬ば東隣み娘ありて其情人と出奔をいふむたまち之ふ刺戟せられてま  
ままた西隣の乙女を將て共ふえしむと企つべし此種の人の他の風状見て我風をし

も正すことを得をみづから辛苦を経験してたゞめて悟状啓くの徒なりうればかや  
うの徒に讀まれて不當の非評をうけむむこといたき小説の究罪は小説作者の迷惑  
ありかま金聖敷が金瓶梅の巻初よりいへらく此書をよみて人よこしなる念をいだう  
は罪其人の心にありて此書の罪よりあらむといひたりこのまたいふも無理あれども  
若しこの語が真正なる小説の場合にあつたならば至當の批評といふべきなり論じて  
こゝ母到りし序母一言いひおくべし事こそあれ其事の餘の羨みあらぬと西洋にても  
東洋にても小説を玩具のやうにこゝろえまた娘若た童男童女に與へて讀ましむる風  
慣ありこのいと危険なる習慣といふべし總して幼少ある時たてり感能もつとも敏  
なるうら外部の刺戟を感ずること大人もましていと鋭し故に小説のいふに及ばず  
をべて人心ふ甚し刺戟感觸をば與ふる物をば近づけざるをもて可とするなり美術  
の玩具に相違なれど大人學士の玩具あるうらよ一危険すべし理由なくとも兒童  
の玩具に供へんこと已母其理は是るといふべし  
小説を離する者またいへらく小説に寓せる勸懲の意のごとき士君子のものとより之  
を悟れり豈小説が讀て後之を悟るべき如きことあらんやまむ小説の寓意ある

者の婦女児童のためのまうけたるものみあらざれば遊惰放逸母日をくらせる凡庸の徒のためせしあらん實にまからば小説の勸懲は裨益する所ありるべし何とあまは婦女児童の興味をてむとより事理ふくらまものなり小説を讀みて其脚色の奇あるを善むべしといへどもいづれりて其意をさとり得べきまた遊惰放逸の徒の小説を讀むに偏に醫藥排悶の媒となさむが爲の至宜善惡醜美の差別などに眼を注ぐことあらんともひそふたへび答へていへらく若くは人生をて心さまたゞしき父母の教育をうけ生長りて差惡の心あり願取の念と抱くもの誠めをて惡を避け勸めをて善に趣むむむることあれども尚時としてまらむく面正しからぬことばあまことありことまらむとよて不類と變り惡と罵るやどにあらざめども一公然ふ世母知れなばかならむ嘲號の種ともあるべし勸懲小説の完全なるものかゝる些細の事といへども淺きで懲誡おほことあるら道義を口にするものといへども之れを讀むむいたりての時母うら耻かゝう思ふことをさふもあらむおのれが友人其の東京の人なり學の和漢洋ふ渉りて心さまいと正しく最も俠氣あるをて人し稱せらる然れども尚臂ておのれいへらく僕八犬傳を讀て犬士の交際を見て窃に恥るところなきを得む

と其の信義をもてすらこのことありおのれの如たうらむことを常多し世人のこゝに感あれたもの小説に勸懲の徳さふあして讀者は讀者の眼をたのまされば小説の勸懲をもて特々興味を徒の爲みせるものありといふが如たう此間に行たる、紳冊子を讀たるもの、言なり所謂羅マンヌ(奇異譚)の評あり笑ふべく敬するふあたらむく辨むるのなるく大人氣まゝとやいとるべあらん。

さてまた婦女児童の學びいたりて元來雜學淺學あるら脚色を讀むの意意あどに決して得知るまうた道理なきともさうとて善惡美醜の辨別些少もなしといひ難かり獎誡主眼の小説をまらむく通讀をすゝ及ば、勸懲の意をあらすく其心肝に銘後一々幾分か刺撃する由ありて其行爲を善惡あらん疑ふべうもあらざるなり唯その影響の力具眼の讀者に於るものよ比はれり爾一是小説の専ら婦女児童の爲にせざる所以なりかし叔又放逸遊惰の徒の小説を讀むに實に排悶の爲なるべし是は寓意をんとを管せざるものと其答の事といふべしきりあれ些少なり母ても庶恥の心あるうらむよしや小説の寓意を知得たゞち悔悟漸進して其行を改むるよしに至らむとも鮮判されてこゝろよーと思ふ者稀なるべしうればるる徒に於るも尚獎

誠の意を通ぜりたゞちふ其善の味と成らざるも、胸に良心と喚起するの方便と成るべし、良心を喚起されて終に情欲を壓するに、いさゝか悔悟改心の道を開かん歟、これもまた知るべからざるも、角も小説に勸懲の力を示しといふ、違へりたらざるもの、説くへりて牽強なるも。

西洋の博識を以てし嘗ていへらく小説に醫藥排障の裨益あるは、皆人のよりたること、あれどもこのほかに灼然ある實益あると知りたるは、稀に小説の訓誡の種とあるべきものを、多量に納めたる賢識なり、問屋あり人ひととび其扉を開くは、益を得ること、蓋し少のことありあらば、訓誡といへど一向に仁義道德の主義を奉じて人の行状の曲直正邪を評判せるものとの、思ふもあらんが予、いふ訓誡はこれに異ありげぬや、道德の主義の如きは、人生必須の規律にして、定む大切なる標準に、あれど予のいふ訓誡は、區域ひろくてたゞさるのみをのみいふ、あらずたとへ、道德の區域を離れたるものといへども、苟も人間に警誡して其内外の体裁をば改良するの力ありなむ、總じてこそ、らを通稱して訓誡なりといふ、あらずなり、譬ば人間に諸禮法と教ふるを、機智頓才を磨くしむるも、人情の何たると悟らしむるも、また情欲の千萬無量あると知らしむるも、皆

これ訓誡の一端なるべし、世上の小説讀者母してもし、此訓誡の所在を知得て其真味と、しも味ひ得なむとてこそ、そのめ、小説神髓の真成の効能を、も覺得べく、且、快樂の果實を、も摘得たりといふ、いふべきなれ、さるに世間の小説讀者は、此道理を知らぬもの、多く、いたすら、趣向脚色の、を讀つても、娛樂の果實、はしも、己母得たりと思ふ、違へり、さるは、快樂の花を觀しのみ、果實を得ざる母あらざるを、云々といへり、實は活眼の識論、母してよく小説に就しつへき、勸懲の質を、明らめたる新説ありとも、稱へつべし、勸懲の裨益に、つきて、あらずいふべき、事は、くあるらねど、く、し、さま、此處母の略きて、また後回折を得、は、更、小説の、は、た、由あるべし。

(第三) 正史の補遺とある事

補遺とい何ぞや、曰く正史に漏たる事蹟を補ひ、正史の細述せざる當時の風俗習慣などを、見るが如く、描たるが如く、いと精密に、寫し、い、だ、し、一、部、は、風俗史を、あ、ま、こと、を、い、ふ、あり、さ、ま、む、此、裨益、の、ひと、り、時代物語(過去小説)を、專、占、する、と、ころ、に、し、て、餘、り、小説、に、い、こ、び、事、を、一、さ、ぬ、あ、ま、む、世、話、は、小説、とい、へ、ども、後、世、は、人、より、之、を、見、れ、ば、過、去、小説、と、外、さ、ら、ざ、れ、ば、何、き、ふ、して、を、小説、とい、は、此、裨益、ある、事、も、あ、ら、ず、ら、じ、(譬、を、式、部、が、も、は、し、



さり源氏の君の物語の全く世話の小説おれども後世の人これよりて當時の風俗習慣をさぐり事物の起原を知るがごとく）かゝる小説の作者たるもの力えて人情が穿つかたえら亦風俗にも眼を注ぎて苟くも妄誕無稽の類はる時代ちがひの形容さんど描きいだはまじた事なりかし此裨益のことおつきては西洋の博識のいこれりいおといと妙からねばおのまが言葉をもてあげつろえんよりの寧ろ二ツ三ツこゝ母掲げてもて此益ある徴証となはべし。

英國の小説大家蘇ル歐タル數コツト翁いへらく時代物語の二種の讀者に益するものなり第一種乃讀者の假空に時代物語をよみてえつめて歴史のおもしろさのある由を覺えく自然は小説の本據をなしたる正史の事實をあらまくほてして更母稗説はちきり正史にまむことよ心と傾くるもの是なり第二種は讀者の快樂の爲にあらざるべき書を繕くことを好まむ既往に何等の事柄ありしをもあらむたゞ現今の世の事情のみを知らしむ時代物語を讀む及びてえつめて歴史の大略をえり至りしもの（よゝゝ其知識の歴史の一斑を窺ふしを足らずとせるもをほ本米虚空なるものゝまはべし）是なりといへり。

鹿彌ルラルもまたいへらく夫正史といへるもの其体裁嚴格にして名稱年月いと精細な事實もさめて棄けけれども當時の人情風俗おんどの儘一斑の皮相のみを寫して其眞像を寫を得を稗史物語の人物事蹟の作者の意匠なれるをえておれども戯作の如くおれども話譚ふ陰陽表裏あるから却て人情風俗を寫しだを便多くて當時の世態の寫眞鏡と稱しつべきものいと多かり歴史を學むと思へる輩もし我曾祖父の時代の景情を審み知らむと欲するならば彼の「ドツレイ」の年報を繕きて徒に時日を費すに餘あきことあり寧ろチヤアドソン并に非イルヂングの稗史をよむべし其得るところ采して小少あらざるべし「ボウム」のあたしく一千七百四十五年の逆亂ふたちまけりておのが目撃したるごとく傳聞おしたることをおとせて一部の大歴史と綴りたりしがそれだは彼の數コツトの「ウェイバリー」物語のぶる所のものよ此をるごとの當時の情態はうつきまゝることいと多かり云々といへり。

英國の小説家もまたいへらく予の稗説をよみて得る所をさめて多し當時の世界の景情とあり時勢を知り風俗をえり衣裳の流行を知り快樂滑稽遊戯の類の現世とおとなる所以をいへる已母死去する人も再びよまがへり已に往たる世も再びかへりさあ

から往昔の英吉利國にふた、び旅するの思あり嗚呼大筆の正史として此餘ふ益を  
所ありや云々といへり

此他正史小説の裨益を多くもの尚かつあまたありといへども要するは大同小異  
て之を風俗史視するは外からざればこゝの繁雜を厭ひて省きつ後正史物語を論  
ずるよりよりて更に説のぶるおとあるべし

(第四) 文學の師表とある事

師表の裨益と小説の文章上の裨益なり小説の大筆あるものの特りその趣向の奇  
として巧なるのみならず其文もまた絶妙なりて句々錦繡なるがゆゑ其文を學むと  
するもの、爲に益とあること抄から源語水滸を見ても思ふべし夫文章といへるも  
のの思想を表示するの機械あるら激越なる思想は表示せんと思へる折にそのつ  
ら激越ある文章を用ひざるべからず優雅なる思想をいひあらえさんと欲するとき  
よゝまたそのつから優雅なる文章を用ひざるべからずあるは簡短なる文章を要す  
る場合もあればあるは長やかい説のぶる場合もあるべし機ふ臨み變身應じて簡繁  
強弱富麗純樸其宜しきを得たらんもの之と巧妙の文ともいふべしもしまうらすして

終始一徹愁情苦境を叙したる文句も誤しき思をのべたる文句も其質まつたくおなじ  
うして毫末も差別のあることおくんば其情おのづから移らむして讀者もまた感ぜざ  
るべし譬ばとあえだしく怒りし折もくは大い悲しめる折も用ふる言語の簡略  
て且おびたやく華言を吐くは華言とい何ぞ曰く擬詞の事なり擬詞といへるもの  
は西洋よては「フヒガル、オフ、スピーイナ」と稱して文章の飾ともなり省略の一方とも  
なるものなり其一例試あげていえ人を罵る折ならなど「人であしめ」といふべき  
をば「畜生」といひ牛馬といふは其人の癡恥おたをば歎は比しする擬言にしてい  
ゆる華言といふものありもし平常の折柄ありせば「其方の義理をあらぬ奴であるぞ」  
といと長やかにいふべきおまほども激しく怒りし時ありては心中さかから辨騰りて  
いふこともまた整えねば自然に言語も簡略おてたを「畜生」とか「人非人」とう一二言  
状のみ發言して餘り思入れと身振状もて意のたる所をあらえきこと世の人のさあ知  
る事ありる一されども世間の事老ひて世の人情を知らざるるざりの此道理を知易  
からねば彼の幼稚なる操觚者流にすこふる文も長じまがらもあつかつ綴の文をも  
のして人状感せしむること能わざむあしく死文を綴りいざして我思ふ由の一斑とば

漸く表示なきこと多かり是をかしあがら如何ある折母の如何ある性質の文と要する  
 や何等の思想と表すに何等の文体が宜しきやを得せざるは因ること多て即ち  
 思想の文章に適應せざるものとづくものなりきとして人の感情思想のものとより千差  
 万別なるから一々之に適しつべき文をなすこと極めて難かり希有なる英才あらず  
 る限の簡様々々の感情思想の簡様々々の文もてあらえしまた云々の趣の云々の語  
 状用ふべしと學べて知るべきさうあければ必を模範を要するあるべしよから如何  
 なる文章をばまづその模範となすべきやと問えんは先進大家がものたりし論文の  
 みを模範とせばさういたづらに理屈を偏して文章淡泊みするの患ありきとて記  
 事の文のみ學べばまたかのづから緻密を失して活動の妙を損ふことあり問答文のみ  
 を學べば記事に妙ならむ歴史文のみを模範とすれば論評の文をものしがたし蓋し一  
 方に偏すればあるべし千變万化の文体を用ひて千變万化の思を吐くもの之は完全の  
 才筆といふと士ペンサアの翁のいれたきたる一種文に偏するものなり（よ）や其種の  
 文の巧なりとも）完全の文章家といふべからむかりよも文壇の大家たすべくなりす  
 る輩の千變万化極めき美妙巧緻の文章はもて其模範となし師表となしもて其文を  
 録るべきあり一二百年のむかしありていたる一種文に妙を得ればそれにて足りた  
 ることありしが文化駁々日々進みてなふこのごろの世界とありていふべき事も  
 筆をべきことも極めて多端とありにたまは政事の論難評議とて記事体の文を要す  
 ることありまた歴史文を要することあり彼の婆ルク氏が議事院にて平スチング氏を  
 彈せし折ふ記事文体の演説もて満院の士を感ぜしめ一人のよく知る所ありし  
 ところらば如何ある文章をもて師表となしたる可からんやと問ふに千變万化極りあ  
 き美妙巧緻の好文章の希世の大家の手よりたる小説の文は越えたるものあり蓋し  
 小説といへるもの千變万化の世態を描寫し千變万化の情趣を寫して毫末遺漏あか  
 らむおとをば其務とをなすものあるらる富麗の文あり豪宕の文ありあるは悲壯潜  
 瀾たるありあるは優婉閑雅なるあり米盤を叙する折ふ歴史文の文を用ひ景況を  
 語るるときは記事体の文状用と問答の文何れは論難の文あり叙述の文あれば嚴格の  
 斑あり奮激せる者の思想をいひあらえしよの之母適しつべき活潑ある言語を用ひ愁  
 傷せる者の感情をいひあらえしよの之よりあひつべき悲まげある言語を用ふ之を要  
 する母文と情と適應するをば主とあせうら求めざれども其文体千變万化極りあから

漸く表示なきこと多かり是をかしあがら如何ある折母の如何ある性質の文と要する  
 や何等の思想と表すに何等の文体が宜しきやを得せざるは因ること多て即ち  
 思想の文章に適應せざるものとづくものなりきとして人の感情思想のものとより千差  
 万別なるから一々之に適しつべき文をなすこと極めて難かり希有なる英才あらず  
 る限の簡様々々の感情思想の簡様々々の文もてあらえしまた云々の趣の云々の語  
 状用ふべしと學べて知るべきさうあければ必を模範を要するあるべしよから如何  
 なる文章をばまづその模範となすべきやと問えんは先進大家がものたりし論文の  
 みを模範とせばさういたづらに理屈を偏して文章淡泊みするの患ありきとて記  
 事の文のみ學べばまたかのづから緻密を失して活動の妙を損ふことあり問答文のみ  
 を學べば記事に妙ならむ歴史文のみを模範とすれば論評の文をものしがたし蓋し一  
 方に偏すればあるべし千變万化の文体を用ひて千變万化の思を吐くもの之は完全の  
 才筆といふと士ペンサアの翁のいれたきたる一種文に偏するものなり（よ）や其種の  
 文の巧なりとも）完全の文章家といふべからむかりよも文壇の大家たすべくなりす  
 る輩の千變万化極めき美妙巧緻の文章はもて其模範となし師表となしもて其文を  
 録るべきあり一二百年のむかしありていたる一種文に妙を得ればそれにて足りた  
 ることありしが文化駁々日々進みてなふこのごろの世界とありていふべき事も  
 筆をべきことも極めて多端とありにたまは政事の論難評議とて記事体の文を要す  
 ることありまた歴史文を要することあり彼の婆ルク氏が議事院にて平スチング氏を  
 彈せし折ふ記事文体の演説もて満院の士を感ぜしめ一人のよく知る所ありし  
 ところらば如何ある文章をもて師表となしたる可からんやと問ふに千變万化極りあ  
 き美妙巧緻の好文章の希世の大家の手よりたる小説の文は越えたるものあり蓋し  
 小説といへるもの千變万化の世態を描寫し千變万化の情趣を寫して毫末遺漏あか  
 らむおとをば其務とをなすものあるらる富麗の文あり豪宕の文ありあるは悲壯潜  
 瀾たるありあるは優婉閑雅なるあり米盤を叙する折ふ歴史文の文を用ひ景況を  
 語るるときは記事体の文状用と問答の文何れは論難の文あり叙述の文あれば嚴格の  
 斑あり奮激せる者の思想をいひあらえしよの之母適しつべき活潑ある言語を用ひ愁  
 傷せる者の感情をいひあらえしよの之よりあひつべき悲まげある言語を用ふ之を要  
 する母文と情と適應するをば主とあせうら求めざれども其文体千變万化極りあから

ん是小説の文章家の師表とあるべき所以ありし此論いまだ盡さず且どもあまりふ冗長に渉るるまゝ、まむらく筆をこゝに閣さまた折を得て説續ぐべし（下巻の文体論とあてせ見るべし）

上のべたる議論のまべて完全なる小説母つきていへることなり此間亦行たる、紳冊子のたぐひを論ぜしよのあらを看官誤りまた、めて疑團は抱くな

若夫小説にして賢母うくのごとき裨益ありなば、未熟なる小説神史を次第に修正改良して彼の泰西のものも駕をべき完全無缺のものとなして國家の花と稱へつべき一大美術とあさるること、大なる懈怠ならずや、とてこれをなきまくせざるべし、先進の得たりし所以また失したりし理と察し同轍の過失は隆らざらんことをつとめ其長じさりし妙處を採りていよく之を發揚なし完全無缺の好神史を編むべき手段を定めむもあらば、わが東洋の小説神史の發星霜を経るといへども依然羅マンズの地位母ありて進歩をすべき機ありらむおのれの學窓を退きてより日ななきためて淺きが故、心著述あるものより著述のさらし翻譯だよものまたりしこといとく

稀なり、是はかのみ實際ある經驗のいと交しけれども多年古今の神史を閱して理論上よて得たりしところ頗る些少にあらむと思へば、かり一篇の小説法則の論を綴りてこれを下巻にて陳述なし世の參考に供へまくほり、ほをこがまことの笑ひたまえで熟讀翫味せられもせよ小説といふ一大美術の至難技たるを知らるゝのみか、我紳冊子の久しからで真成の小説神史となるべき道をひらかん便機となるべしあかしかしこあありしこ

小説神髓上巻終

文學士坪内雄藏著

小説神髓

松月堂發兌

春の舎先生著譯書略目

沙士比阿翁原著

談 自由太刀名殘 銳 鋒

東洋館發兌

最美洋本全壹冊  
定價金壹圓卅錢

此書ハセクスピア翁空前絶後の筆を以てブルタアクの英雄列傳ヲ據ルニ趣向を設けたる傑作トシテ篇中の事悉く實ニ一して悉く奇なり文學士坪内先生流暢なる我淨瑠璃の文体を以て原文の質實なる真味をさへ譯出されたる好裨史なり

開卷 慨世士傳

晚青堂發兌

洋本前篇壹冊  
定價金壹圓貳拾錢

羅馬帝國の末路貴族專横を極むる一方りてリエンジといへる豪傑風ふ四天の壮志を抱き民間より起り大自由の氣を鼓舞して共和の制を復せ其事迹傳ふ詳なりリツト翁空前の筆ヲ弄して更に絶妙の脚色を加へて綴られたる佳篇なり

一讀 當世書生氣質

晚青堂發兌

定價一冊七錢

右ハ學生の眞況を寫出したまは其社會の情態宛然紙上ニ活動する如ク面白き草紙也

小説神髓發兌日并定價表

一本書ハ本月十二日ヨリ毎土曜日ヲ期シ壹冊ツ、發兌シ全十冊ニテ完備セシムベシ  
一本書ノ定價 一冊現金 金七錢 全十冊前金 六拾三錢  
但右ノ外郵送ノ分ハ府ノ内外トモ一冊ニ付貳錢宛申受クベシ 松 月 堂

明治十八年四月九日版權免許同十九年三月 日出版

著者 東京府平民 坪内雄藏  
松永作次郎  
同 湯島切通町三番地

發兌元 東京本郷區湯島切通町三番地

小説神髓下卷

目次

小説法則總論

小説ニ法則の必要なる所以

雅文体の得失

俗文体の得失

雅俗折衷文体の得失

小説脚色乃法則

快活小説と悲哀小説との辨別

脚色の十一辨

時代物語の脚色

正史と時代物語との差別

時代物語を編述する者ノ心得

主人公乃設置

主人公の性質

主人公に假設法に二派ある事

叙事法

叙事に陰陽乃二法ある事

小説神髓下巻目次畢

小説神髓下巻

文學士 坪内逍遙述

小説法則總論

若夫は春去り夏来り秋と更り冬と換るの四時の法度あり日暮を夜繼ぐの一日の則あり宇宙間の森羅萬象一と一これのつらと法度と有せざるは天正の事物と尚あり矧や人爲の物をやるとして法度ありとざるはたよ一たの技術術なりとせむはたよく法をく則ありてを成て難なるは繪畫に法あり音樂に音律あり詩歌といひ踏舞といひみまそれく規矩をうなへて後進子弟を導くは便利を圖るの事あるからに我小説にも之にひとし規矩法則のなるとは是予が此論ある所以ありし

世に小説神髓なるたぐひは法則もよく規矩もよく作者の意匠の成せるまに繪畫の筆と下しと書綴りたる物語と思ひあはせてるや知らぬらぬとて後見の意にして神髓の性質の何なるかと會得せざるは困ることあり夫は小説の神髓なる神髓

小説神髓下卷

東京神史出版

主人公の性質

主人公の假設法に二派ある事

叙事法

叙事に陰陽乃二法ある事

小説神髓下卷目次畢

小説神髓下卷

文學士 坪内逍遙述

小説法則總論

若夫を春去り夏来り秋と更り冬と換るの四時之法度あり日暮き夜寝るの一日の則あり宇宙間の森羅萬象一と一これのつりし法度と有せざるは天工の事物をら尚あり知や人爲の物をやとては法度ありしざるは人の小技末術なりともまづたふ法なく則ありておまを成こと難うるは繪畫に畫法あり音樂に音律あり詩歌といひ踏舞といひみまそれづくに規矩をうまへて後進子弟を導くは便利を圖るの事あるからには我小説にも之にひとしき規矩法則のなるらざるは是予が此論ある所以ありし

世に小説神史乃たぐひの法則もまづ規矩もまづ作者の意匠の成るるまづ益浪強壁の筆と下して書綴りたる物語と思ひあへてはるるからあらぬとどは後見の應にして神史の性質の何なるを會得せざるは因ることあり夫は小説の神史なる傳記



實録のたぐひに異なり人物といひ事蹟といひ悉皆作者の想像もて仮作りいざせる塵空のものに、根も據憑もあるべきあらねばいくらのはたけの土臺とまうけとまで構造に着手せざれば前後錯亂事序纏紛精蘊當らば緩急度よくよ、小説の目的たる人情世態の寫一いだ一其真髓み入るよ一ありとも脚色繁雜一々きは讀む煩煩一く布置法宜一きを得ざることを、奇一を詭譎もちとひ薄り讀者もゆる物語の中道にしく讀むに倦みよいまだ佳境に入らざるまへ一全く巻を擲抛べし故に小説と假名遣の猶一大文章とものざるやことし結構布置の法あるべらうす起伏開合の則あるべからず趣向に波瀾あり頓挫あり記事に精練あり繁簡ありかつまた撰寫せる情態にも斟酌の法存せられころよく讀む人を感動一て音樂辭歌一も取ざるべき美術の譽を得ることなきやあらあやち法則一のみ拘拘一の彼のエが規矩準繩もくものざるごとくよまひと意と在り筆を矯めと脚色と結構なきまかせは世の人情と風俗とに自在一寫一いざと得せよ一幸一情態を限なく寫一得られべく全篇活動の神一と一之一くいと味あるものともあるべし譬バ文章と作る一當りよまひて抑揚頓挫と試み故意と照應波瀾と設をこひこを規矩準繩もくやと一其目的となきとさかひ決し

と妙辭とあし難の、小説神史と作る者もまたその心得あるべきあり

小説の手段の猶庖人の料理鹽梅のごと一鹽といひ炙物といひ醃といひ醃といひ料理

一關する慣習ありて苟も庖人となりたるからふ其方法ととり用ひて料理となき

むの勿論なれども、味一と一美一から炙物とまといつゝ順序とせらるる機が

ても生魚とまといめて妙なるべくあるの論となきを、魚と一新工風まも、鹽梅と一も

るの、美一と一まといつゝものさ、炙魚とまをまんだも教て善一から事なるのみ

のへて面白料理といふま味、主まり鹽梅の従あり味を旨くするの方法あり従

と先にして主と後をま、道理のあしよとともて機智頓才ある庖人の時に巧妙の庖

丁と下して意表にいづる鹽梅をまきことあり小説の妙訣もま、之にひとしく讀者と

感動せしむるの主まり法則と設を、物語を結構する、讀者と倦まざら一のむむの

あり讀者の感心と得むや、のあま、故に法則の従る方法も方法の項ら、臨機應變

あるべ一千古不拔ある法則も無さふ、あらねど、確一定一なるものを見做る、違へ

る讀者の心と感動する力あるべ一と、思ひ得らる、機が臨み變は應じて斟酌折衷

の手段と施せべきの勿論なり、これらの作者の機軸一俗ゆいとゆる「ハヤラキ」

りひとりの小説のみならず、總て文壇に遊ぶもの、此心をもて筆をとりざるべからず。此用心を交へざる輩の全完からむことを教へて、つづらたき活きまく教へて、つづらたきを惜むべきあり。

總て法則といふ者の俗にいふ忠告と同種のものありと思ひ、可なり忠告のいまだ事に着手せざる前にあり、こそ用をもあせ、己に事に着手し、後に一あかして、恐し斯くくせよ、といふれば、假令失策をば、所とそれのため、助かり、にもせよ、其事の所置より、何とやらむ不手際にて、成切りに、後にこそ、いと醜さ、麻多かるべし。法則もまたそのごとく、いまだ、趣向と構へざるまへ、充分これを細覽して、會得し、つくまを、必とせよ、一あかして、規も、物の長短と度るごとく、毎回規律と拘扼し、其物語を編み、もて、白きまへ、例の模倣の作とあり、見るよ、へざるものともあるべし。老練の作者の二期せを、一功と美せることあれども、初心の作者の二期し、功と美せざることいと多かり、思ひざるべからざるあり。

下は迷ふべき、數ヶ條と、名々、法則といふもの、から、其實、強説の議論として、とどまり、周全あるを、ならね、言ひ、も、し、るも、盡き、ざるを、極めて、多かるべし、事あり、か。

殊に稗官傳奇の、いひ、其、人々、乃、う、まれ、得、たる、才の、多少、と、優劣、と、により、て、重、巧、拙、を生、ざる、えの、ゆゑ、天賦、乃、才、あり、入、あり、り、の、幾、百、千、乃、法、則、を、限、お、く、譜、に、得、た、れ、ば、とて、悉、法、則、規、律、と、知、ら、ざる、自然、乃、才、子、あり、つ、べし、む、か、一、馬、琴、が、京、傳、翁、乃、門、を、叩、きて、戯、作、を、學、む、む、と、乞、ひ、り、り、の、戯、述、の、師、傳、乃、技、あり、す、と、翁、が、い、ろ、ひ、く、其、乞、を、ば、返、け、り、り、を、宜、ある、か、か、故、に、小説、乃、法、則、ある、ん、ど、の、所謂、以、心、傳、心、ふ、く、得、く、い、ひ、か、ら、物、多、かり、あ、り、ると、ま、ひ、く、あ、り、ら、ざる、ま、法、則、とい、ふ、名、と、幾、々、と、此、論、辨、を、る、所、以、乃、も、乃、の、我、淺、識、ある、小説、者、流、の、小説、とい、ふ、一、大、美術、乃、其、目的、乃、ある、所、と、殘、る、限、お、く、知、ら、せん、と、乃、老、婆、心、切、み、い、で、る、事、あ、て、決、し、く、以、心、傳、心、を、る、真、の、法、度、を、語、る、あ、ら、ね、ば、世、乃、賢、明、なる、博、識、を、ち、妄、法、則、の、二、字、と、し、へ、て、お、乃、れ、乃、不、明、と、ハ、咎、め、た、ま、ひ、且、や、下、條、に、述、ぶ、ると、俗、に、お、ほ、む、ね、た、れ、乃、が、管、見、よ、ある、ひ、の、非、なる、も、乃、も、多、り、る、べし、識、者、も、一、啜、噍、乃、唇、と、轉、し、く、一、言、一、字、乃、師、と、な、ら、れ、も、せ、は、定、編、者、乃、本、意、よ、く、幸、こ、よ、な、う、も、侍、ら、む、り、

文體論

文の思想乃機械なり、ま、批評、なり、小説、と、編、む、よ、の、最、も、等、閑、よ、を、入、り、ら、ざる、も、乃、なり

脚色いっほど巧妙なりとも文おきななれは情通せむ文字如意ならぬは撰寫も如意  
よも乃一がたし支那れよび西洋乃諸國よりの言文ればむね一途あるから殊更に文體  
と選むべき要なしと雖も我國よりの之は異なり文體よきまぐらひ乃差異あり各一失  
一得あり利不利を乃用ひどころよりて異なる由あり是小説に文體と撰寫とをば  
らざる所以あり

我國よといふ一へより小説を用ひ采り一文體の一定あらねど要するは雅と俗と雅俗  
折衷の三體の外よりあらは詳細あること之を他日乃論ふゆづりて此の三體は此三  
體の優劣と辨りて讀者の參考を供せしべし

我國乃小説文體の事一つまごりたのれ尚列論あれどもあまりの冗長は涉  
ると恐れくことよの全く略されども後日神髓乃拾遺ともしるべし更ニ文體  
は變遷より其改良をも論じつべし

(華堂)雅文體

雅文體のまなごち倭文あり其質優柔よし閑雅なれば婉曲密麗れ文とあまふれたれ  
づから適ひたりといへども惜いかな活潑豪宕れ氣さ一物よるといふ之を評されしや

ほあやとして氣力ふた一風よもまると柳乃ごととをいふふからんと人よたと  
ふれは猶玉簾乃うちありと落しあやめの上鶴乃ごととされは此質乃文章の持りう  
ち見一所乃幽艶あるものよふあらて其音調も長閑ふして且おのづから古雅あるもの  
から激切乃感情豪放の舉動。もしくの跌宕ある情況あんどを寫しいたすは適ひぬ由  
あり況や戦役の景情あんどは此優柔ある文體も描きいざすは極く離かりれよぞ  
小説といへる者の宇宙を森羅星列せる無数無量の現象より彼乃百八乃煩惱まで今ま  
乃あため暇とも見るが如く一畫さいだ一之を讀者が見よむるを其本分とあす  
ものよあ其盡くべき華物乃中ふは優柔閑雅あるものよあるべく激昂雄快あるもの  
あるべく悲涼沈痛あるものよあるべく捧腹絶倒すべきものよあるべし若し小説乃作  
者よ一唯優柔ある條と乃巧し寫しいたすと雖も他乃雄快ある條と寫すは其筆墨  
らぬ所ありあは可惜妙趣乃脚色まで為し殿ふことあるべし跌宕(又アリミヤイ)と  
密麗(美ウチイ)と哀情(波ソス)と滑稽(瑠ケララスチツス)といふ所謂華文の屬性にて  
殊に小説乃文章の離るべからざるものよあるべし此四箇乃唯一まぐらひ欠乏あしたる  
ものよならむぬよし他の場合よたつ如何なる妙用ありといふともこれを完全な

る文体といひ決して辨一がたきことなり。し按ずるに我國の速く上つ世乃比よりして文武乃官に差別ありて文學の専ら文弱なる大客人の手ひのみなり。しうらみ文章ひとぶるに閑雅に流れて自然に活潑豪放なる質の之くをり行き一殊に後世倭文學の師表と仰げる書籍類の概ね藤氏が攝政せし文弱淫靡の中古の世に婦人などの手ひをりたる閑暇の著述に外ならねば其文章乃氣力なきもまた怪むべし。たらざるなり。藤式部が倭文をもと源氏物語とるさあらはし名と後世に垂たりし情文ともみ至妙なり。と相適ひしに因るも乃うらまた退いて考ふれば其文乃質頗るよく時世乃質もも適へばなり。夫れ小説乃文乃體のものとより千古不拔ならず風俗人情進化すれば其進化せし度應じりていくらか改良せざるべからざる言語習慣變化すれば其變化せし度よりたがひ多少斟酌折衷し更上一機軸といふべきなる可からざる蓋し小説といへるもの乃時世々々の人情世態と寫すを骨髓となせばなり。なり假令紫女乃大筆をもとするといふとも我文明乃情態とば校乃純粹なる倭文をもと寫しただすのかかるべし。左乃校文を見て其一班と窺ふべし。

因云 六樹園乃大人乃あらはされし一都乃手振といへる書に大江戸乃市街乃

さまとハ雅文體もてうついでたるも乃ふて中にも馬後町乃たごの景況あらび夜鷹の情態ふんどの殊に限あううついでて目前に見ることちみせらるるさのあれ其主意乃鄙びたる。其文のいさく雅びさればと何とまぐ此と校と相適にざる心地せられてうち含笑まるること多かり物あらがひあとする條も其言すごふる優長あるから所謂江戸ツ子乃氣象に之く上方あらり乃人とも思はる是よりさながら倭文とて活潑磊阿のありさまをハ寫しいざすよかたかるべし。一乃証といふべきあり

又云式亭三馬あどが滑稽物の地乃文とハ時ハ雅文體ふてものせしことあり今一例をよとああげて讀者乃參考に供すべし

春のあをば乃やうく白くありゆく。あらひ粉ふるどいの顔をあらふ初湯乃けぶりほそくたさびきたる女湯のありさまいかに見ん物とて松乃内早仕舞ちうれかけたる格子のものとふたすみ障子乃ひまよりかいまみる。よそのさまたかしくもあり又あ乃が身乃ぶさめいたるのあさましくもありけり白き物のはつ湯乃三方とかいふめるも乃つげとやらんもうべ

あり御祝儀乃十二銅男衆へ乃水引色、ニツ乃三方より高うて雪消に  
ぬ審士と流波をあらそへりそもくこまよの神代のありさまとやうつ  
たりけむ注連繩ひきわたせる栞樋口乃後よの神樂あらぬ松真木もて風呂  
たく男乃庭火燃すありて湯波場乃天岩戸とさとひらきてより常聞さまが  
へは朝湯乃湯氣のやまはれわたり人々乃面白やといふころほひ髪のかざ  
しえすこしうすめの命めきたは女の指の爪は糸道てふ物の残れる世よ  
いふ舞子白拍子のたぐひとれば一彼大政入道と乃と世よめでたくれのさ  
へあそび乃者乃推参のよのつね乃事よさふらふあといふて見参まをすへ  
まくせも乃よこそ云々(濟世風呂)

右のもよより純粹なは雅文体のあらざれどもまた以て我いのゆる雅俗折  
衷乃文体との相異なりたるも乃ともいふへ一想ふ一作者が地乃文とバ此文  
体もても乃せ一こと蓋し故ありし事ぞと思はば總して滑稽といへはもの  
尊し文字上より論ずはとらぬの詞乃品位の其注意の品位一適せざはとらぬ  
生むるものよて語とあへてとらぬへ郵報の事物を寫しだすよいと嚴な

る文字ともつゝ一高尚の題目と論ざるよいと俚げなる言語を以てまはた  
生むるなり作者あらかじめ此意をさとりて此一雅文体を用ひ一もの取  
竟る一雅文体の古雅の性質と帯くるものゆゑ目下乃世況を寫しいごま  
の適當さ一へもあつちとる思ひを若一あながち一此体もて上下貴賤の差別も  
なく我開明一赴きこる世の情態と見るが如く描きいてまく企てあつち  
一笑を促しむあつち滑稽の著述ともく人に見らるゝ象もあるへ一  
されは滑稽の作よあしがる小説の文章一此雅文體と用ふるよとらぬ二箇の  
失利と生ずるあり一のまのち豪放活潑の氣一と事一のまのち滑稽  
詠謡一類似せる事是あり

(源氏物語若紫の巻)紫のまだいとけまくてはせ一ころ源氏の君のとひ来ませ  
一條

○紫詞(小納言の若紫)また一被りつらんといづら宮の父君は在ま  
るかとしてよりたは一なる御こま心と可愛一(源朝)宮よのあらねど又たもほ一  
はまつへりもあらす此處と宣うまふと進み一うり一人ときまが一聞あ一て懸

う言ひとけりとれば一と乳母より(藤調)いさか一藤調とて宣

又葵の巻)源氏の君が大臣ととひまひて葵の上の亡れまひて歎きまふ條

○心まがき入だまあら見はてまひまん物を命こそはかまけれとて火とうち

あがめまへる眼れうち濡まへるほどゆめでま取別てらうくまひ

小女れ親ども一あくいと心ほとげ思入る道理と見まひて(源調)

あてま名小女れ名今の我まこそ思ふま人あめれとれまへま基づく泣ま云々

又神れ巻)藤壺れ方が御ぐいとれろしなまはんとれば一うちまひて東宮ととひ

まふ條

○(藤調)御らんぜで又しからん程み形容れ異まふてうてげふ變りて侍ら

いか思さるべきと聞はまへ御かほをうちまもり(東宮調)式部名老女れ

かやうま争てか然をありたまのんと笑みて宣たまふ言ふ甲斐なく哀ふ

(藤調)それ老ひ侍れハ醜まど然をあらで寝れそれよりも短くて黒衣

とと被て夜居乃僧乃やうまあり侍らんとすれ見てまつらんこともしと

又しかるべきぞとて流涕まへまめだち(東宮調)又うたはせば戀

も乃をとて涙乃れつれハ恥かしとねほじまきまが背まへる御やじやゆ

らくと清らふと眼れまつか一げま句ひまへるままおとあびたもふま

たま故の御かほとぬままへり云々

又須摩の巻)御さまらへのありさまと寫いどいたる條

○月いと明うさ一入てはかあき旅のれま一所わなくまで隈あ一床の上よ夜ふか

ま空も見ゆ入がたの月まごく見ゆるよたこれ西へ行ありと獨こちたまひ

ひとく西へゆくといへども月の西へゆく唯西

へ行のみあり我の左遷され西へ行ありと歎給ふ

(源歌)いづかたの雲路もわれもまよひあん月のみるらんきともえづか一云々

又同巻)驟風雨のありさまをいふところ

○海のれもてい余と張たらんやうま光みちく神ありひらめく雷電よて海面白く

云々

雅文体の性質はほむね前かまげたるものと一近江縣物語西山物語紫雲松物

語等乃如き多少此質の文を用ひて物語と編みたるものといふべ一讀む人件乃三書

を開きてとづから得失を考ふべし

(第二) 俗文体

俗文体の通俗の言語もてそのまゝ文字とあしたるも乃ち故に文字は意味平易にして管解しやまき乃徳あるのみか、列は活動力あるから所謂華文も必要ある簡易に品格明哲の品格にいへばさうあり峻拔雄健ある勢力あり、連懐愛慕の相念とも惹起しつべき品格あり加之時として文字の音調氣韻と共に頗る情趣に適應してよく心底の感情を表現しだまは妙あることあり、此ともて泰西の諸國にいふもさうあり、漢土に如きも小説の地は文章と除くは外なるべく通俗に語を用ひて事物の形容をうつまきありけり、俗文体の利をてお斯れごとしといへども、特りにかゝせん我國の言文一途にいづるから文章上にて用ふる言語と平談俗話を用ふる言語とさかから氷炭の相違ありさるから俗言のまゝも文とあまきとさうあるひは音調の侏儻ふ失いあるひは其氣韻の野あるふ失いていと雅びたる趣向さへふ為しひまびたるものとあり、俚猥の穢を得ること多かり且西の國々とのことかはりて言語の變遷はげしきのみかわすか數百里以内にして其方言は異ること彼の英佛の國語の相異を

れるふ似たるもれあり故に時代物の小説に此文體を用ふることきはめて不便に限り、且都合あることといふべし、たゞ彼の當世の物語(世話物語)と此文體も綴りあき、情文双あがら相適ひてまごぶる精妙あるべし、なれどそれだふ幾分か斟酌して折衷せざれば叶ひがた、彼れ為永派れ作者といへども、やゝ嚴格ある條ふいたれば、問々演劇に臺調めさるる詞といくらか借用ひて俗談もていひ得がたき不便に條と補ひし讀む人もまた知ることあるらん、曲亭馬琴かつていへらく

唐山にて俗語をもて綴れる書は正文あり方言ありまかざれば用とあまきむ又儒書、方書、佛教の正文あるべきものあれども、それが中ひ俗語あるは二程全書、朱子語類、俗語もて綴りし、晋功新事、傷寒條解、虛堂錄、光明藏の類もほあるべし、先輩己よこれ辨ありか、これ彼が文章あるも、言魂の資を借され、此文を成まは如、悉くらず、矧やまた皇國の文章の和漢雅俗、今古の差別ありさると、今文場も遊ぶもの、孰かよく貫通せんいと難しともかたか、らすや想ふ、いよりの、辨子物語、材取、宇通、保源氏物語なども作者つとめて其詞とあまぐり撰みて綴れるふ、あらざるべし、必是、當時大官人のつねのこと、へ方言さへそがまゝも載められど、古言のたのづ

から鄙俗ならず且官讀の詞の雅俗うちまかへるもあれど才子才女の其品殊  
 おて且能文の所爲おれれば後世和文の山斗たりかこれに昔は紳士物語の此も俗  
 語もて綴れるを思ふべし和漢その文異あれども情態よくうつし得て其趣と  
 盡せる者俗語おらざれば成るを難かる故我れおらく一揆ありきまて今此  
 間の俚言俗語の轉記俚離の甚しきとそがまふ文おまをべからず余が取雜の文  
 あるにこの俚離鄙俗と適きんとてあり云々

俗言の不便多かる實は馬琴翁の言のごとくこれのまよて於ても此議論と賛成せざるを得  
 ざるも乃かろは幾分か此議論と相徑庭をる由おまよもあらねばいさゝか持論を陳  
 述して更なる俗文を論明をべし

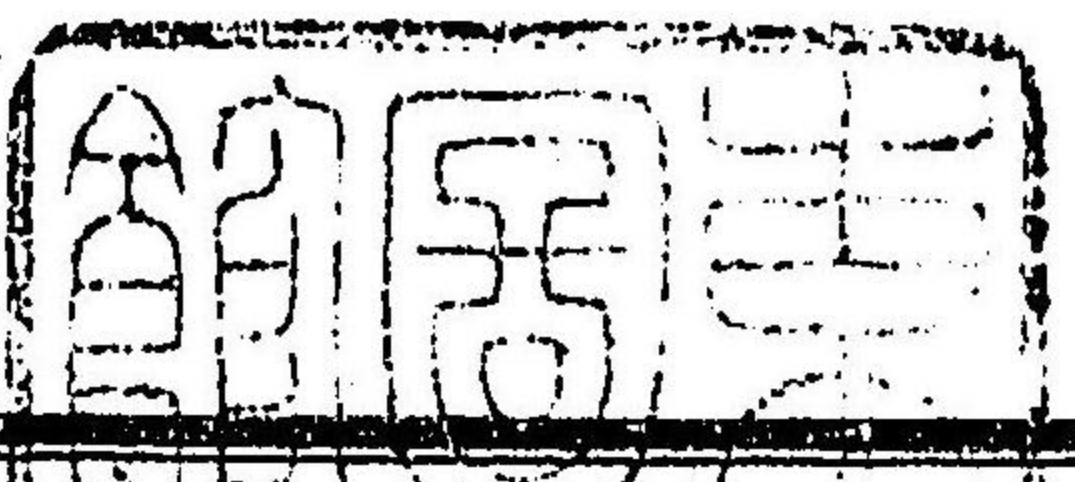
夫は小説の情態とつづきををもて其骨髄とまをも乃あり故に下流乃情態をハ寫しいた  
 さまくほりまるとまよの其人物乃言語おんど鄙俚猥俗ある言語あるものとより脱  
 ぎがらふことありうし其趣が盡しらばよし其言語の鄙俚ありとも是あうくふ  
 下流社會乃まこと乃景状おほらば此故をもて俗言をハ我小説お用ひがらま文句  
 ありといふ可うらまを塾ケンス翁乃小説おらびふ不ヒイルゲン翁乃釋史おどふに

随分おえだしき俚言おどといくらともおく用ひらまども其故もて塾ケンスと職  
 りて評せしも乃おまをまば亦不翁をも罵るも乃おし不翁乃著作の鄙猥ありとて排斥を  
 るも乃の多ままどもその其趣向乃猥褻とハ排斥をるよりいでなゆことおて文章乃上  
 をいふにのあらまかままハ轉記の方言なりとも俚離はなだき俚語なりとも其機  
 々ハ相應く用ふれば敢て妨なくかへりて趣深うるべしきにあま我國の俗談平話  
 の免角ハ冗長ハ失をる弊ありならびに語法ハ定律なく且音調の美ならざるがゆ  
 一叙文(事物の理由を叙する文章をいふ)ならびに記文(事物の形状性質等記する  
 もの)等ハ用ひく妙ならざるどころ多うり蓋し其冗長ハ失をる所以に我本来の  
 優柔なる俚言葉ハ因をるなゆべく其用語法ハ定律なく且音調の美ならざる和漢の  
 言語轉記の方言相混ハるハ甚くなるべし加之俗談ハ語法ハ三段の區別ありて  
 上流の人ハ對する言語と同等の人ハ對する言語と下流の人ハ對する言語とこれの  
 著明ハ相違ありて故の西洋の國語と異なり而して同等以下の人ハ對する言語ので  
 とまらるごとく過去と現在と未來の區別のなきものあり譬ハ「更ハ行術の」まざり  
 「う」ハ「い」ハ叙事体の文をまるとまよも「更ハ行術が知れぬから」ともいひ得



べく「とんと行術がまきをうったものだうら」ともいひ得べく「更」行術がまきぬも  
んだうら」ともいひ得べし而して第二と第三との俗談中の俗語より最も鮮一と言  
語なるからまづ第一の言語ととりて事と叙せるや疑なきかゝる第一の言語のこと  
さの所謂現在の言語なるから己の過は米歴をんと叙せるに至當といひ難かり  
英國の文法も歴史現在とよびならせゆ一種の用語法ありといへどもその時々用  
ふるものより常に用ふべたものよりあらす現在のやうにうつまいを其事柄の質  
よりより頗る面白く思はるれといふ長々しき米歴とハ哉冗長なる言語をも過  
去現在の差別も設きてくゞくも述もて行きをハ竟ふハ先後錯亂一と事序と辨  
れがことあるべし是第一の讀者をハ倦厭の氣を發せしめん故ふたのれに斷ト  
といへらく俗言とも物語の詞(物語中現はれる人物の言語といふ)と寫をハ妨  
害なし但し地の文ふいたり(我國の俗言ハ一大改良の行はれざるあひびら)俗言  
とも寫をべうらす蓋しこれが爲ふ物語の進歩をさまらげんうと恐るればなり  
左ふ爲米派の人情本の抜文をあハ一讀し其得失を窺ふべし

○(前略)孝道無二のまをらなをがらなまハ情ふ引されそがまハ長者が許ハ戻



一ハ幾聖ある父と忠太夫にせめく一筆かき乃おさんと硯ひきよせ措おがを墨も  
泪ふにけみがか様子まらねハ娘乃れ梅唐紙あま手とつかハ梅「こんちのれ  
寺參ナからどちうへれ往遊ままハ源「れふくろ乃佛參から久ハぶりて諸方  
あるハて采ました(中略)源「ヲハでかほくそれでこそ武士の妻卑怯未練の  
源太左衛門何程の事があらう本望とゆるのまたくうち必を告左右待ていハ  
れといひつと雨戸と細目にあけ外面とあがめて源「思ひの外ハ夜もふけた様  
子今から出掛るから父上と忠太夫ハ此書置をさハあけて猶く己くハあまハ  
から能うくおとあハ申ておくれ梅「うれでハモウお出けあうむハまをう隨  
分お身と大切ハ源「お前ハからだハ氣とつけてトハくハ源「お改さんが  
被下物をうつかりと寝おいマハ其外お改さんから父上さんハあける物ハハ  
氣を附て身と大事ハ時節をまちお梅「ハイといらハて取いだき刀あらねど若  
ハ此まハまされもやせんかハ柄糸ハ唯つかれまハ恋られハ割筭のハかかれて  
ハいつか下緒の結むるハ時こうあれハ兩の眼ハ海む泪をさせハとて云々

右に載る所のもの所謂俗文體の文章あれども地に雅言とてまじへ用ひて俗言ハ分の文といふたり蓋し前條に陳述せる幾多の不便のあるよるあり地の文章と詞の文句とかは氷炭の相違あはれまた是非なき事あれども同く言葉の文句のうちよてきあがら時代の違ひごとく其性質の異あはれは甚だ妙あらぬ次第あらむや譬は前の文章中ある「ヲ、てかき云々」の語の所謂演劇の臺詞よして今の世の人の言語にあらす前後の言語と比べ見あはれ不都合の處ありといはれは是我國の通常言語の不便よりして生ぜしことよて作者と咎むべき限りのあらぬなど此等の俗文の神髓ある活動の妙味とそあなふ由ありもとより望まざることありあらす是併しあがら文乃實乃其物語乃實も適りていひあらぬまへに情趣とていひ盡し得ぬよる事あり故に前段もいひごとく時代物語を綴る折も俗文体を用ふることをためて不都合多かるべけれ雅俗は言葉は折衷せる他乃文体はとり用ひて其趣とて叙すべきあり

世諸物語と綴る折も地乃文章の據も雅言と幾分かとりまじへて叙事乃便利あり

供をへさて己の前もいへるごとくさあれ雅俗折衷乃地乃文と全く俗言を綴りたる詞と乃接續鹽梅をこぶるたやまからぬことこれいふれば此文体と用ふる單に充分心を用ひざれば奏功さため難かるべし譬馬琴得意の文体とて地の文とていへたる續へたぢちふ爲永得意のペランメイオヨシナサイナなどやうの詞と綴りいださば地と詞とほどく撞着せる勢ありく句調もれのづから懸かならざればとて此撞着あらざらうめんがため地は文とあまりに俗体よかたよりめんが故の察ある景況とて寫しだすに便あらざるべし是第一の難幾ありうまされれば俗文体と用ひんとせば宜しく一機軸の文とあすべし決て馬琴の文と春水の文と合併せし地と詞とをものせんと企つるべしすさるべきせん元のもと人情本文と綴るよも考りて拙み俗語あどむさうあさきものやうあれどあるくふ然らば作者たらんもの能くこらと考ふべし前記俗言の殊離れ聲多く記言詠語多しといひくからに讀者の必ず俗言とてひそくに織りたりと思ひあはれどそのまた甚しき誤謬あり言の現あり文の形あり俗言の七情ことごとく化粧とておさすまて現るれど文の七情も皆紅粉を施し現を幾分か實を失ふ所あり俗言はまじり調よりつせば相對とて幾許

するが如き興味あり雅俗折衷の文とて詞とつゞれば書簡と讀むの思あり其おも  
ろみれ薄かることいふまでもなきことありか一俗文の利すて一斯れごとく唯感らく  
の世ふ其不便を除くれば法あり一嗚呼我輩は才子誰が此法を發揮はらんかのれ今より  
頌と長うと新俗文は世ふらつる日とまつものあり

(第三) 雅俗折衷文体

雅俗折衷の文体は一ふとくらを今大別と二種とあり一假令一を稗史体と稱し一と  
艸冊子体と稱す

(甲) 稗史体 八地の文と綴るより雅言七八分は雅俗折衷の文を用ひ詞を綴るより雅言  
五六分は雅俗折衷の文と用ふるから一地と詞と相齟齬するが如き患もなき雅俗の趣  
と叙するより雅言とてし野なる趣を寫はる俗言をもて一臨機應變一貴賤雅俗と  
寫一分つ一便あり且漢土は語とさへ一其折々ふまへ用ひて國語は不足と補ふこと  
ゆゑ富麗幽婉は状いられれば倭文は雅雅あるもれども之を衆飾り宏壯激越は摸擬  
と叙するより漢語は雄建あるもれを撰用ひて其足らざる所と補ひ俗言を六七分ま  
へ用ひると天離る鄙の景情とちかきさまを描きいざ一雅言を八九分かりもちひて

の久堅は雲の上人れ速き昔は言の葉も其文面よあらすべ一時代物語を綴らんとせ  
ば之ふ比へん好文体まありとも思えざるあり世話物の小説は如きも有るひに此  
文も綴り得がさふのあらぬもれか他の俗文體艸冊子体ふんどふ比ぶれば一歩  
と譲る所あらん歎蓋し其詞ふ一種は特質を有る今この世の言語は比すれば大ふ異な  
る所あればあり故に世話物は小説ふに此文体を用ひざることをかへりく當然と思は  
るべし

雅俗折衷の塩梅と其宜きを得らんとす

時代物語に適する文章實は此文の外あり  
あまのさかあまは雅俗折衷の加減塩梅いととやまらぬ業よ一あまはな不効雅ある似  
而非作者のこと用ひんと企てつとつとく一讀むふあづらひしき鄙俗の文とばあまをこ  
とあり試み一ツニツ其難點は擧げていたままづ第一は雅調は偏一やすきこと是有り  
初心の作者が綴りたる稗史体の文は見るよむむね雅調を傾きて(作者も一倭學の  
心得深きものあれば)文法よの心と配りて貴賤の言語を辨別なく句々されく一  
ありて讀むよ美あらぬ文とをなを知らざれば音調よの心を用ひて長歌の如く今様  
の如き文はものして事物の活動の勢を失ふもれ多かき苟も雅言とまへ用ふ

るからよの倭文れ文法と守らんこと勿論當然れことなれどもさうとてあまりに文法よれに全く心を奪えれつゝ小説神髓れ本分たる人情世態と寫しえむべきことよ益なきことといふべし

第二の俗体は偏ること是なり和文を深く心得ざるやからがなまほひに多く俗言をまじへ用ひんと試るときよのねむね浄瑠璃本またの端歌めきたる文體は流れ易く音調は實は滑るる所もあまど其聲いやううして不とく讀むよへざるものあり瀬川如幸があらたしたる鼎臣録のごときやと此職あると免れざるべし

さあらばいかなる文章が此文体の本質かといえんよ八犬傳美少年録あどの此体の文をもて綴りたる大筆れ小説なりことよ拔文は擧ぐ讀むて其一班と窺ふべし

○這れ眉上の黒子さへ一對あるの親子の微おの兒の顔と御身れ容止似むや背ざるや見ぬへといひつゝ鼻紙は附たり一懐中鏡ととり出して照し見せつ推し向く珠よ你れ爹々公や抱かきぬへと揺遣れはまたいあなま珠之助も争ひ難き血脈の恩愛爹々様のと呼るけと携るを纏く引よせと膝よのせたる瀬十郎歎をばこそあれ目ふ朧き涙歎露のひと滴云々 (美少年録)

○さうへ左いえん右いふと身れ愛事とつげの新髪の後毛るさあげと人まつ縁の夕化粧鏡も刀自よりのものとうち向へども影暗き日乃没果と燈火れおとへとどるぬ片ごころうる爲よと時の坐席道の蠟燭も流れ渡りの身ふあまどよろづよき日と唇手れ茶碗と覆す茶底ふらと衆る唇燕脂れ笠色も香も知る人み見せあんといれ所爲なり云々 (同上)

○客もあるも沙量ならねは是より酒酔をりまりて酔つ酬につ果なき議論に興と催したる朱之助のはや薄醉の多辨に任し属日鬱氣を恣々とうち仰ちと珠均の目の前よてかういへばとかーからぬ不走向よ似れども岳母の巨も暮くも苦虫と贈渡しと四角四面乃氣韻高く斧柄もまた鳥と共に起る糸と繰り機を織るこれより外よ所作のな一今様早唄こう事ふりまたれ觀經弄齋柳節を學びたりやと問へばあらむと答ふ況てきのふけふの田舎までも弄ぶ三絃をんの手で弾く物やら足でかきならす物なるや夢ふだも見たることのあらず偶然よものいひかけも泣出たげなる面色して返解とをるのみ餘情もなく寐るとさへふも三ツ指みて許させたまへといひながら蒲團の端へ如恐怖お枕引

よせて就寐なり畢竟木彫の偶人と枕とならぶる異ならを斯ても夫婦といふべきや粉練三合有ならへ入焚ふななりとといひけん昔の人の格言なるかな察したまへと不樂いげふ意中伏つくも酒興の迷懐箭五郎可々とうち笑ひて宣ふ趣無理ならねど世の常言お石の上も三稔といふことあるならむやきりとして貴所へ入婿おいて又世の入婿おれなにからむ今もあれ主用とはたいたまは袖うち拂ふて武藏へかへりたまはなん然らばこもなほ旅なりつまる所の趣のおき街妻と旅宿れ當分月備おせしなりと思ひたまは不足のあらしく且く堪忍したまへかといへば興手もうち笑ひて斧柄さまの光忍子なるそのそ乃該の事お侍り焦たる桐も敷らねば良琴おなり侍らす煤じい竹も伐てこそめでたき笛おなるとかいふ譬諭と女子の諸禮書おて見しことの侍りおき斧柄さまも徳ぞか一氣長く教育たまひなば遂お佳音をあらはして曉毎お邸房乃窓の際よりあらむと共侶おいと一みつと離れかねぬる樂しき中おなりたまはんろを教おいて備らんことを求めたまふ疎ふこそ恐のあらすやと慰れら云々 (同上)

○昨夜はなせしことふより吾儕の目今里長ど乃宿所へのかん葛籠なる衣物出したまひねといふ斧柄の心得て取出しつともて米ぬる手織小袖の漆紬縮太織の名のみ瘦穴お帯の端さへあまりぬる真と辛苦をやる瀬なき表衣べりりと腕更て緋ひのなき白踏皮も水入らすなる親子お腕一舊衣たむ間お鼻紙折て懐へこれもとわたを印章を取てれさむる袖頭巾ひさげて朱どのた乃むろや斧柄留守といひつゝも背門よりいでゆさおけり(中略)落葉のたやくかへり来て朱どの斧柄も歡びたまへ那一種の手お入りおき委細の後お辛度やといふときこそと朱之助斧柄もとも慰めて涙てきむる一柄抄立茶の泡乃おたればお恩義のためお使る、親さへ子さへ眠さき心盡しと心ある人お見せむや津の園おありといふある武庫の山婿お榮おき空花の散りどおぬべき入相乃山寺の鐘おとづれて燈点比おありおけり云々 (同上)

○兼顯卿も賢房卿も共お名残を惜ませたまふ愛顧の華おあらしれたるそが中お兼顯卿の消息お今より四稔さきつころ藤原亭おあたまさきせし紅紫見おらてもれいお花を手折れといえぬむかりありしご愁こそ悔しけれ今さしお限

みられたせん飽まーかりごと書せらまふを見れば顔まづ賑うありーまきらぬ  
さまひてさや〜と手早く巻て懐よりうちかきめ今ふえりぬぬ兩脚のおんさき  
ひこそ辱ひれ云々 (同上)

上ふか、げし文の如き、變此体の一斑のみいまだ全豹と窺ふ足るべうもあらぬ  
ど其性質は他乃ニ文体も異なる由に己の明瞭もまられりと思える己のいひ一如  
く此体は文の地を綴るもの雅言七八分をまよへ翻と綴るもの雅言五六分をまよへる  
からふ地と詞とを問ふとまたど一ニ文調は相違もあくひとへふ筆頭は加減よりて  
貴賤老若男女は言語を寫し己かつ便利多かりされば上中下乃情態と叙するも速  
まむか〜は景情を寫すも最も適當せる好文体のまよえち此質は文章あるべ  
神史体は雅俗折衷は文を論するも當りておのづからいえて叶えぬことニツ三ツあり  
曰く音韻轉換の法曰く意義轉換の法曰く古詩歌引用の法曰く題目構成の法をまよえら  
是なり  
音韻轉換の法は長歌の冠詞より轉化したる法にて既一ツの意義といひあらえした  
る上の言葉の下半と替てまた下の言葉の上半といひあらえを法より譬へ左の文にて

り

○さての命は浪速江乃短き芦乃薄命あををありまとうらめー乃近江とたが名  
づな、んさーて往方の磨針乃最もえかあや叔母夫さへまき名聞あて後々、物  
忍へとやつれもあき云々 (美少年録斧柄が怒歎乃詞)

傍示あしるごとく音韻轉換乃どころいと多かり蓋し省筆乃一法あり特巧を求む  
るがためこのみ用ひるものあらばまかれども初心乃作者のこゝろ乃道理状さどら  
ざるよや音韻轉換は是非行をねばあらぬやうに心得るものもあれどけつしてさま  
で入要あるものもあらざるをさればとて些も此法を用ひざれば文のみ可厭し長々  
ありて讀むに興あき且察もあき香もあき文章とあることありさればとてさもあるま  
よき所よつゝなき相聞言葉と誤りまよへ左乃如き  
年ハ二ハハ二九からぬ 様子ハ何か白紙れ 興乃一間へ入相乃 さんど  
せんかゝ涙乃み

院本おどもありふれて婦女兒童も耳慣れたるいとも拙き相聞詞と得意貌に綴りいだ  
危申 十五

その定し可厭ありかか〜直し書あり〜るよりて罷〜  
 意義轉換乃法の音韻轉換に似るをこ〜異あり意義轉換乃法にありて音韻に似る  
 と似ざるをよの係らざるも前後上下乃語を意義乃相似る詞ともいひあらさし得  
 べしと思ふとる筆とまげてさる文字と撰用ふるあり譬へ左乃文にて  
 消しし人の六乃花七歌ハ才と一期とまけん云々

「六乃花」の「消しし」といひゆるより轉り來れる詞にて通常なら「雪」とあからさま  
 いふべきなれどもまゝ意義轉換乃法と用ひんとをるから「故意」と「六乃花」といひて  
 下乃「七歌ハ才」を利〜るなりこれらも所よりての省筆乃をせよなることあれ  
 ども大方の文に光彩を添ふるよをぞせむ

音韻轉換も意義轉換もまひて筆をまげらる迹其文章乃上に見えて作者乃苦心乃あか  
 らさま〜他に見らるゝいと拙し總てかゝる相關詞と綴りいださまくほりまると  
 さよらまづ第一に轉換具合乃平易と平滑とどらむべきなり語とかへて之状いへば  
 普通乃讀書眼ある人よら〜一通よみゆるのみよて其轉換乃原く所乃よく解るやう  
 に綴るべきなり一層巧ししていとあみ入る轉換といへども再讀をればさちまら〜

讀者に解るやうに綴るべきなり然しさればいか程巧妙ある轉換といへども讀者が其  
 意乃解しやとさ〜苦むやうでなむえしろかろを唯に面白からぬのみよあらむ其全  
 文乃意味乃如きとめ〜解しがなくあることあるべしかなれや友人なよが〜嘗とい  
 へらく轉換法のまこと〜妙なる文法よ〜地乃文よ於て之と用ふれば泰西乃國々の文  
 章よもいまだ知られざるの旨趣あれどもと人物が相語らふ詞のうへみえ用ふるこ  
 との甚だ不都合の事あらすや何となれに相關詞の俗いふ口合といふもの似た  
 りさあらんぬの前舉〜

近江のふ〜あ〜せ逢をなり〜とらめ〜の近江といたが名付けん云々  
 の文中を「近江」の字に「逢」より轉らる口合なすやか〜る悲哀の語の中み口合と  
 まらふるに不都合ならすや云々といひりされのれ答へていふ否か〜る口合に用ふ  
 るを苦〜からを何とまね〜非情の物の名とさ〜へ恨め〜く思ひてうちか〜つ所あか  
 ぶか〜淡さ〜乙女の情合ら〜く見〜いちら〜ければありか〜る例の世の中み現ふあ  
 る事ありむか〜英國の歌人ふ字井ザア(凋枯)あふが〜といふ人ありあるとさ其家運  
 の衰頹せるとまげ〜て詠み〜る歌〜

「洞也」て名ももさる一を後宿よかゝるなむの歌とみんと  
THE VERY NAME OF WIKER SKOWS AECAY.

といへり又我朝にて源三位頼政が平等院より芝生に坐し己を生害とをさんとせし  
折辭せよとて

埋木の花さくことなかりし身のなる果ぞ悲しかりける

とよまれし如き所謂口合とてまじへられども其痛切なる情誼に於て尋常の語に  
まさると思はる

因云轉換法にればね詞の冗長とはぶくぬなりといひられども間々轉換  
の法はもちひかへりて冗長なることあり譬は

別れし後ひうき事を「黄楊の小櫛の」告る間も無き世がなりよならんと思ひ  
かけなや「黒髪」の神ならぬ身ぞ是非もなき云々

「黄楊の小櫛」并「黒髪」の文字の直に綴りををとさし不要なるものを「告る」  
よひかけ「神ならぬ」よひかけんとめし用ひざるは流弊なり蓋し文の光彩と  
添ふるは外ならざるなり想ふよかゝる相關詞なるべく用ひざるやうよあり

文に必要なる光彩の如きは他の方法に求むるものと大に望まざることなりけり其  
故に讀者をて現實なりとの感覚を失はしめんと恐るればあり

古詩歌引用の法は古代の物語に於て最も多く見る所あり古人の詩歌の一部分は抄出  
して地の文章の助補とあり且光彩とも添ふるの法あり

○月ればろよきし出て池ひろく山こおかきわたり心細く見ゆるよも位はされ  
ならん「若ほのあか」おほしやらる云々 (源語須磨の巻)

○「袖まほほきん」入もさる身ようれしきことろさしよとて宜くまひと云々  
(同上未摘花)

右の第一の文中ある「若ほのあか」云々の「いぬあらしん」はの中位まはかしの  
事のことばに「おらん」といへる古歌の壹部分と借用し地の文章の句を省き言  
外ふ意味と合ませたるあり又第二の文中ある「袖捲乾さん」云々の「淡雪のひかりさ降  
りて白妙は袖まほほきん人もあらなく」といへる古歌はかり用ひて調乃文句と  
省さるるあり漢詩と引用しる場合もあまらあるべけれど今記憶中よあらざるま  
ことあり其例と舉げざれども其大方の模様といへるまづ人物の形容おんと地の文



ともあるべくだけ細く寫しだせし上ふと不足するを覺ゆる折に其形容も  
 適當ひつべき古人の詩句を抄出し其趣を補ふあり西洋の小説文の此法を  
 用ふるもの頗る多し景況と叙するのち「正」是「の」二字を置く自作の漢詩と掲載  
 するもたふし趣乃漢詩のあれど古詩と用ふるの雅致あるより劣れり  
 題目構成の法は列ぶ一定の規もなければ作者の隨意たるべき勿論なれども参考の  
 助として一言として賛すべし彼の漢土の小説の題目はならひて對句やうの漢文字  
 と二行はならざる事ありしなりとて「第一回何々の事」などありしさまよ  
 掲げいだすもあまり興うすき事をりし西洋の古人の詩歌と抄出し題目の代  
 とをすまどあり我國にも古人の發句と引用ひと題よりへたる作者もありき後の二法  
 のすこぶる面白と趣向を思はる題目をどのいうやうにもよきやうなれどもま  
 退いて考ふれば讀者の注意と促がまよ一機軸なりと思はるれば宜しく應分の新工  
 風と命題もまよ費やをよ  
 れのれの前條より雅俗折衷の歴史の文例を舉ると馬琴翁の文との掲げられ  
 或の思ひあやまり馬琴翁の文を學ぶべしといふありと思ふもあらんそのはあだ

いくれのれが見る所は遠へりれのれ唯雅俗の折衷鹽梅と示さんと彼翁の文を引  
 用せしめ決して馬琴翁の文と師表をべしといひたるよりあらを翁の贊し雅俗折  
 衷文の大家なれども彼馬琴翁の文の如きは翁獨り專しを得る文体にして後人の  
 得る學びがさき文体ありかまひて學ばんとさればうへりて損ありたを雅言と俗言  
 との折衷鹽梅の心を配りて臨機應變し筆を動かすべし一然らずし翁の文と  
 益し酒と盛るが如き弊あるべし雅俗の分量と標準として文と綴るは酒は水  
 を混ふるがごとく眼と覆ふと酒と盛らんとさればあるひ益し溢れんこと恐れ  
 少づと盛る故に完全を得ること難うりまうらざれば溢れり席と汚きことあり足らざ  
 るのもとより拙く席をけがすといよく醜し酒は水とまけふるは其標準分量はあ  
 り分量の加減は酒は氣味と失はざらん程はあせば可し下戸は飲をべき分はこしく  
 水と多くし上戸はまよむべき分は更み水は減をべし然し其鹽梅はひとり作者の心  
 あり他人の指頭を要せざればまよづり味はまよづり試みて分量の當不當と自  
 在に考へ定むべきあり酒はまよち雅言あり水はまよち俗言あり雅俗折衷の秘訣

酒と水との加減のごとく折衷文と愛する作者のよゆしく此意と味ふべし

因云たのれが友人甚かつくいへらくたのれ備ら此間の小説家を見るふ概

ね馬琴は心酔せるもの多しさるうらふ其文の一向は彼翁をまねびく餓たる

が如き文あり瘦たるが如きあり甚しきまなく死したるが如きもありけり

豈笑止あらむや馬琴翁の源語平語太平記水滸西遊等の文を折衷し彼一大

機軸といだせしあり所謂翁が自得の文より杜撰もあれは牽強もありさるあ

れ翁の牽強杜撰の翁が自在の才筆も臨機應變のものもさるもれあるら

機よりよりくの牽強杜撰もへりく神妙ある所もあり蓋し翁が自在乃筆も

さづりら加減とすればあるべしさると今乃世に作者輩のうころと毫も思ひ

ざるよや將力乃及ばざるよや善も悪さも馬琴をまねびく翁が杜撰乃文句を

だし手柄腕とりいだしさる左もあるまじき文句乃續へまひくはめこまん

とせるも乃あり豈はあのだしく謬らむや小説文を學べんとせば宜しく翁乃

本據より遡り源語平語太平記等と讀味ひて更は一機軸を工風をべし源語平語

等質の名文乃傑作あり彼とりて更は折衷乃文をささばむあしく馬琴乃翁

をれし小説文壇に推すべきや馬琴と學べよや其體と得るよありと  
も到底後の馬琴たるは過す其上よいづるのうたし往古乃小説文とりて新  
し折衷乃文とささば其文の一家乃文あり他人乃文はあらず馬琴乃文と拮据  
をべくまた彼を壓し得べしあまた乃しうらむやといひけりまことし格言か  
るかか

(乙) 冊子体の雅俗折衷文乃一種にして其稗史体と異なる所以の單に俗言を用ふる

こと乃多きと漢語と用ふること乃少きとあり故に跌宕豪壯なる情態形容と叙する

に當りて彼乃雅文体と同様なる不便不如意と感ずることありさるあれ漢語と用ふる

こととハ強ち忌むといふふもあらねば將來此体と用ふる作者の其時々乃便機に應じ

く多少乃漢語をとりまじへて件乃不便利と補ふとも決して不都合のあらざるべし想

ふし此体乃文章めて漢語とつとめく除きたりし假名文字乃とて書たるからふ讀

者が之と讀みたるときふ解しがたうらんかと思へばあるべし且や冊子といへるも

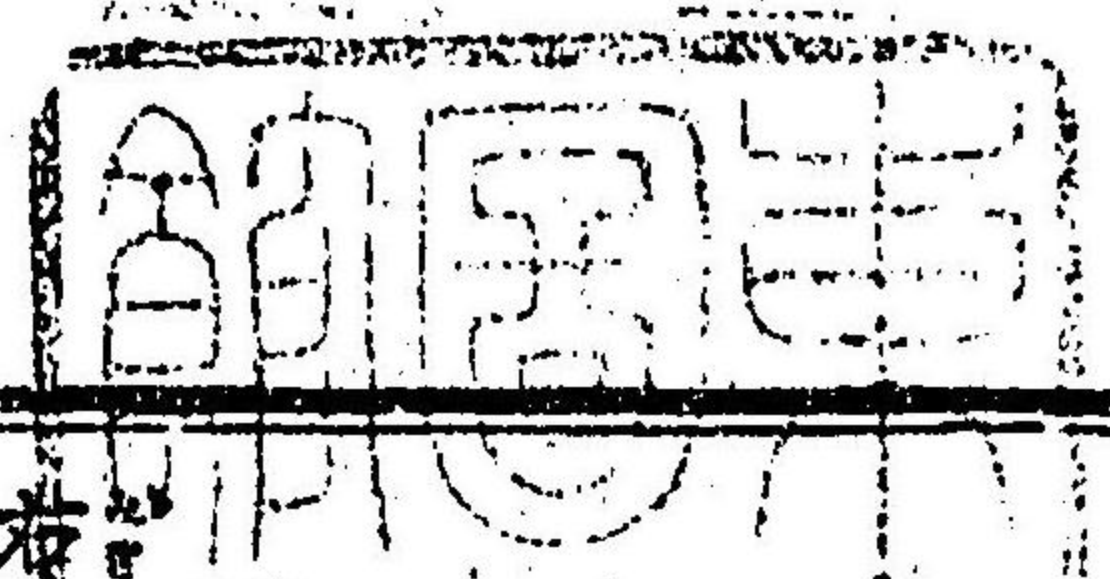
乃の専ら幼童婦女子弟乃玩弄ぐさふ供せしも乃ゆゑつとめく漢語と除きたりしもま

た當然の事といふべし

艸冊子文体もさまざまの種類ありてあるひは稗史体とほどく相類似せるものありあるひは俗文体も近きもあり譬へ京山種彦の文章もこれなり京坂の俗語を用ひて冊子の詞と綴りたれども種買またの應賀あんど多く雅言ともまじへ用ひぬ下ふ二三の文例と擧ぐ熟讀して其相違をる所を見るべし

○それぞべへと突遣られ深雪のはたどこけかより「マア兄さんの惡らしい斯うくもらむとも可ことを無かあれ手が痛みませうぶつけあがらと結び目の堅き歯までてつだふて漸々ほどけ權三もふつあり「まちがふて其後いんとれ目おかよりませぬ健でれ目でたい又そのうちふと立つのと引とめ云々(種彦)

○村萩あたり見回しと料紙硯と取いだし墨をりあがき其處へ何心なく来かゝる夏野「れあついのお何處へのれふみもう黄昏でれ暗からうれ手燭とあげませうと聲かけられてふりかへり「久しう居る其方お何もおかき事をいひ君吉さまが此たふと持てござつて母さまへあげよういと取るまいとあらそふてござるやうきを速目おまたぬぬれぬ二人のれつまやる事の聞はねど如何



た譯めとれどめまど一取上てつく見れば昔名の處へちらしがき風おあひか村萩のもととあるの光氏さまより妾の處へ来たれふ二年のゆりぬあのれ子が取違へて母さまへ持てれいであされたれどいゝやうれの娘ぢやと流石ふあたまもれつまやりかねひよんお事でもりつかへ一つ妾が目おかよりぬと健未はていつかぬところ云々 (同前)

若の文章の如き願る俗言を多くまじへたるものあり而して其俗言のむかしの江戸言葉に似たるよりむむる京坂語に似たるものあり想ふ京坂の言葉の如き願る雅言も近きゆゑお地と詞との撞着をへあるべく少くものせんとして作者が注意あるあるべし

○「さう〜それの偽言あらん姿の職くやつとも阿女の正しく匹婦あらずあまつさへ女子もあはく心のうちお大望と思ひたつ身とまたひが目かたのれは年比世の人と相まること改修行あり其術妙と得たるゆゑ最前れことが街道に馬ひびきあがらたすむを一目見るより凡人おらぬ者とい早くも見さはめて物よとふへお華あられむる言葉とさいはひは馬かりうけ人も人とい

へ一此あたりへ来り一上素姓とはん爲ぞか一(中略)と言禁と盡一ていふと  
さく少女のふり黙然たり一がやとあつて泰然と形とあらため翰もむかひて  
れん身が明察感のいる星とさしたる其ことは今のつゝまん要あらねいか  
も實を告ぐべきがうれより先一妾もまたたことよむんものこそあれさく入  
れてたまふべきやと言禁もよはかよあらたまり云々 (禮員)

○伊達五郎其儘たす五入のものゝ潜びたるくさむらよとつ目とつけ何事  
かいとんとせ一が思ひかへを由やありけん傘うちひらさふりかたげ降さへい  
とゝ高々と一此ものごもと手の下ようつゝ如何なる鬼神か人間業よよもあ  
らトトわざか一譚ふ熊坂よふりきけ見れつゝあさまたの形一似たる月影の雨後  
の雲間よとごごされこと青巻よあらなくて旅のやどりのあまたとあゆまん  
と一て二足三足よろめさながらふととままり可々と高笑ひゆう一と一てあ  
ゆむゆく云々 (同前)

右の二文章の如きほど一歴史体と分別せる能はざるものあり種彦翁といへども  
田舎源氏の文章よ多く雅言とまへへ用ひく地と詞とを綴りいごせり蓋一冊子

文章よ近代の俗語多かるから専ら俗語とのミ用ふるときよ時代違ひの情態とハ  
叙せるよ不都合あれハあるべ一

畢竟するよ冊子体の世話物語の文章よ至適至當のものあれども時代物語とも  
するよいまだ適ひたりといふべからず何とあれハ已ふ前よも論じたるごとく足  
利時代も一くハ又保元の比の人の言葉を俚語俗言ともて綴りいごさハ唯何となく虚  
作めきて其情合の移らぬのみうらまへ此間の俚言俗語一得といひがたかる詞もある  
べ一蓋一いよ一への人情風俗今との頗る異なるから其日用の言語の如きもまら随つ  
と異なるべかり假令また作者の才筆もて巧よ件の不都合とハ掩ひ得る由ありとせる  
も列一一條の不便あり之と全く除かんこと決一と望みがたさ事なりうし例ハ冊  
子の作者輩が時代物語と綴るよ當りと豪華も一くハ貴紳などの言葉と綴りいたを  
折よればほむ雅言と多くまへへ「そなた」といふ入さば阿女といふせ」云々して

れ「とらふんたごも」云々一たごも「とらふんせ」云々いふ言禁もあり畢竟するよ下流  
衆のうちよ「ごんせ」といふ詞もあり「隠ら一」云々いふ言禁もあり畢竟するよ下流  
社會の概一て世話物の趣ありて他の時代形よかきまへへ上流社會の趣とるさな

から書況の懸隔ありつら／＼考へ讀ともゆきなき同國人とも思われぬ。同ノ時代の人間とも得思われぬ。庶多かりさればとて此様なる不都合をからしめんがため下流の人物の言葉のうちへ多く雅言をとりまゝへて其言葉をいも綴りいごさへ彼の稗史の文とありと冊子体と特別なる長處と失ふことともなるべし。是もまた惜しきことあり

因云ちかころの演劇の問々之類をることあり此度の千歳坐の演劇の如きなるは是なり。幾程の愛麗靜御前の詞のうちより「なこころ」「とらふ言葉もあり」「云々あつるぞかし」などいふ言葉もあり「何々なれり」「堅くるしう言ひさる言葉もあれ」「云々せりりる」と文章のわがさる言葉もありさるお同ノ狂言中にて下流社會のいふも愛入相中俳優のわがさる言葉もいへ侍女の言葉もさるの頗る俚俗なる言葉もいへ前の侍女の言葉も比をれば月とまつぼんほど相違へり其他さまざま不條理不都合尙穿鑿せらるるべしれど畢竟演劇なれむある其不都合も目だぬぬあれ若し此様ある不都合をいへ一々熟讀玩味せらる文章の上よあらそいなへ爲め讀者は興味をたつづけ

いへ面白き脚色をさへいあるひ損ふことあるべし。在来りたる冊子の専ら童幼婦女子ばられ玩具ぐさい供せしものゆゑ假令鴨言葉は不都合ありとも敢て咎むべきことならぬと若し將來に作者より冊子体は文と用ひて一大小説を編まよくせば此不都合と取除きて美術は機械に適當せる巧妙な解決綴るべきなり

之を要するは冊子体の時代物語は文章の決一と適當なるもれぬあらす宜しく世話物の小説のみ此文体と用ふべきあり但し從來は文体にては宏壯豪邁の情態をい叙するに不便に願もあれは作者が臨機に發明し多少は改良を加ふべきに勿論當意に事ありうし想ふは時代物語の文政文化に作者輩が最も得意とせし所ふまゝ傑作も頗る多るうら今に小説作者よまゝ時代物語と綴ればとて馬琴の小説と凌駕を依こそとせめて容易からぬ事あるべし如き時代物を拙筆も世話物のみ意匠と費未曾有れ物語と工風をへさあらは文もさるべくだけ世話物語も適一つべき文体とまづ研究まゝ其要求も應むるやう準備をせよ勿論あり而も草冊子に文乃如き最も世話物も相適ひて且改良し便あるものあり我將來の小説作者のよろしく此体と

改良より完美完全の世話物語と編成あさましく企つべし世に活版あき似而非學者の我  
艸冊子に文体をいといと辭びたりとて罵れどもさるの小説の何たると解せざるに出  
る謬錯のみ小説の人情と風俗とと活るが如くふ敵いだまて讀むものをまゝ感ぜ  
しむるを其目的といふまものあり假令俗言俚語ありとも其文章が神ありあは他の繪  
畫も音樂もあましく詩歌もと取ざるべし一大美術といふべきなり

因云此間ハ傍訓新聞紙ハ掲載せる所謂讀語ハ雜轉レ如きハおほむね草冊  
子体ハ文章あれども多少の改良と加へざるもれあり其改良ハ重なるもれと  
いハハ調レうちよまてハ用ふる京阪風乃俚言と廢えり專ら東京語とあ一  
事あり故ハ此間ハ艸冊子体ハ種彦文ハ似たるよりハむろ俗文体(春水  
文)ハ似たるもれあり是まうしがハ東京府の皇國ハ中央とありたるより  
自然ハ出來せ一變更するべし今一ツの原因ハ新聞紙ハ載せる讀語ハ其物語  
ハ架空無稽あるもまうとと總ハ事實ハ一うもままことゆゑ自然ハ  
世上ハ行ゆるハ東京言葉取もちひハ其人物ハ言葉と一も綴りいごさる  
を得ざればありぬくハハハ東京語と草冊子文とまてあることハ明治レ

作者が發明せし新工風なりといふふのありて二世種彦とせしめと志て春水  
あとハ草冊子ハ己ハ專らハ江戸言葉まてハ一例ハありたるありされども  
其比ハ今のごとく世話物語とあもてむさふ世話物と志て綴るハあつて時代  
形一ハ綴り一うらうらう雅言をまてハ一ことありまを京阪語をまてハ  
一ことあり決まて純粹ある江戸の言葉まてハあつたり一あり  
又いふちかごろ世上ハ「かなのくわい」またハ羅馬字會などいふいろハの  
會どもあちこちハ興りて我文章の改良とハ圖らまくる人々あり是ハ志ハ  
るべき目論見として且頼もしき事ともいふべきありあれ退いて考ふれば羅  
馬字とて文とかく事も假名文字のみと志て文をかく事も其人々の終極の  
目的ハあらざるべし何となれば我黨が將來永遠ハ企圖する所のものハ宇  
内の萬國と一統して一大共和國の有様とをなしかよハくだけ風俗ともまた  
政体とも國語とも同一ならしめんと望むありさあらんハ將來ハ我國  
語と改良して歐米の語ハ全うするかまたハ歐米の國語にして我ハ同うなき  
しむるか此二箇條の目的より外ハ終極の目的をならん而して歐米の開明

文化の我文明にまされることいふまでもなき事なるから彼國語をして我國語に全からしめんと望むべとして到底成得がたきことなるべしさればある博識の有志者たちも羅馬字會と設立して我國語として彼國語に全うせしむる階梯となさざる、事としてあらんむらめ論じてこゝに至るに及べば羅馬字會も「かなのくわい」もみな終極の目的ならて階梯なるよし明なるべしとあれ羅馬字の會の如きは頗る終極の目的にも相推したるものなるから學者博士の方々が相集會して研究さるゝもさためて當然とも思えるれど他のかなもの會の如きは言えぬ階梯の階梯として羅馬字とも文章とも書べき下稽古となまよ似たり已に下稽古をなすためなりせばなど今まこしく登りてまき捷徑よりしく始めざりける後羅馬字もかくべき者と種々さまぐなる工風状凝らしし假名文字をも書かん必要なし所謂二度手間の勞ならむやむしる羅馬字も記し得べき新文體と工風し出して羅馬字主義の有志者たちも其全會の力をし合えざる、方肝要ならむや所謂草冊子の文章の如きは最も平易にして流暢なり多少の改良を加へもせば万般の事

と志る一得べき新文體ともなり行かんは是もまた圖るべからむ假名の會の有志者たちがこのごろ頻りに用ひらるゝ消化しかねたる新文體の逆さまさる由もあるべしおのれの羅馬字の會にも入らねば假名の會の反對者もあらねど序あるまゝ圖らずして議論のこゝろ及べるものから假名も會の主旨の如きはあるひはおのれの意見と違ひて他とあらんやも圖りがたし假名の會の方々あまりふいたくお叱らせらまひと

脚色の法則

れよと小説の作者が架空の想像に成るものあり故に其趣向を説くお當りて此も原則のおきよ於て一向寫真と主眼と一と並列を講ぶるまゝ前後錯亂し脚色整えず事序續紛と一情通せを出米事あまり繁過る爲に因果の關係の察しがたき事もあるべく人物あまり数多く一爲に終結のつかぬもあるべし故にあらかたの法度と發して其脚色とを構ふること勿論肝要なる事ありぬ

小説を綴るに當りて最もゆるうせよまき入らざることを脈絡通徹といふ事あり脈絡通徹といふ篇中の事物巨細とよく互に脈絡を相通下と相隔離せざることをいふ事あり

實録紀行等ありて其篇中ニある事元來つくり物にあらずる故一四毎ニ一巻毎ニ新事事物をもく現れ物語の筋の轉換をこと猶としり行く車の上より四方の景色を觀るがごとしさるから一前段の事柄の中途より一立消とあり再び其結果を説きへる約束もあらずし他の因縁なき事柄の物語一遷り又前段の人物のいかゞ成行いや敢てくわくも説も盡きて更ニ他の人ニ及ぶふんど通篇脈絡離々として關係をためて疎漏されども小説にて之と異なり首尾常に照應せざるべからず前後かゝる關係あるべからず若し本と末と聯絡なく原因と結果と關係なくんべ之と小説といふ可らずありれども世上の事實と筆にまかせし書記せる實録に似て實録よりざる異一うる假作話といはまくの

曲亭の翁つゞ小説の法則を論じしへしく「唐山元明の才子等が作れる稗史の法のづから法則あり所謂法則といふ一主客ニ一伏線三一機深四一照應五一反對六一省筆七一隱微をなえち是のみ主客の此間の能樂といふ「シテ」ワキ」の如し其書の一部の主客あり又一四毎ニ主客ありて主もまた客なることあり客もまた主なることありと得む又伏線と機深の其事相似て同くからず所謂伏線の後よりなるをいへる趣向

あると數回前ニ此と墨打と一置なり又機深の下深より此間といふ「シヨミ」のありなりこの後一大関目の妙趣向と出さんとて數回前より其事の起本來歴とまこみおくなり金瑞が水滸傳の評注の「機深」作れり即ち機深をなす共「シタツメ」とよむべし又照應の照對ともいふ譬へ律詩の對句ある如く彼と此と相照し趣向の對と取るをいふ照對の重復に似たれども必は是をなすも重復の作者あまつて前の趣向に似たる事以後よりいりて後出をいふ又照對のわざと前の趣向の對を取て彼と此と照らしをなり譬へ船蝨蝨内が牛の角を以て戮せらるる北越二十村なる鬮牛の照對なり又犬飼現八が千住河にて繫舟の組撃の芳流閣上なる組撃の反對なりこの反對の照對と相似てたかづらを照對の牛をもて牛の對をるがごとし其物のたかづけれども其事の同くらゝを又反對の其人の同くけれども其事の全くらゝを又省筆の事の長さを後より重ていさざらん爲に必は聞てかなぬ人倫聞させて筆と省き或の地の詞ともてせすして其人の口中より説出をもてながらゝを作者が筆を省くがため看官もまゝ倦ざるあり又隱微の作者の文外に深意あり百年の後知音と俟て之と悟らぬんと水滸傳の隱微多うり李贄金瑞等のいへばさしあり唐山ある文人才



予「水滸と弄ぶ者多けれども評し得て詳し隠微を發明せしものよし云々」  
 右の法則の第一なる主客に關する議論の如きこれの特別の欄と設けて仔細に説明  
 すべきべければ惜しく評論をこゝに略して其餘の法則は評論せん

第二の伏線と第三の襪深とこれのれが前段のべたきたる脈絡通徹といふ事をば解  
 剖せしむるに過ぎざるあり總じて東洋のむかしの學者の其博識あると強記あると係  
 らず事物の道理をば綜括して之と名命くることと知らざるゆゑ其一部分の性質と

一箇々をば取いごし求て各其名と付せることなり伏線といふも襪深といふも其精神  
 を探り見れば只管趣向の脈絡と離れしめざらん爲なるのみをなち脈絡通徹てふ

一大總則の部分にしていふよりもさらぬ原則なり第四の感應第五の反對の如き巧  
 と求むるに過ぎざるものなりなまなか斯かるくごご奇と求めまく企てなば其本

尊たる人情世態とあやまることなからずや故に第四と第五の如き文章とめて  
 主眼とせる支那の作者の規律ふして我小説家を守りつべき法度とあらむといふべき

なり第六は省筆は事ふつきての敘事の法則と論せる條下に仔細に弁論をすべきべければ  
 此をもちこゝに略してこれを又第七に隱微に如きこれと法則といふべからず何

となれば假令小説の文外に深意なくともよく情態を寫して讀むもれとして感せ  
 しむる美妙に効力備りたらんよ其物語の小説なり隱微に間は寓意なきも敢て苦

しうらぬ事といふべしされば表面に意味は外に隱微に深意と寓するなんどの(寓意  
 小説)あらざる以上の(作者が身勝手乃樂ふて所謂道樂といふも乃なり小説として

此物あるも此物なきも些も損益なきことともいへん  
 己の總論にても論じたるが如く小説の幾多は法則と設くることと平に小説に讀者と

して従まざらぬめんが爲なるのみ故に此意とだに會得してなべ列よくだくしく  
 細則をば説明するふに及ばざれども我効推なる後進者流の向後の便利に供するにめ

次第に細則をも辨明せん  
 脚色と論ずるに際してまづ第一に辨すべきは古メチイと堵ラゼチイとの區別是なり

堵ラゼチイの悲哀小説と譯をべく古メチイの快活小説とも譯をべし悲哀小説の解  
 釋は己の上巻にて述べてこと快活小説の專ら快活なる事蹟とのみ叙しただを

をもて本分としからぬ滑稽諷刺譚話も含蓄なきる小説なり小説がなほ未熟ふ  
 て奇異譚の位置ありけること古メチイ(快活小説)といへる小説の專ら笑ふ

べく嘲るべき道戯一事のみ綴りいとして世を諷刺するを旨となせしが今所謂快活小説の大ふ之と異なる由ありまら必も一も諷刺洒落と其主眼をなさざるのみ間々哀切なる語談ときへ其脚色中ふ加ふる事あり我小説より例を擧げば公卿士傳も弓張月も快活小説の部類なるべし之を要する快活小説にて其篇中の主人公となるもの大團圓の場いりて身恙なく榮ゆれども悲哀小説之と異なり其結局近づくころ其篇中の主人公が墓なき最後と遂る由を其趣向とをなすものありされば今日の小説家の悲哀小説のうちふさへも幾々快活ある語談とき一えさみ又の諷刺ともまじふることあり蓋しやうふささるるときふ諷刺が終る倦むべければあり故に今日の小説ふはほとく堵ラゼイ(悲哀小説)と古メヂイ(快活小説)との區分判然とらざる如く殊に快活てふ文字の如きは頗る適えざる場合も多かりさればより近きころ英國の學者おふがしの弓張月またハ大團圓の如き小説を堵ラゼイ古メヂイと呼びしれ堵ラゼイ古メヂイといふ哀愁小説の義あり想ふに妥當の名目あるべし

絶筆ある快活小説と綴るふ當りて最も忌嫌ふべき條件といふは鄙野猥褻ある脚色

是より作者の見識低きときふ間々滑稽の種よく一み諷刺の料と求めかねていと賤しむべき事柄ときへ其物語のうちふ加へて笑と買たましく望める事あり一丸の藤栗毛金鱸の七偏人の如き是あり我維新前行たれし小説とて之と評されべきめて巧妙の小説おれども之を真成の小説視して更ふ評論と下をときよほとく讀むに堪へざるものあり蓋し「下がより」の物語多ければあり英國の小説家整ケンスの著する比ツキツク平パルスの如きは絶然たる快活小説の一種にて通篇諷刺一成るといへども決して猥褻ある脚色もあひれぬまら一箇一づある文字も蓋し滑稽の基くところの個個の事物にあらざるがゆゑありたよそ滑稽諷刺の秘訣は端嚴倨傲高尚あるものと粗魯賤劣鄙褻あるものと巧まらへて叙するよあり例は「つまらざるもの」「たゞ」「たゞううあるもの」「のやういひさし賤一づあるもの」と高尚あるもの「のやういひなすなんども笑と博せ入る一方ありあるひは老實ある人の粗忽ある振舞あるひは倨傲ある人物の「こまきさき」一「体裁等總て滑稽の料あるべし畢竟偶然の間違よりして發生せしむる條件より笑の種とあるもの多かり豈かあらむも淫事おもて諷刺の料とすべきを要せん

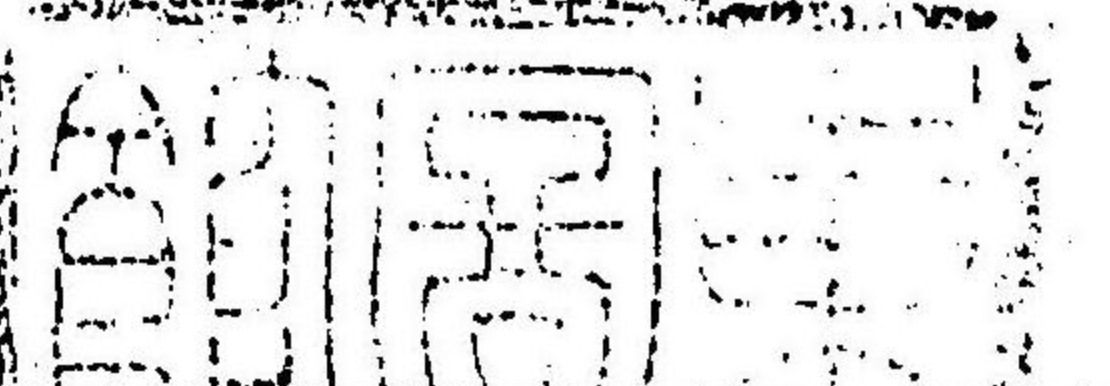
夫れ將來の小説の從來の小説とわれよりからを婦女童幼に媚ぶるよりいむしろ具眼者に訴ふるを其本分ともあまき事ゆゑよしや戯譚の小説ありとも美術家たるの資格に恥づべき脚色と思むべきの勿論あり譬へ巧妙なる繪畫といへども親子相あらびて観るに堪へざる醜猥の形容と寫しとらんよの之を美術ありといふべからず小説も亦るもまごのよひとく親子相あらびて巻をひらき朗讀するに堪へざるごときの眞成の小説といひがさかり世人あるひに論とありていへく世に鄙猥ある著作のいつるの之と賣る者あるが故あり之と賣る者の世にいづるの之と讀むものあるが故ありかこれば小説の鄙猥あるの其著作家の罪にあらで之と讀むもの罪ともいふべし作者の時世に相應して其情態と模寫するの之時世の人情いやしうして鄙野褻褻を喜びあへ作者のものまる小説中にも自然に鄙猥の脚色多かり是まかゝながら小説歴史が時世の寫眞鏡たる所以ありてまご是非もあまき事ありかし云々といふ論者もあり此論ひと通ることわりあれどもまご退いて考ふればいまだ確論といふべからず想ふに上文の議論のごとき婦女童幼に媚ぶるをもて其本分とあらしりける己往の作者の心事より拾九世紀に小説家の分説とていひとつとあしれよを鄙猥ある事柄に

も大概定限のある事ふて世の情態どうつしいだまよいはてかなえぬ鄙猥の事ありいふ可のらざる卑陋の事ありいえて叶えぬ鄙猥の事件の之と念するよ心と用ひてあるべく淡泊な模寫いだし餘の讀むものよ心々想像を得るに任まべきあり譬へ淫猥ある風習の盛行する之時世に在りたる穴隙ばかりて密會する男女も數あまごあるべきされども其風俗と寫さんとて只管房中の隱微とあばきて其相語らふ有様を仔細に模寫いだまふんどの是小説家の本分あらで他の情史家の本分より滑稽小説を著作せられべきまごのよひとく豈あからむも其脚色と下流の社會よとると要せん否上流の人物事件にかへりて美妙の戯譚とへ醸成あまべき料どもあるあり一尤派の戯作者流のものとより高尚ある意見もあまご只管下流の讀者輩の笑を買たまくほりせしうに専ら脚色と中流以下下流の社會よとりたり一は是に當然の事されどもいへ怪むべく訝しむる今の滑稽作者よしてまご新機軸といだまごことあまごひとまご陳套手段を取り鄙野醜猥ある戯譚をへ戯譚の本旨と心得つて我小説と改良して美術とあまごんを惹きあまごことあり若し小説といへるものが果して美術あらざりせば時世々々の人心とへ愧ばるべきあまごち足れりいと賤むべき筋ありとむいとみだらある諸

ありとも之と答むるふらるべきや。若し小説が之より反りて果して一大美術ありせば、一時一國の人心と感動せしむる力ありとて之を美術と稱し、がさかり己の上巻にも陳べごとく真成の美術といへるもの、深く人心を感動して冥々の間に其氣韻と高尚ならむる益あるも乃ち苟も此裨益乃存せざるもあらば其者のけつて美術にあらず。尋常平凡乃玩具あるのみ譬へ俗間もてあろべる。故に錦繪とかいへる物と、真乃繪畫ありといひ得べき乎。錦繪まことと美ありといへども、いまだるくしく之と以て繪畫に神髓を得たるも乃ちといふべからず。錦繪の果して真の繪畫なるに取ざるやと否と、其人心と高尚ならむるの力あるやと否と、因て決まるものなり。さあらん、画工の本分の人の氣韻と高尚ならむるに足るべき巧妙の繪と画くありて、唯うるわしう物の象徴画さいごをよめあらざるなり。小説家もまた之よりひとく其本分の情態と見るが如くは描いたて、讀者と感動するより外ならぬ。其ものたる小説稗史、人の氣韻を尚うをべた。故の大効力をなす。於て其小説は美術にあらねば、其著作も美術家たる驕号とて得る由なからん。若し作者よりて見識乏しく、我の明治の著作ありたのれ、文政の職述者ありけつて、美術家よりあらざるあり。

と自ら好んで謙遜あり、彼の驕号と棄んとせば、世の童蒙は媚れ、下流の社會もねれば、とてたのれいかでうの之を答めん。その免も角もといえ、まくのみ夫れ一時一處の人心と悦ばしむるの容易よりて、廣く人心と感動するの難きことあり。試し例を浮世繪よりとりていひ、あは、菱川師宣の繪の浮世繪の先進より、若佐又平の繪もつづべし。さればこそ當時ありて、師宣乃名の聲、知られて世の人妙手と稱へたり。さりとて師宣が、かきつりたるいと不手際なる浮世繪を、美妙の名畫といひたらん、世の美術家の合點を、蓋し此等の批評の如き、美妙と古雅との區別を、も弁別せざる。よ、出ればなり。是、因て之、伏思へば、一時一處の人心と悦ばしむるの容易にて、真の美術の至難なるを、得て察すべき事あり。かし、かくいへば、とて小説家の時の情態を、度外視して、たゞ高尚なる情態をの、想像をもて、案じ、いたて、之と、敵するを、本分とせと、敢て論ざる。よ、あらざるあり。時代物語と綴らまくせ、故、伐れ、條も、あかるべし。う、す、酸、酷、乃、物語も、多かるべし。こ、り、ま、是、非、も、な、り、事あり。うし、世、話、物、語、を、綴、り、と、我、生、息、せ、る、其、社、會、が、尚、半、開、乃、位、置、に、あり、な、り、殘、忍、な、る、人、物、も、多、かる、べ、し。櫻、葉、を、は、事、件、も、問、と、ある、べ、し。と、伏、思、は、な、ら、ん、と、思、ひ、て、皆、こ、と

く除き去るに寫しつゝたる物語の作者が理想上の物とし、當時の情態をいふべからざるをいふかよせしむるにや。いふに答へていふんとを撰る情話も叙せば、惨酷なる事件も語るべし。唯々之は叙するに當りて作者が充分其心と虚平ならしむるを要するなり。若し有りては小説作者が残酷の條と叙するに當りて自身之を面白しとめてよろこべる心ありなれば、其残酷なる物語のまをく残酷に流れ易く他の虚平なる心と有る具眼の人より之と見れば殆ど堪へがらざるものあり。一鄙野撰の條と叙するもまづその如く作者みづから隠微の情事をあはさうつさまく好めるときに作者の心事のあらむく其文の面に見らるるより具眼の讀者は得堪へざりて覺へる巻ともあはれうつかり畢竟するに、鄙野の情話もまづ残酷なる物語も敢てことごとく小説中より除き去ることと要せざれども唯あるべくだけ之と省きて我從來の作者の如く、徹頭徹尾一にゆるる物語の綴りいとして具眼の讀者と倦まぬのむきなきありち足れど、いふまくの三つの重麻翁の著作おどよ、頗る残酷なる物語もあれば、淫奔野合の情話もありされども我國の神史の如く、彼れ圍中れ隠微に類する鄙野乃事と叙せざるから、父母兄弟れ面前して朗讀をせども妨あし又英



國は著作家たる笠頭翁は小説の専ら男女情事としも物語れるもいと多かり花柳春話(マルトラバルス物語)に如き其一句ありき、あれ翁は趣向に鹽梅にが小説家とれおつらるを男女れ切ある心事を穿つも其圍中れ趣向にあり、隠微に涉れは態度に如き、總して之を省きざりて明白地に寫し、いふべきを只管切ある情話とのみ翁が如、筆の力をもて隈なく描きいづるにや。笠頭翁の情史の如き、其物語の性質得ざりし所以のもの、豈に書中の人物事件が高尚ありしよよるのみあらんや、其撰寫法の美妙より、枝の有形ある態度とつきて他の無形ある情緒をいもいとつまびらかに寫せしゆあり、我將來の小説作者の宜く此區別に眼を注ぎて其新作をもつべきなり。

序より我國の小説の序ともされ、強姦といふ脚色と殺りて神史の眼目とをもち、あり是世の情態のまからしむる所より作者の罪をあらせめれど、拙と趣向ありといふべきなり。若し情話と寫し、いふべきを強姦といふ一事件がなくては不都合といふ譯ありせむと、かゝるも、強姦といふあらねど、さながら其神史の主眼の如く、いふべき

強姦乃有様哉ハ寫しださるゝ要なきをなりあらえよ之と寫さすしと之と叙すべ  
 き方法手段ハ別いくらもある事あり譬ハ人物の詞とかりて其事ありたる趣とハ他  
 の人物ハ語らぬめあハ彼の猥褻ある模様と一も寫しださて事をむべし是兩全の手  
 段一しとあかしく一断しなるべし之類なる脚色乃改良尚此外も夥多あるべし又  
 我國乃小説にて男女乃心事と観く一臨めハかあらす國中乃事一及べり是除くべき乃  
 隨一あり譬「いままど招徠のせをもあれ」をためてこわい羞しいあどて嬉しい枕一  
 と等足あり想ふ此等乃詞は如きハ説いたさすともすむことなり又我國乃情話の  
 中ハかあらを下乃如き文面あり曰く「障子をたたとまめさりつ」といなる夢や結  
 ぶらん云々「其文章はかきかぬよのいろ」さまざまある種類もあれど要する所の  
 男女乃淫事と暗しあらしむる一外あらざるあり是また過たりといえまくのみ書中の  
 男女が野合乃次第を暗しあらせまくほりせるあらハ充分前後乃文章よ之と語るハ  
 便機あるべし堂のあらを一も障子ふきまを閉切るまでを叙せると要せん  
 因云ちかきところ狂言作者等が立案せる新狂言ハ世話物を見るふれほむね平  
 凡ハ脚色一して情趣一之とみれとみあり是まかかから狂言作者が開明

論者乃議論一感ひくいたまら殘忍殺伐ある若くハ淫猥陋劣ある脚色と除か  
 まくほりせるも乃から元米見識高きふあらねハ其除却一たる脚色一代ふべ  
 き清絶高雅ハ脚色とゆをもまたいかあるも乃あるやと得てさとするべうもあ  
 らざるから在来りたる狂言中より猥褻野卑ある脚色とハ除きさりたるも乃  
 一ひとしき味ひのあき狂言とハ提出一たる故ともいふべしされハ此間の世  
 語狂言ハ今の世態の寫真もあらねハ理想の社會のさまともいわれず作者  
 が刻苦の心情をハ表しだせる世態といふべしされハおと死果てハ適ハぬ  
 者がまた蘇生する事もあれハ改心すべうも思われぬ惡徒が俄一改心する本末  
 のあぬ事もあるあれ畢竟ざるよこの比の新作ハ今の情態の眞像とハ描  
 きだしたる妙處もあなれハ切ある情事を表出せる美妙の佳境もあること  
 なく情態情趣又あつら共一多しきものあるから其興あきハ勿論ありかし  
 純粹なる快活小説試論ハまくほりして覺えを冗長の議論一なりゆき支路一のミ  
 渉り一かハまた本論一たちもどりて今の所謂快活小説をなはち哀歎小説（堵ラゼ  
 古メチイ）の事ハつとて更ハ一言を費すハ一

哀歎小説にて最も注意すべき事ハ快活絶快の物語と悲楚哀切の物語との混淆塩梅をなすは是なりれよそ人間の感力ハ視察の力又ハ筋肉の力ハひとく其使用の度ハ一定限あるからあまりに久しく勞役して之と休まらざる事なくんハ竟し其基く疲弱りて一時其用となきざるべし例ハあまり久しく燦然たる日輪の光と見つめし後にハ燭火の光と見るといへども之と見ること能はざるが如し又香氣たかき香水も久しく之を鼻頭ニ接して其馥郁ハ慣累ナハ終ニ感ハがたき水ともなるべし感力もまた之にひとしく久しく痛切哀切なる物語をのミ聞なれなハ終ハ悲哀と感覺する心も次第ニ薄らぐのミか後ハ厭へる心もたこらん故ハ怒境の説話の後ハ絶快的なる説話を設け滑稽戯話の脚色の中ハも苦楚慘憺たる條を加味して以て讀者と倦まざらむるハ古今の作者が己ハ既ハ實踐ハ得たる手段ハして事あたらしう此處ハ説たよほまへハ限ハあらねど今あらためて作者たちハ忠告をすべきことこそあれその餘の事ハもあらざれども哀歎悲善の物語とまたみ代りハ綴るハ當りて機關を用ひてするが如くに悲哀の後ハ歡喜といだハ歡喜の後ハ悲哀といだして些も變幻不可思議なる美妙の手段と用ひむもあらハ哀歎悲善の調合加減ハいろいろ巧妙ハ出

来たりとも人を感ぜしむる事かたうり思はざるべうらざるあり  
悲哀小説に於るもまた然りいかに怒歎場が主なればとて徹頭徹尾悲涼慘憺悲しき事のミ多かりせハ讀者ついに倦はつハ一味ハ結局の悲善のごとくあるべくだけハ淡泊と且輕やかに叙すると要とす我國の小説中ハ有名なるハ挿節用といへる情史是なり其結局の悲善の如きハ頗る輕やうハ説きりたれどもなほ哀切ハ過るを覺にぬ式部が源氏の物語ハ彼の雲隱の巻とまうけと暗ハ源氏の速達とハ讀む人々ハよまらせたりのミ蓋し此邊ハ用心せハ才女が大筆の妙用なるべし悲哀小説乃脚色ハつさくハなほいふべき事ハまたあれどもあまりハ長々しく成行たれハまむらく筆をこまハ止めて他の論説ハ移らまくハ讀む人々ハ幸ハ論の到らざるハ咎めたまふな  
れよそ小説の脚色中ハて思まざるハからざる病とする者其數一ハて足らむと雖も今其重なる種類を數へて作者の參考ハ供するものからもとより盡したりといふべからざる時々ハ發明してみづから證識をすべしなり

(第一) 荒唐無稽

眞成の小説ハ荒唐無稽ハ非常なる點々怪事と認めるハ己ハ繰返ハく説置た

れはまた更ふことと對せず

(第二)趣向一轍

趣向一轍といはれざるやうなる趣のみ幾回となく續くことなり唱歌音樂も抑揚あけられ面白からず味も小説歴史のたぐひの變幻浮沈究るべき世の情態と寫せるものゆゑ此性質の必須ある才人とまつて知らざるあり

(第三)重複

重複といふ前の趣向に相類する趣向をふたたびいふことありこの我國の小説作者もあはく痛論せしことあるから口うまい論ぜすとも讀者も大方其理由と己ふ得知られし事あるべし

(第四)鄙野猥褻

此事につきても己まはく論つ鄙野猥褻を忌むといへんとて男女の情事を説くべからずといふふらあらずたゞ閨中の隱微に類する醜穢の事を綴りいだし自身甘心することなからんことと小説作者の望めるのみ

(第五)好憎偏頗

この小説の人物の上よいふべき事と脚色に關する事とあらねど序あるまゝ提出し來りてこゝに激言と贊すものなり好憎といふ作者が自作の人物に對する好憎なりこれのが架空の想像もて作設けたる虚構の人物と好憎するといふは何とやらん奇なるふ似たれど是人情の自然より決して怪むべき事とあらざる譽は實事師すなはち善長なる人物のあらす可愛くなりて話諺乃筋は都合より是非よこまなる行為と其人物がなす由とへ綴りて適はぬ折もまひて脚色をまげたためと善長しめんと圖るなんどの間々小説家のする事なりあつた小説家の上のまらで列傳家をどうもある事あり譬へ同じ難波戦は事を叙するお留りくも家康は傳は叙する作者の専ら家康と庇保護し豊臣乃記をもれするやから秀頼母子と偏愛し家康父子はこれなひと非なるやういひますべし事實をまぐるお如意ならざる正史に於るも尚かつ然り況てや架空の小説をやあゆくいせんもよくいんも作者乃心乃儘なゆから哉奉りたてて主公とせし其本尊乃行為とあくまで善長純潔と其反對は惡主公(惡形れ人物といふ)といひをあらあしく作りおさん元米自在乃事おしあれは作者



好憎れ偏頗ありなれば神聖をもあざむくべく彼乃燒燔とも走らすべき聖人君子  
 と幾人となし我明治乃世に出得べく彼れ傑出とも戦乗せしめ彼乃盜跖とも恐れし  
 むは殘忍非道れ惡人とも文明乃世に現し得べし我從來乃小説作者の最も愛憎の偏る  
 もれを蓋し作者が情態をばたきあり乃まよは傍觀して其趣とあり乃まよは象  
 する心得よくありたらんよ決して此辨れなき答あれども彼れ淺基なる童幼婦女子  
 乃嗜好の媚んどなしけるからさてこそ偏頗乃好憎をも自然に行ふ事とになりけれ童  
 幼婦女の淺基なれば善人なれば常正しく惡人なればいつも一邪ならめと思ふべ  
 ひれど善人よもなほ邪なる煩惱あり惡人よもなほ純善なる良心あり一時の發動する  
 事あり作者たるも乃かりためよも此理の心と注がをして其人物を造作せし情態人情  
 ふたつながら此人取乃も乃あらぬ奇怪乃も乃ともありゆくべし作者それ之を思へ

(第六) 特別保護

特別保護といへる事、好憎乃偏頗より生ずる事にておもまた人物に關するおとをり  
 上文乃理由よりて作者が主人公を偏愛することす、甚しきといたるをさるる只管  
 主人公身を庇護して危險乃場合に臨むことと必ず之と接ふおとあり悲哀小説にあら

ざるより、其主人公と殺すおとのもとなり成がたき事あるから之を接ふおとあま  
 あらねどあまり特別おとと保護して其危險をしも免るよ、其人物れ身れ上り常  
 一定まりたる事れ如く讀者お思はるよ、いと拙し譬へハ犬傳中なるハ士れ如き無  
 難無死れ神仙あり殊に犬江れ仁乃如き殺したりとも死ざるべし蓋し伏姫乃神靈と  
 いふ護神あるがうへに列王の助あれはあり畢竟馬琴の大筆にありたれ、こそ此  
 疾病よも心づかて彼の長篇とバ讀むことあれども若し他れ作者の小説ありせば、第ハ  
 九輯にいたり、比にハ人みお眠氣と催まべし英國の小説家にも之類をる者あり幸  
 チヤアドソンの如き其一例あり

(第七) 矛盾撞着

矛盾撞着の脚色の上にもいふべく、故事の上にもいふべし、今一例とあげていひ、新  
 編神稻水漸傳のそりの岳亭翁の筆よりて知足軒主人其續編と綴れり故に撞着の  
 趣向ありとも其大概の思すべきあれども一箇の甚き撞着あり讀者の興情を損む  
 所こと少あらむと思はるれば、こゝに提出して例ともあす、一岳亭翁が綴りたり、  
 篇中にてハ玉置現九郎と形容して色黒く骨たくましく眼つぶら云々とありあかろふ

知足軒が綴りたり一途後編の巻にいたれば色白く草筋通云々とあり豈はあえだ一さ  
撞着おらむ勿論出現の折柄に玉置の深山の樵夫あるから色黒かり一ももつとも  
あれども若一日やびりて黒かりせば其ことわりのあくてはかみえすよ一や年あまた  
歴られたとて武骨なりける荒男がいと風流なる好男子ふ豹變する由あるべきや斯  
かる撞着の多きときよ讀む人妄誕ふ倦厭して餘の面白き脚色よごに感觸さざるは  
ことともおぼし

(第八) 學識誇示

學識誇示といふ作者が學識と誇示する事なり老練の作者に此事おければ少年乃作者  
に間々ある事に足又忌むべきの隨一なり譬バ危急の場合に臨むといと長々しき  
古事と語らせ語るべからざる長者のまへに古語の講釋と物語らせあるひは人質に  
相應せぬ學問知識と有せしむる皆此類の疾病なりか我國の小説家にこの曲學馬  
琴もつとも此類の病に害めり英の空頭(ヘンリー)の如きも其少壯の著作に於ては間々此過失と  
賺せしことあり數コツト翁だ一彼の海賊の物語(バイレイト)にては多少此病を免が  
れ得て一て學者の難評をば得たりといふこととして作者が博學と知られざらんもい

と試みれば宜しく神紙の地乃文よ其瀾瀾の學識は其折々の便宜と見く讀む人  
々を倦ませぬやう心と用ひて叙ぶべきあり

(第九) 永延長滯

永延長滯といふあまりに物語の長びくことありこの全体の物語の長びくことといふお  
のあらずよ一の全体の物語のいかにほど長篇に渡ればとて作者の自在の意匠ともう千  
變万化の脚色とももの一讀む人々だ一倦ま一めを敢て不都合な事きことあれども  
彼の教師の手段と用ひて安し讀者を延引くもあまなり一果一のあまじきもの「まだ  
かまごか」と俟かぬたる讀者も次第に俟たなければ後の件の讀識と得聞かんとも  
望まざるべ一叔かくの如く讀者むらが忘れはくるとる比より其讀識といだせんと  
て讀者の注意の其折よ已に他の物よあるべければさまで佳境よも入らざるべ一此  
一條の例ともある入る一箇の笑かまご小話あり近きころの事あり新吉原の青樓一其  
といふ遊女ありて其とい入る好男子と其情郎といふしりけり此情郎たもへらく彼  
婦といふ充分わが術中よれといれ其情交乃密なること服漆の如くあら一むるこ  
の故意とあはらく縁さかりと倦々として終入る念をなます一倍き一むるよまよく

とあらうと斯く思ひ定め一かへ其日より一旬あまりの懸け音信をもちきりひりさるほどは彼の遊女のもとより伴の情郎とハ務とえあれ懸念いつこ二世とも盟ひ一かかゆあかく日久しく音信なきまゝ情郎の身異なりたる變事の出来な一なるかと種々苦心のつゝあるひに人々模倣をさぐらせあるひに匿名の書と送り其様子と一も尋ねるものから此方の計略中圖せりと獨ひうか打笑むのミ唯よのつねなる返辭と乃み月一兩度れくりかど後よの落書とぞもれくらむ一三四ヶ月をへ過去りけりさらぬだ遊女などの嫉妬の心の深かるからさくの餘所の花心移りてや時あらぬ秋の風のさちめめさるゝとあらんぞらんあおねま一やと思ふよつけ流石よすぎよ一睦言とわすれんと一とわすれかねつ人よ一られぬ袖の雨一坐敷被の乾く間なきこと己一三四月一及び一かどをほ情郎の方より一とらうよとの風の音信だ一聞得る由のあかり一かば流石の川竹の水性なる移るも早き糸糸の結目解さくまた更一他の情郎と淡からぬ縁と結びめめさるよりまゝ彼のさきの情郎とハ懸念へる氣もあらむなりぬさる程ふ以前の男の斯くといひかて察一得べき己一四箇月と懸念り一かハ時懸一とらととづからうなづきけふこそ女ふ面合一と悲喜哀歡

こもくある好活劇を演すべ一と揚々としくねもむさしが果しと功を奏せざりしといえども讀者の推しとまえん若一これ自信情夫よ一と其延滞の方略とハ適度一運用一とらんぬ此失敗もあるまゝさ一我小説の秘訣と一も忘れざりなるから失敗一ぬ希ふ小説の作者とる人此情郎を龜鑑と一と其物語と綴りたまへ

(第十) 詩趣欠乏

詩趣欠乏といへつて妥當乃文字一あらねどかり借用一とこ一載せぬたのれがいたんとする本意の傳奇の旨趣欠乏といふ事なり夫れ小説の世態の眞像は叙するものゆゑともまれに其脚色も淡々無味ふあり易かり故一此弊をまくなんとの時一傳奇中の趣をへ其脚色中一調合一と人を倦ま一めざる工風とあすべ一譬ハ暗闇の如きもの是あり餘の推しても知るべ一

(第十一) 人物よ一と屢々長き履登と語ら一むる事

この省筆の一法あるのさかまゝ趣あるものあるから若一長篇は小説ありせば一兩三回の用ふるとも敢て苦一からぬ事あれどもあまり一數々用ふるるときは讀者も「又か」と歎息せん殊一三四章も一くの又六七章一むぐるが如きなるべく稀なること

望まひけれ  
脚色よつていふべき議論をもとや大方に盡しされども亦ほ時代物乃脚色よつて  
別いふべき事なきあり繁雜一さふあつるとれそれ新第一章と下まうひ  
て別い時代物と論評すべし

時代小説の脚色

時代小説の脚色は論ずる先だつて時代小説と歴史との區別をきこく論辨する所あ  
るべし蓋し此區別とあらざる限りけつし時代小説とあしがとければあり議論ある  
ひに重複し類する事もあるべし讀者希ふに見ゆるしとまへ  
世の人あるひいへらく歴史小説の裨益は正史の遺漏を補ふあり此効用のあるが  
故に歴史小説と玩讀するもの世上に少からぬ事なれども若し彼の正史が發達よく完  
全無缺の者とありあつて遺漏なき答あるから世間の小説稗史のさぐひ世の人々  
に愛玩さるべき其根源と失ふべしさすれば架空の新案奇想の工風と費す小説家の  
竟し其蹤と絶すべしと實に麻コウレイ其人の如きもこの感ありしものと思され往々  
其著書に其言語に之に類する議論と陳べて小説稗史の絶跡すべき理由と論ぜしこと

加アライルの翁の如きもまたええだく文飾ある文をものせ一人ふてありき是ふ  
因て之を觀ればいまだ虚實の二字のともと史家と小説家とを分ちがらかり彼の歐  
ルタル數コツト翁の如き時代物語の大家ふて常は正史上の事實をもて其脚色の  
起本として其小説を編みたりしが之を一讀せば其正歴史も異なる所以の  
灼然とし明瞭なるべし思ふ此差別の生ずる所以の唯ふ事の叙するの詳細なるは  
文飾の多きとのよありざるなり小説の正史と異なる所以の如意に脱漏を補ひ得  
る事と親昵と擅しをる事とあるあり脱漏と補ふとの正史中脱漏せる事實を作  
者の想像とも補ふことといふ親昵といふ作者が小説中の人物(正史中も在る人物  
あり)の言行と叙するよきためて精細周密して讀者として作者と小説中の人物と  
朝々暮々相親昵するの感ありしむるをいふあり正史家の事と叙するべし事件毎に其  
由て来る所あかるべからず而して小説家ふたての大い之と異あり實際に於ては決  
て成し得がたき人心の解剖とも自在ありあるひに擬み出入するを許されざる上臆  
の深闊ふも闖入して其上端の舉動と説きあるひに門戸の開かざると機障子の内外  
を論ぜむ其景況を寫しいださる我小説家の自由ありて敢て其由來とくくくく

望まひけれ

脚色よつぎていふべき議論のもとや大方に盡しなれどもおほ時代物乃脚色よつぎて  
の列よいふべき事さまじくあり繁雜さふあたるをたそれと新第一章と下まうけ  
て列よ時代物と論評すべし

時代小説の脚色

時代小説の脚色は論する先だつて時代小説と歴史との區別をまこく論評する所あ  
るべし蓋し此區別とあらざる限りつこく時代小説とあしがなればあり議論ある  
ひの重複し類をる事もあるべし讀者希ふに見ゆるしとまへ

世の人あるひにいへらく歴史小説の裨益は正史の遺漏を補ふあり此効用のあるが  
故に歴史小説と玩讀をるもの世上に少からぬ事なれども若し彼の正史が發達よく完  
全無缺の者とありあへばまじ遺漏なき苦あるから世間の小説評史のさぐひに世の人々

に愛玩さるべき其根源とハ失ふべしさすれば架空の新案奇想に工風と費す小説家の  
竟に其蹤と絶すべしと實に麻コウレイ其人の如きもこの感ありしものと思えれ往々  
其著書に其言語に之に類をる議論と陳べて小説評史の絶跡すべき理由と論ぜしこと

欠

MISSING

加アライルの翁の如きもまたええだ一く文飾ある文をものせ一人ふてありき是ふ  
因て之を觀ればいまだ虚實の二字のともも史家と小説家とを分ちがらかり彼の歐  
ルタル數コツト翁の如き時代物語の大家ふて常ふ正史上の事實をもて其脚色の  
起本として其小説を編むなり一がさりとて之を一讀せば其正歴史も異なる所以  
灼然とし明瞭なるべし思ふ此差列の生ずる所以唯ふ事の叙するの詳細なる  
文飾の多きとのさよのあらざるなり小説の正史と異なる所以如意に脱漏を補ひ得  
る事と親昵と擅する事とあるなり脱漏と補ふとの正史中脱漏せる事實を作  
者の想像とも補ふことといふ親昵といふ作者が小説中の人物(正史中も在る人物  
あり)の言行と叙するよきためて精細周密にして讀者として作者と小説中の人物と  
朝々暮々相親昵するの感あり一むるをいふあり正史家の事と叙するや一事件毎に其  
由て来る所あるべからず而して小説家なては大小之と異あり實際に於ては決  
て成り得がたき人心の解剖とも自在なあるひに狭み出入するを許されざる上  
の深閨も闖入して其上端の舉動と觀さあるひに門戸の開かざると襖障子の内外  
を論ぜむ其景況を寫しださぬ我小説家の自由ふて敢て其由来とくくしく小説

いなきこと要せざるあり

さああれ小説と正史との間の最も重大なる差別といふは脱漏は補ふといふ事外ありざるべし今一例をこゝに挙げて其理由と証明をべし讀む人試み佛の帝那ボレオン第一世の夕餐と終りたりといふ事は思へ此事實を實に疑もなき事實ありて必無ざる事のありしありしと之と正史中みぬべきに「くへし」事實ありといえざるべからむ其他帝が其后如せフヒン皇后と去るふさささち幾多の悲惨の對語ありしかりふも佛國史と讀むたるやかしの常な想像を所されどもさうして件乃小事件を事々しくも正史の中みて詳叙ささまく企てあはま繁雜の機となくべしさああれ其實此等の事實は大人人心と感ぜしむるものあり彼の拙劣なる野乘を讀まざる小冊子の歴史と開いて讀者が倦厭せぬ所以のものに單に此等の野史のうちふ彼のくだくしき事實とさへ數々詳録せしむるべし想ふに此等のくだくしき些細の事實を玩讀して敢て倦むことなき所以のものに全く讀者が平生より彼の那ボレオンの為人深く追慕してたかざるより苟も那帝の因縁ある當時の事蹟を知得る喜ぶさあがら帝と身親しく相接するの感覺ありきてこそ愉快と感ずるされざるは此等の小

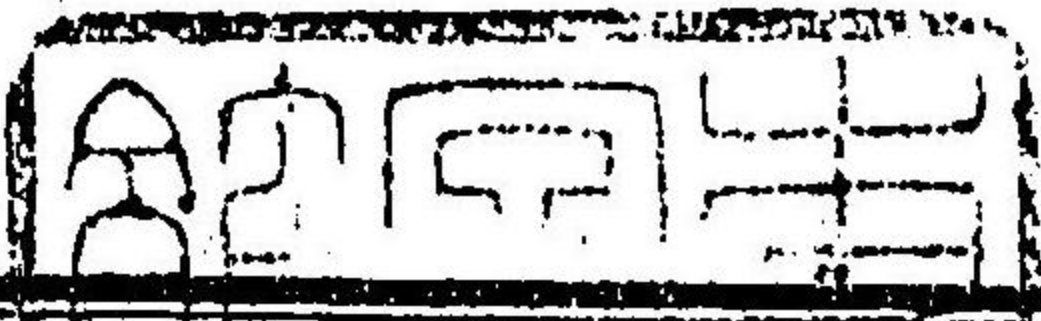
事實と大歴史中み詳録して繁雜ありとの嘲味を免れんとするに至るのむごふて非常の才筆あはざるより得てありがさ事ありかゝるふ小説家之も異あり若し那ボレオンの事蹟とのべ其後如せフヒン皇后の離別の一條より帝が麻利イ翔イ夫人を娶れるに至る事柄と仔細を讀まざる企てあはまづ格別な緊要あはざる時と處より説起して次第に細微の模様と叙へ愈々出て愈々妙なる佳境に讀者と誇ひつゝ、さながら當時の實況と今眼のあたりに見るが如き夢幻の思想と抱かむる是小説家の技倆になん故に斯の如き小説を讀者が讀むとささし那帝が深宮の奥にありて侍女侍童等と如伴と興へ談語談笑をささし其應答の模様を更なり何等の諸柄と侍女等が帝に對ひて語りたるか如何なる談話の末に於て何等の辭にて那ボレオンが私に眉根と擧めぬかまで歴然として知るゝなり或は皇后如せフヒンが胸に溢るゝ怨をのゝ賜と斷つ怒と制して幾度となく服に滲る涙と袖に拭ひしやんどの細微の事實もささるゝれみか或は談話の長かるゝ如伴の冷るゝ空りし事より細色牛酪と何が故に食する人もあはまゝして空しく草に残またりしや或は鏡に一片をわたる人前を粧ふためよまひて其が食せしやんと此些細の事實に至るまでも洩らさ



て窺ふ事を得べし、かゝる瑣細なる事實をさへも限なく寫し、いさすこと、正史のまゝ得ざる所ありて小説の得意とせる所ありん

其他風習衣裳の如きも正史の中より盡くが如く寫し、いさす難かるべし、小説家にして之を寫さざることを便宜の多かるものか、活風俗史とて、近かり、數コツト翁の如き、最も時代小説の體を得たるものあり、馬琴京傳の如き、其名、時代物語の作者、あれども、其實世話物の作者、近かり、蓋し馬琴等の叙せる所の當時の風俗衣裳、あつて寛永以降の風俗と、一ぼんやり、叙したる、一外、あらねばなり

時代物語と綴る、當りて最も注意をべき重なる事項、あるべく、正史の裏と描きて、致と省略せる事あり、致と正史に記載したる事あり、裏と正史に知られぬ事あり、曲亭翁の「張月」彼の保元の軍を模倣をたゞ、陰影の、叙したりし、外傳の旨趣と得たる、ちかかく願る妙ありといふべし、又朝比奈巡島記にて、北條時政が奸佞ある職、肺肝とさぐり、いさして仔細に寫したるものと、妙あり、其他、使客傳、美少年録のたぐひも、此点よりして論と下せ、まづ大方に、純然たる時代小説といふとも、可あらん、畢竟、一時代物語の目的、風俗史の遺漏と補ふと、正史の缺漏と補ふとの二点あり



り故に、此二ヶ條の目的の其一と、ごふ違ひ得ず、其本分の、さあ、ち、足るべし、是非、正史上の、大事、實、く、正史上の人物と、引用せる、あも、改む、されども、あるべく、だけの、風俗、遺、事、成、方、と、一、あ、ら、び、存、して、其、物語の、體、とも、なり、な、ば、最、も、完、全、と、稱、せ、べき、あり

正史物語を編む、一、際、と、て、作者が、あ、ば、く、瞭、し、易、き、疾、病、一、し、して、た、ら、ざ、れ、ども、其、重、な、る、一、第、一、の、年、代の、幽、離、第、二、の、事、實、の、錯、誤、た、よ、び、第、三、の、風、俗、の、謬、寫、是、あり

時代の幽離、一、史、家、だ、か、間、々、之、と、行、ふ、事、あり、妄、誕、假、空、の、小、説、一、の、些、少、の、問、違、ひ、あり、た、れ、ば、と、て、敢、て、苦、一、か、ら、ぬ、や、う、な、れ、ども、決、て、望、ま、し、き、事、一、の、あ、ら、ね、ば、及、ぶ、べ、く、ご、ひ、年、代、も、幽、離、な、か、ら、し、む、る、と、要、を、る、な、り、蓋、し、年、代、も、甚、し、き、相、違、謬、妄、ある、時、も、其、物語の、美、妙、あり、て、真、一、通、る、ふ、も、係、ら、を、讀、む、人、具、眼、の、人、な、り、せ、ば、ち、ま、ち、妄、誕、ふ、こ、ろ、づ、き、て、彼、の、夢、幻、界、の、道、遙、して、古、人、の、親、妮、を、る、感、覺、を、亡、失、お、ま、せ、る、こ、と、ある、べ、け、れ、ば、

あり、我、從、米、の、小、説、作者、の、此、相、違、と、意、と、せ、ず、公然、よ、む、人、一、う、ち、む、か、ひ、て、其、無、要、ある、と、説、き、し、も、あり、曲、亭、翁、の、如、き、の、さ、す、が、此、点、も、注、意、せ、し、か、ハ、大、傳、と、い、ひ、巡、島、記、と、い、ひ、假、も、時、代、物、と、稱、する、者、の、い、さ、ま、て、甚、し、き、錯、誤、の、あ、し、但、し、翁、が、得、意、の、作、る、使、客、傳、の、此、病、も、多、少、見、に、ら、り、し、と、記憶、し、居、れ、り

事實の錯誤は正史上の事蹟と誤る事あり譬は善長の人を悪人の如くいひあし奸惡の人と善人の如くいひあす等をもて此類の錯誤に入るべし我小説家も此弊多し馬琴翁の如きは頗る此弊と矯ること力と盡しゆる人あり是實に除かざるべからざるの疾病あり何とされば正史の事蹟あらび人物の裏面と叙するは時代物語の本旨あるに若し其事蹟と人物の表面に己に甚しき錯誤ありあは其裏面ある事蹟に如きは勿論虚妄あるものあればあり假令脚色の巧妙ありともまた風俗の謬誤あくとも此事實上の錯誤ありていまだ時代物の完全なるものと云ふべからざるも些も事實に依頼しずしてまつた虚構假設にてたる人物事件と土臺として他は風俗れと詳精に寫しいざを如ざるあり

風俗の謬誤は時代違ひの器具調度もくは衣裳粧飾もくは飲食物等と寫しいだしあるは當代のありざりける風習あんど状正々しく物語の脚色に加ふることあり譬は足利時代の人物に煙艸を喫せしめ三線をもてあそむしめ此條時代の人物に鳥銃と放しめ鎗を用ひさする等はあり其他慶長年間には婦人に島田番と結はしめ大振袖を着せるあんども皆此部類の杜撰といふべし之より甚しきもの尚あるべし今

其一斑と例とをれば風俗は謬誤の前後事實は謬誤にひとく時代物語は大過失あり此過失をして除かざれば時代小説は目的を得て遂ること能はざるあり馬琴翁乃大筆あるも此一点の過失多かり否此過失と除かんとてかつて力めたり一事あかりさあしをいむべき事ありすや

### 主人公の設置

主人公とは何ぞや小説中の眼目とある人物是あり或は之と本意と命くも可あり主人公の負數より定限あり唯一個あるもあり二個以上あるもありされども主人公の無たことあり蓋し主人公たらしんは彼の小説にて必要ある脈絡通接といふ事さへほとく行ふを得ざればあり

主人公は男女の別あり男性ある者と男本意といひ女性ある者と女本意といふ夫れ小説の人情を語るものあるからそのつから男女の相懇と観かざるを得ず是小説に男女の本意ある所以なり今例と舉て之をいさし馬琴の俠客傳にては小六助則が男本意にして捕姑摩坂の女本意なり水滸情史にては久松が男本意にして阿茶が女本意なり餘り推して知るべし以上は早し本意の唯一對の設置は一例なり



たゞ讀者と感動して非常の注意を促がせしむる非凡の資格を有したるものなり。醜惡奸邪の人物といへども得て主人公とせざるべしなり。美少年録の主人公の如き金瓶梅の主人公の如き皆此例とせざるべしものなり。或る泉阿若の如き容貌醜惡なる女性をもて其本尊となすも不可なり。但し醜惡なる人物もしくは怯懦なる人物も主人公となすことゝ思むべきなり。何となれば此等の醜惡なる本尊の唯一讀者の感奮と牽起をの力なきのミならむをなかくし讀者をして其醜惡なる事蹟としん知ると嫌えしむる傾向あり。なりきりあれ滑稽の小説の比等の種類の主人公を用ひてかへりて大功と美を著する事あり。故し滑稽の著作に於て之を用ふるも妨をひれど他の著實なる小説のつとめて之と思むべきなり。

醜惡奸邪の主人公とせざるに敢て妨げをといひたれども奸邪の主人公を設けしとせしむる成べく之に照對せる良主人公と作ると要とす。馬琴が美少年録と綴るも當りて美少年録宋之助等一照對せるは杜四郎成勝等以てせしも妙々章一子魔土六一對せる孝子志士六あるも時代鏡一藤波由縁一對せる白山雪若あるも皆此必要より来りし者なり。蓋し重し脚色の雜駁を要せられざるべし。特り小説の脚色のみをしす總して美妙の技

術に在ては脚色の統一と趣向の雜駁とを要するものなるよし其脚色の周到にして通篇の脈絡に通徹せるとも趣向に雜駁の性質なくあるひは單一醜惡なる奸邪の人物の身の上のみ毎篇毎章を綴りいだしあるひは單一賤むべた卑屈の惡徒の事蹟をのみ斷もなく寫しいでなす讀むもの終るべし。或る巻と讀み終るも堪へざるべし。譬へ人の刑せられて頭と鼻木に懸るる、や其最先の一日より男女老幼貴賤の列なく皆争ふて之におもむき織のごとく集り来て其醜觀を見るといへども一二三日と經るふ及べばみな一様一擧避してまた其頭がいふも更へ其鼻木だも見るもの稀なり。若しこれ人の性質たる珍奇と好む一切なるから物の醜美と善惡とを問ひ試むるに及むべき。て其奇なる状のみもくあうべし。とて醜惡と好むの念善美と好むにまさるの稀なり。否うつくしきをめでたしむる我人間の天性にて他の醜さためてたしむる僅し反動なり。變則のみ元來正當の事あり。あらねば之を愛くことも早かるべし。是小説一善惡の兩主人公をからざるべからざる所以なり。曲亭馬琴の知己ありける琴魚といふ人の著したる青磁の石文といへる冊子の馬琴の校閲と經たりしものにて其文章も拙からず且其趣向もあきあからねど其全篇の主人公とあるもの趣向て醜惡卑劣一て是も讀者の愛

良心と喚起をすることあらざるから最初の三四巻と終りころのほど一讀とえら  
 ん執心なり其男本尊たる名紳劇齊(松井長巻と翻せし者)のいふ及むす女本尊たる  
 阿れきをえりめ其他の人物のいたるまでも悉皆陋劣の匪徒のみにて行往進退一舉一  
 動たゞ讀者として忌嫌へる心と喚起せしむるのみ其中一熊野丹藏といへる人物のみ  
 の頗る正蕙の人質されどもこれまた前の劇齊等の強寇非道一匹敵する良主人公とい  
 ひがたかり是此冊子の過失として作者の平生誠むべき一大欠典といふべきものあり  
 主公と造作せる二流派あり一と現實派と稱し一と理想派と稱し所謂現實派の現  
 ある人を主公とせるあり現に在る人と主公とせるは現在社會ありふれたる人の  
 性質と基本として架空の人物をつくることあり爲永春水とえりめとして其流と汲む  
 人情本作者のみ亦此流派の者あるべし所謂理想派の之異あり人間社會あるべき  
 やうある人の性質と土堂として架空の人物を作るものあり現實派ありふれたる人  
 と材料とし理想派のありべきやうある人を材料とせしその相異なる要點一ふん然り  
 而して在べきやうある人質と作るよもまたかのづから二方法あるべし所謂先天法  
 (波濤法)と後天法(歸納法)とあり先天法といふは已に定斷せる理想上の性質と仔細  
 分析解剖して以て篇中あらせしる主公の性質を造ることあり曲亭論の主人公の  
 此法より成りたるもの多し八犬傳の八犬士并に巡島記の三傑は如く最も著明の  
 例あるべし何とされハ犬士の仁義禮智忠信孝悌といふ形而上の性質を細く解剖  
 分析して形而下の場合に應用せしめかして作りたる人物あり語をかへて之といハ  
 八行といふ無形のものとは有形の人擬するあり巡島記の三主公も之をなす  
 義孝の勇といへる一徳性と特異乃一個人の上を表明する者あり源冠者義邦の仁と  
 いふ無形に性質と有形の一人物の上を應用する者ありまた光仲の智といふ  
 形而上の人質と形而下の人擬するあり想ふに先天の方法たる頗る面白き手段  
 といわれど作者が充分意を注ぎず斟酌折衷となきる時ハ人間に似て人間あらざ  
 る異様の怪物を造ることあり八犬士傳ハ主公がさあから聖賢其人に如き希有異様  
 ある人どありしも蓋し哲學者の理論とて其根據とせざるべしかといへばとて  
 先天法を以て非とせるにあらぬものなら唯此法も(時代小説と綴るに當り)  
 歴史上に已に名状されし人物を以て作るにえとざる不可なる事あり譬ハ朝比奈義孝  
 の如き現に歴史上の人間にて架空虚観れ人物あらねば之をなすべしと考へ擬造

分析解剖して以て篇中あらせしる主公の性質を造ることあり曲亭論の主人公の  
 此法より成りたるもの多し八犬傳の八犬士并に巡島記の三傑は如く最も著明の  
 例あるべし何とされハ犬士の仁義禮智忠信孝悌といふ形而上の性質を細く解剖  
 分析して形而下の場合に應用せしめかして作りたる人物あり語をかへて之といハ  
 八行といふ無形のものとは有形の人擬するあり巡島記の三主公も之をなす  
 義孝の勇といへる一徳性と特異乃一個人の上を表明する者あり源冠者義邦の仁と  
 いふ無形に性質と有形の一人物の上を應用する者ありまた光仲の智といふ  
 形而上の人質と形而下の人擬するあり想ふに先天の方法たる頗る面白き手段  
 といわれど作者が充分意を注ぎず斟酌折衷となきる時ハ人間に似て人間あらざ  
 る異様の怪物を造ることあり八犬士傳ハ主公がさあから聖賢其人に如き希有異様  
 ある人どありしも蓋し哲學者の理論とて其根據とせざるべしかといへばとて  
 先天法を以て非とせるにあらぬものなら唯此法も(時代小説と綴るに當り)  
 歴史上に已に名状されし人物を以て作るにえとざる不可なる事あり譬ハ朝比奈義孝  
 の如き現に歴史上の人間にて架空虚観れ人物あらねば之をなすべしと考へ擬造

て其言行と製作をみるにたまたま不審なる手段といふべし已に前條にも論ぜしごとく  
 時代物語の目的たる史に脱漏せる事蹟と稱ひ現に其人に親昵むごとき一種微妙の感  
 覚とハ讀者に與ふるふ外あらざるありとあるとあるとちみ意匠をもて著ては徳性  
 擬しとらん其物語は朝比奈義考の現に歴史の上であらえれる朝比奈義考といふ  
 おつららむ同名異人ありといふまじくのみ其實際は効績ハハらくおき其理論上もつ  
 きていへば斯く歴史中の人物とハ作者が專斷の意見をもちて所謂先天の手段を用ひて  
 自儘につくるハ非事あるべし否第一に肝要ある時代小説乃神髓とハ志却おしるも  
 のといふべし近きところ矢野文雄大人の纂譯せられ一經國美談といへる書ハ智と徳性  
 と情緒とと三俊傑を擬しとるありとある博識が評されたり此事をたえて然らんハ  
 おまり面白きこととハ思はず何とされハ彼の以ハミノンダス邊ロビダスハ輩の現  
 正史中乃人間ふて假設の人物とあらざればあり  
 後天法(歸納)の前とおつららむ作者が想像乃力とて此人界におあるべきやうある  
 種々の性質をハ撰集めて程よく之を調合おし以て人物と造るは法あり故に此法を用  
 ふる作者ハ重々實驗と觀察とと其必須乃手段とと人々の性質の原素とあるべし種々  
 れ性情をハ造れるから前の先天派乃作者は如くにあまりお極端なる空理にこりり  
 入らしくもまれ人間状ハつくる程よのいならぬあり英ハ數コツト翁ハ之をえと  
 十八世紀乃小説家ハおほむね此派の者あるべし笠原翁乃如きも頗る此流を汲むを乃  
 似たり

現實派の前之二派に異なり現にある人と主公とををるあり梅厩の丹次郎源氏物語乃光  
 君の如き即ち是なり春水翁の時代ハ丹次郎其人ハ如きも乃ハ幾個も世の中におあり  
 となるべく又式部乃自の時代ハ於てハ彼の光君に似たり一人現に貴紳中におありしお  
 るべしされハこそ曲學の和學者おんどの源氏物語を評論して時世と諷刺せし書と  
 いひ其篇中におある男女乃如きもみちとれハハ時ハ人と表せしものどといひつらへ  
 是はなほだし誤謬ハて彼式部乃自が現實派の作者たりとあらざるものあり之  
 と要するに現實派ハ其門に入るハ易くして其室にお登るハ難く理想派ハ其門に入るハ  
 難くして其室にお登るハ易なり其故いかよとされハ前者ハあり乃まことの人情とハ寫し  
 いたまよとまよとをるゆゑおあがち作者の工風とてて完美完善の標準をハ製作をハ  
 必要をハまよとるハ後者の之ハ反して醜美善惡曲直正邪總ハて作者が理想にまよ  
 四十五

其工風ふいづるがゆゑにまづあらかたの獨斷も醜美乃標準を定めおきて叔善惡れ人物と作り設けると必要とをまかして件の標準として若し充分に高尚ならむと脚色をまたがつて卑しくなり若しまた高尚に過たるときふに人間に似ぬ人物と作りいだすると間々あるあり是第一乃難幾しあまじき標準に過不及なくんべ其餘の作者の意匠ともて造作すること易うるべし現實派の之に反して入門の彼も苦勞多かり物に喩へく之のゆへに現實派の人間の形を盡く盡工乃ごとく理想派の天人と盡く盡工乃ごとく人間の形を盡く得るものにあまたあれども盡く得く神入りたるもれば妙し天人と盡く得るものも或は盡く得て人を感ぜしむる者も多かるべし蓋し虚實の相違のまうらむるものなりかま

上巻なる小説の主眼の章下は於て已ふも幾分論じたり如く小説中の人物を作るに當りて最も注意と要すべき事は作者の性質を掩ひ蔽して之と人物の舉動に上に見えしめざるやうを事あり自己の性質と材料としく架空の人物と作らんとすは自然ふおちり質れ人物のみ幾人となく出くるゆゑ其物語の趣さへ終らうとすは思へるまは讀人もまた興味失ひ彼れ夢幻界の遊ぶが如き佳境と覺ゆること能はざるべ

一初心乃作者が著述類の間に此疾病ある事なり七偏人并し和合人の如き其脚色の面白けれども此疾病のあるが爲に他の藤栗毛と相並べ其優劣と論ずる時に雲環月籠の差あることいふまでもなき事ありうー何とされ七偏人中に道樂者や和二郎一人を除くの外に總して同質乃人間とほとんど同一人の如く思へるとなり類え友と集め同氣相求むといへど斯やとまでにはおはだしく言行双つあがら相同し人間あるべしとの信がたかり若し肩書の人名おくんべ七偏人との名目のまに篇中をまか二三人れ人物の外に見るものおからん蓋し通篇の言論行為の概して同軌同脈に七人乃人物れ言行と思えれをさかから作者が獨語のごとく思へるればあり物に喩へく之をいひ彼乃乙女子等が競べる役者百面相といふ玩具に似たり百日笠と被らすれば石川五右衛門の容貌となり坊主笠と被られば横川覺範の面となり蜻蛉笠を被られば横廻一與二郎とあり島田笠と被られば白拍子花子とある其容貌も異なれども其人の常に相同つくつく見れば此れ彼も芝翫乃容貌に外おらねばたゞ女童れ淡く眼と涙まほる由あるれと決しく大人識者として其奇ふ感ぜしむるに堪へざるなり

若し夫れ作文の至難技なり論文といひ記文といひ其結構と布置の塩梅おのく工風を要する事ありて孰もあらかのあらざれども我小説の至難中乃最も至難なるもれあるから他乃尋常の文章の如く作者自身の感情思想をたゞありのままにあらせし得て以て足れりとするものあらうて力めく作者乃感情思想と外息えざるやう掩ひ藏して他人間の情合を千變万化極み見るが如くみ盡たいたし活るる如くみ寫しいたせし其本分をいなきれあり物み諭へて之をいなき尋常の文章家の宜しく老練ある演説家比如くあすべし自己が満腔の熱心だ其文に上りたりとし得て讀む人々を感動せしめ其本分も其妙技も共達したりといえまくりのみ小説作者の之より反して辨士に似たるの最も拙く人形造り似たるの益もつたなしたる造化兒が天下乃衆生と弄べるか如くよきをべし止むと得ざる老練ある手品師が數間を離れ無情の器物をかけるし又の跳しむる如くよせし或の其妙みちかまるべし詮る所の小説作者と其人物とに關係を讀者に知らしめての不妙極あり是眼目乃秘訣よまかりふも小説を編ましくせし等閑よまべからざる大事ふをん

敘事法

敘事とは何ぞやこゝ所謂敘事といひろく紳紙乃地と總稱してまかいふなり故に人物事蹟の經歷と叙するの簡略を要する時あり詳細と望むべき折あり元來豫定するを得ざるいへどもあるべく繁雜に涉らざるやう讀者を以て倦まぬめざるやう注意をべき勿論ありかゝるは是時時代物れ小説などよ當時の形勢と人情とまづ讀者に梗概とを知らせざるべからざる必要あるうらまひと繁雜な織と厭ひてまづ折るの不可なるべしハ大傳れ發端の長々き歴史の物語あり數ニツト翁乃時代物れの概略を二三章乃事實話あり蓋し此必要よりいでなるべしきやれ巻頭ふ長けし事實話乃話とのみ叙し米れハ讀者を倦らすは倦むべされハ別に好手段と察しただして此必要に應をべたあり馬琴が美少年録を綴るふ當りて當時の形勢情態とハ地れ文章の記しもいなきを彼れ大蛇をしていはしめハ實に好手段といふべたものあり其全篇れ巧拙はまづらくおた作者乃苦心と推測れハ新説美少年録 いふ書こそ作者が一世乃奇を弄せし新趣向ありといふべきされ



馬琴の所謂省筆乃法もまた叙事法に一手段あり適宜之と用ふる時其効用ある  
勿論あり今くだくたて厭ひて細説せし讀者みづから之を思へ

形容と記するのありるべく詳細あるを要を我國の小説に如きに従来細密ある挿繪をも

て其形容を描いたて記文に足らざるを補ふから作者もそのづら之に安んじ

景色形容を叙する事を間々怠る者少からねど是をばたさ誤あり小説乃妙の特

り人物とて活動せしむるよとまらざる紙上乃森羅万象とて活動せしむるを旨と

するも乃なり文中に雷とて鳴たためか一の書中の激浪怒濤を以て宛然天よさかど

よ一の驚とて響らしの梅花とて薫らしむる是小説家乃技柄れ一ありて人物の

態度を寫して非情の物れさまと寫さざるの猶昇天乃龍を畫れて雲を添へぬもの

とことし

人物乃性質を叙するに二箇乃法ありかり命じて陰手段陽手段とに所謂陰手段と

あらはし人物乃性質と叙せしめて暗言行と舉動とをもて其性質を知らざる法なり

我國の小説者流のわらむね此法と用ふるも乃なり陽手段の之に反してまづ人物の性

質をむあらに地の文もて叙ししめて之と讀者とをせかくあり西洋は作者の概

さて此法を用ふるもの(概世士傳第七卷那以那姫の性質と叙する條下と見よ)想ふ

に後者と用ふるに前者を用ふるより難かるべし蓋し後者(陽手段をいふ)と用ひんと

すればまづあらうとを心理學に綱領を知り人相骨相乃學理と一も會得せざれば叶

ぬことなきにわれ兩者は優劣にいりて未だ勿卒に斷言をせしむるも乃あり

作者が機々の手にもて兩者を折衷して用ふべきなり陽手段を用ふるに其宜しと

得ざるよとよの妙機と濁らすれ道失あり陰手段を用ふるに其宜しとみ過らざれば

人情乃骨髓は談にがかり作者たらん人の東西古今の歴史と関りてまづ其得失

と考ふべし

此論いまだ盡きざれども書肆のため急がせざる限ある日限に限をた論辨

とて得盡き入りも思ひざるから一團筆とこと止め更し拾遺論とてはす

る折漏れたる議論を補ふべし續入議論の至らざると其文章乃整はざる

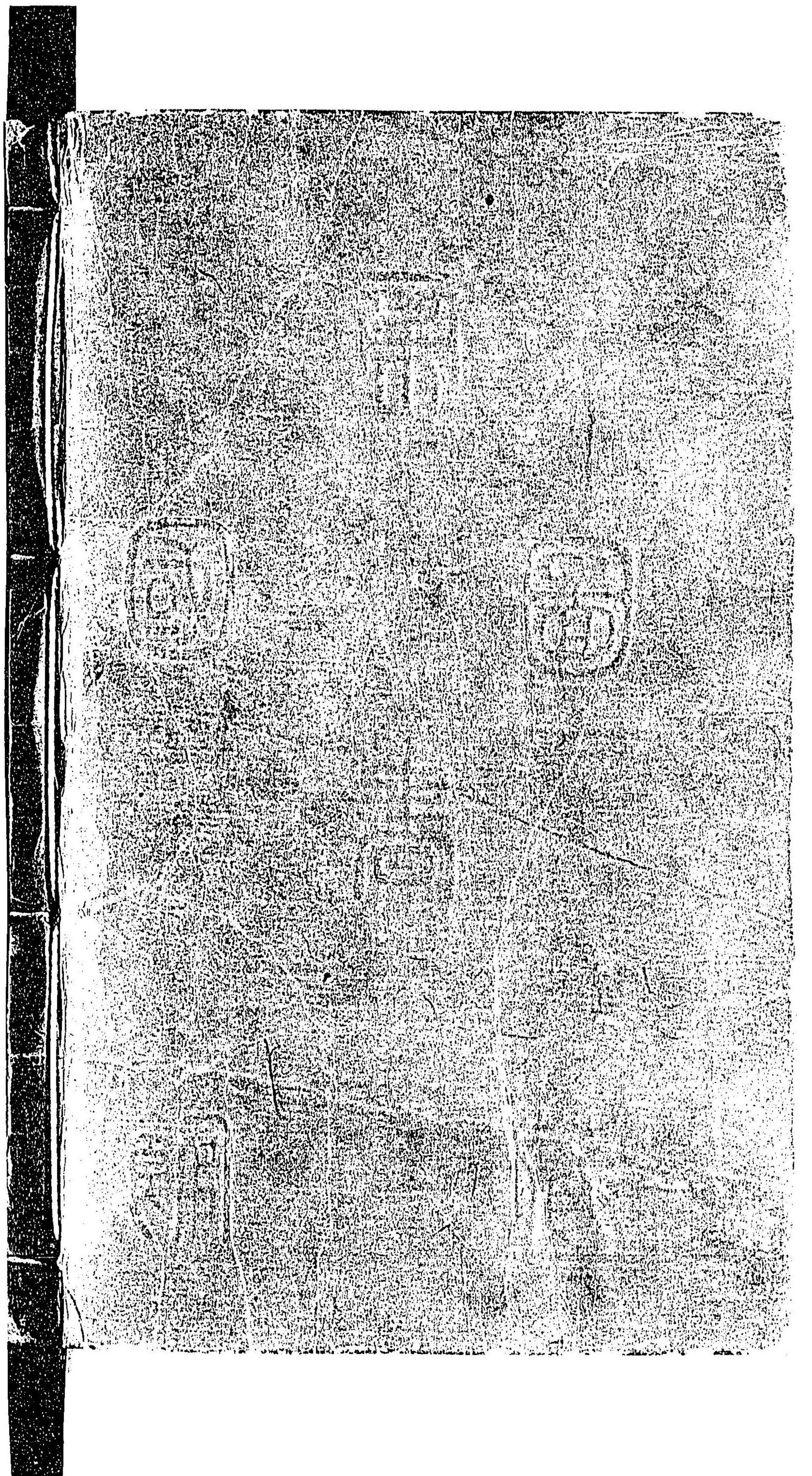
とをまひて答めたまふ事なくして異同を論ぜし其所見と著者乃鈍耳に聞

まぬらまはらぬかたよりか頃をからんあな惶縮

67  
136

小說神髓下卷終

小説神髓下卷終



6  
136

神髓  
小説

084751-000-5

6-136

小説神髓

坪内 逍遥 / 著

M18

DBA-0095

